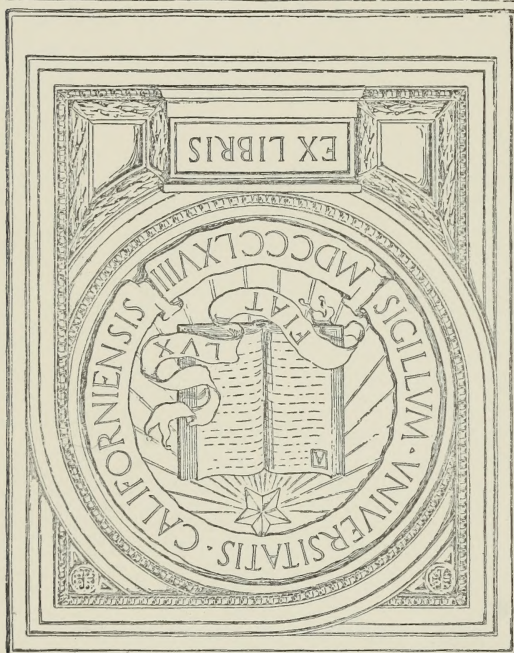


Digitized by the Internet Archive
in 2012

ORIENTAL
COLLECTION



UNIVERSITY OF CALIFORNIA
MEDICAL CENTER LIBRARY
SAN FRANCISCO

春陽堂藏版

第一冊

註頭
國譯本草綱目

Li, Shih-chun.

B-4136

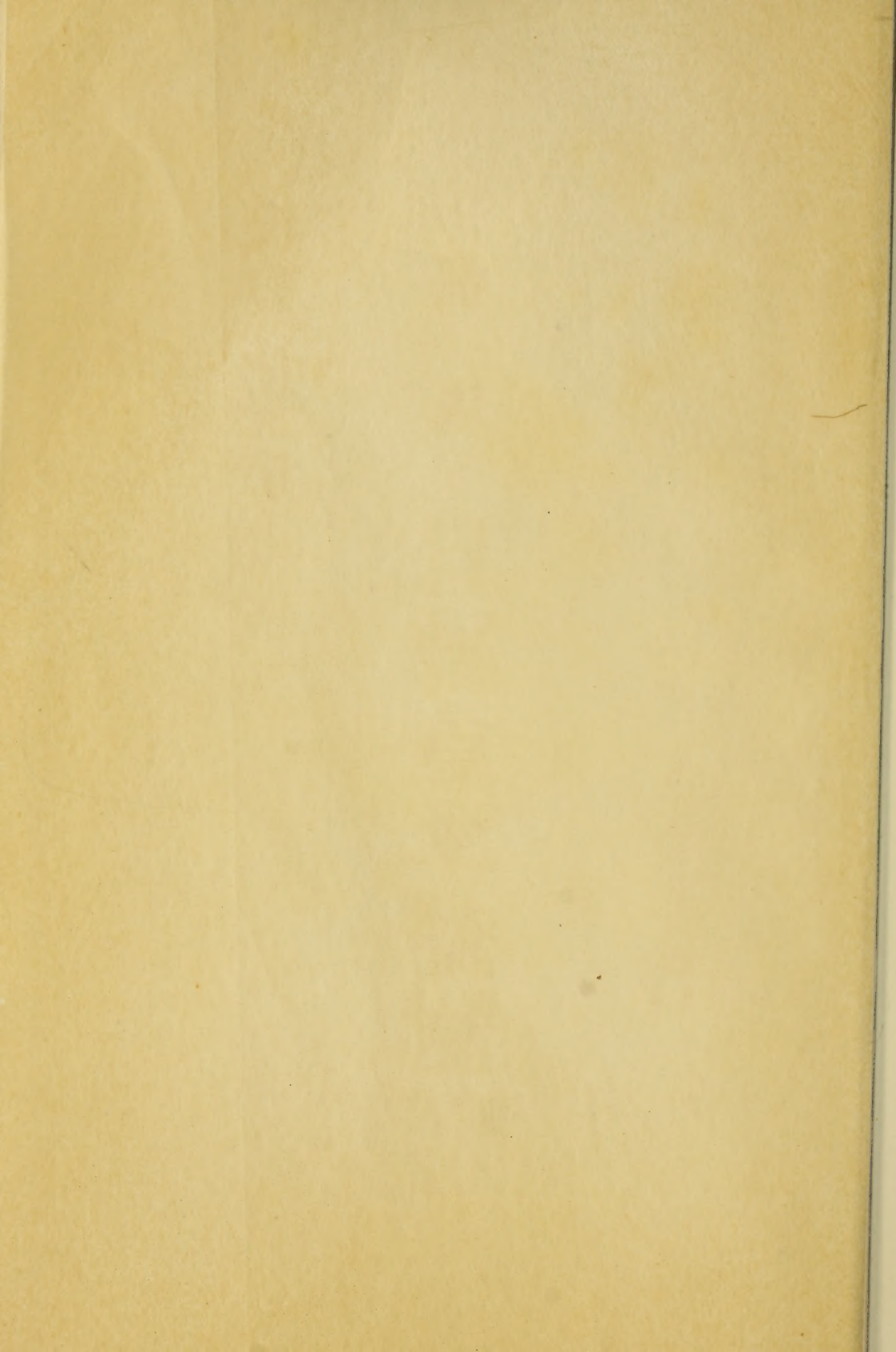
春陽堂藏版

第一冊

註頭
國譯本草綱目

日-4136

Li, Shih-chun.



譯	考	考	考	考	考	文
定	定	定	定	定	定	定
問	問	問	問	問	問	問
監	監	監	監	監	監	監
修	修	修	修	修	修	修
•	•	•	•	•	•	•
原	原	原	原	原	原	原
著	著	著	著	著	著	著

鈴木	矢野	岡田	脇水	牧野	木村	白井
眞康	村野	田信	鐵五	富太	博昭	光太
海一	幹利	利郎	郎	郎	昭	郎

理學博士

明

李時珍

R127.1
A8.2
L6933p
J52
V.1
1929-34
O.C.

寫 眞 説 明

昭和二年二月、其前年米國の W.T. Swingle 氏が本草に
關する古籍訪求の目的で來朝した際、氏の依頼に依り、
吾が内閣文庫所藏の萬曆庚寅一日本天正十八年・西曆
一五九〇年一初版本草綱目、所謂金陵本の一部分を撮
影したものである。

第一・二葉 兪州王世貞撰序文の首・尾各一紙。

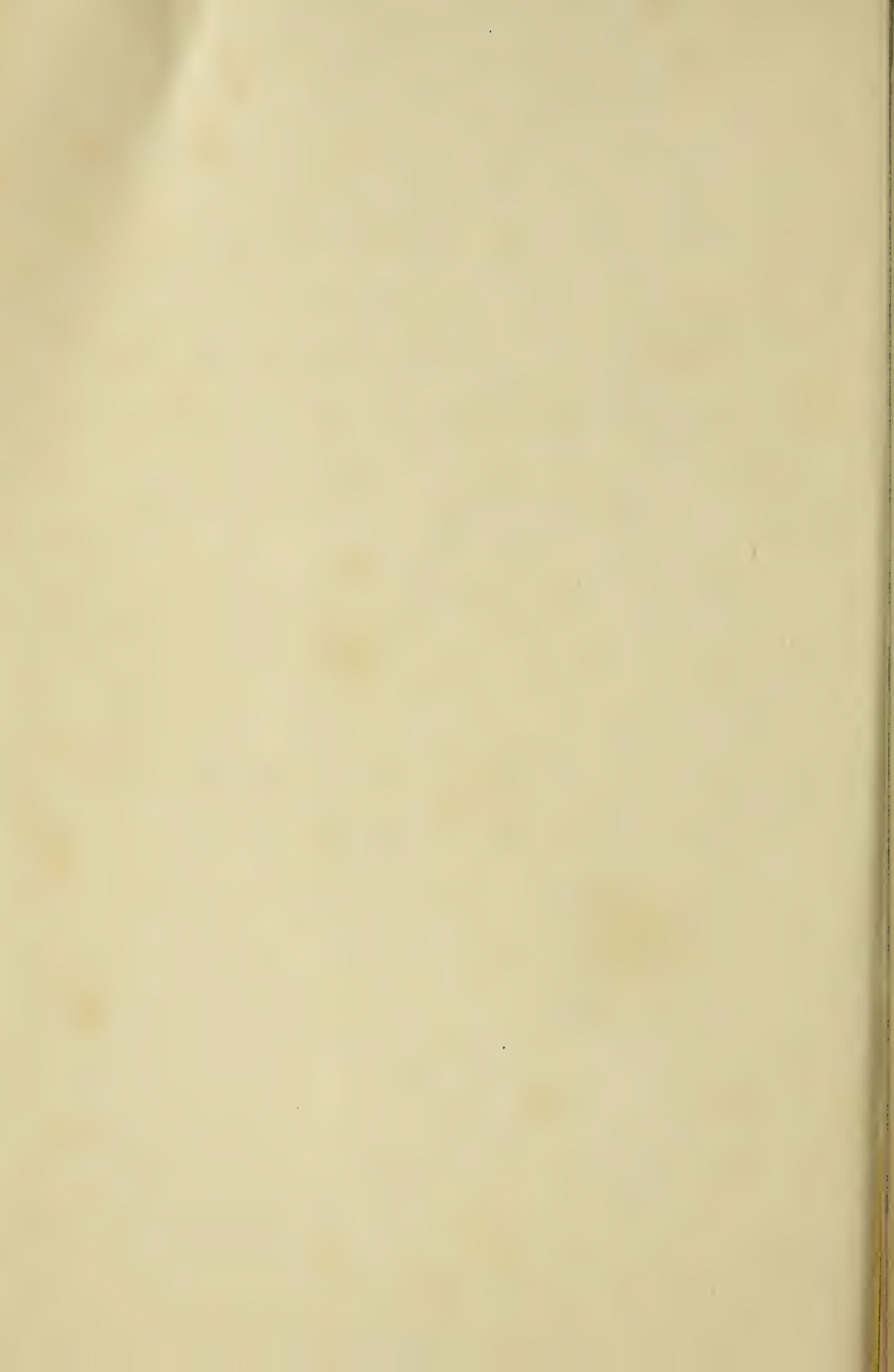
第三・四葉 轉書姓氏。特に初版のみに存するもの。

第五葉 本文の一部分、序例の第一紙。

第六葉 本文の一部分、穀部玉蜀黍の條。

第七・八葉 附圖。金石部・穀部の各一部分。

金陵版本草綱目は、支那に於ては早く已に亡佚し、世
界に現存するものは、内閣文庫所藏一部の外、京都恩賜
植物園大森文庫所藏一部、伊藤篤太郎博士所藏一部、及
び二百餘年前、和蘭人 Georg Eberhard Rumpf 氏が支那より
齎し還り、現に柏林立王圖書館に收蔵する一部、都て四
部に過ぎぬのである。



曉貌也。潭然，津然也。津，津然也。譚，譚也。

子余，山園。謁子留飲，日窺其入。

僅，景星耳。楚，楚也。陽李君東壁，一日過。

稱華辯，字稱康析。寶玉，稱倚頓，亦僅。

故洋寧商羊，非天明莫洞厥後，傳物。

紀，龍光。知古，劍規。寶，寶也。明，明珠。

本草綱目序

皇鑑

洲王世貞拜撰

萬曆歲庚寅春上元日舟州山人鳳

玄如子雲者昔

室無當血鑿之以共天下後世味太

何辛都茲集哉茲集也藏之深山石

后言悲博古如丹鉛后言後之人也

博文機之石必訪實卜于方者舟州

本九卷
卷之十
卷之十一
卷之十二
卷之十三
卷之十四
卷之十五
卷之十六
卷之十七
卷之十八
卷之十九
卷之二十

卷之二十

太醫院醫士男李建方

高第

同閣

應天府儒學生員黃申

黃州府儒學生員男李建元

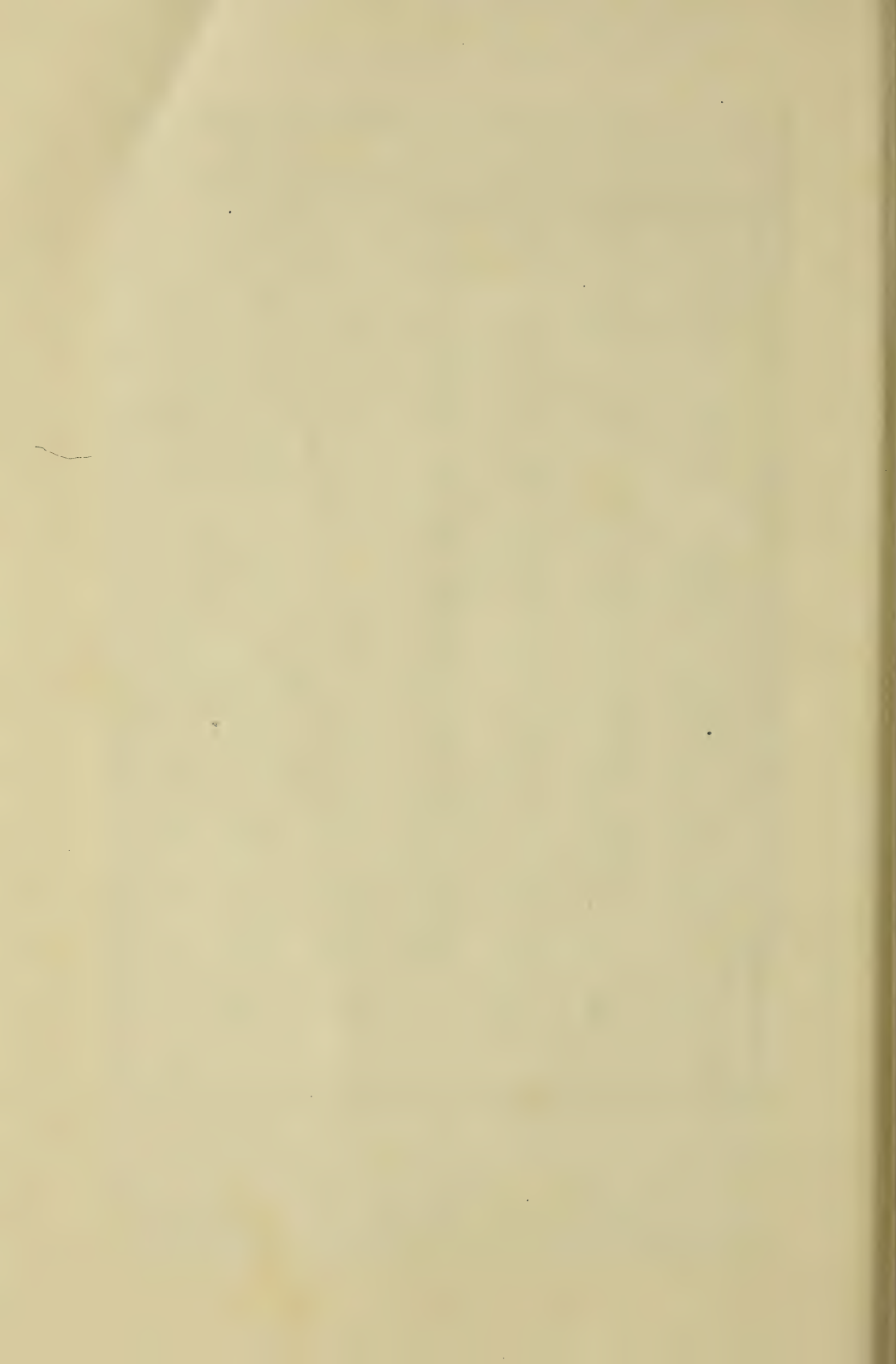
校正

雲南永昌府通判男李建中

編輯

勅封文林郎四川蓬溪縣知縣男李時珍

輯書姓氏



金陵後學胡承龍梓行

荆府引禮生孫本楷書

生員孫李樹勳

生員孫李樹聲次卷

生員孫李樹宗

蘄州儒學生員李建木重訂

米別錄

正

梁別錄白米中

一黃

根

葉氣味

王治小

便淋

瀝沙

石痛

可忍

湯類

飲時

米

氣味甘

王治無

毒

中

胃

珍時

米

氣味甘

王治

調

中

胃

珍時

米

氣味甘

王治

調

中

胃

珍時

集

解

王

高

梁

一

釋

名

王

高

梁

一

王

蜀

泰

昌

綱

方

加

附

方

新

小

便

通

止

喘

紅

散

根

汁

治

小

便

止

喘

滿

燒

灰

酒

治

難

有

效

珍時

張

一

珍時

功

同

珍時

三

三

三

三

三

三

三

銀

金水

金石部金類附圖



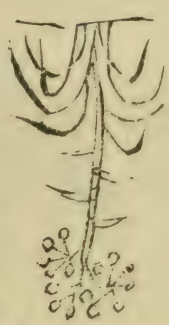
黃銀脂煥錫

金山



州縣生孫李樹宗
府縣生男李樹宗
墮林郎(茶)溪知縣

九十四



秋
稻



秋
稻



秋
稻



秋
稻



秋
稻



秋
稻



秋
稻

秋
稻

秋
稻

附圖
秋
稻
類
圖

頭註國譯本草綱目序

項分説レテ歷代ノ名醫碩學ノ諸説ヲ參輯評論シテ自ハ是識
八百九十二種ヲキ一釋名集解元宋王治格治明正徳時方七十
土歷代ノ本草ヲ經テ諸子百家七百十餘家ノ書ヲ緯シテ二物二十
草綱目ノ書ヲ明ノ新州ノ名醫李時珍東醫ノ編ヲ輯スル所ニ係リ漢
ヨリ名物産ニ亘リ人世必須ノ處子同智識ヲ基礎トスルヲ就中本
就テ一其名稱形狀產地效用法等ヲ考テ漢土ニ於ケル醫學術衛生
ニ不充ニ生念治却病ニ関スル動植礦ノ天產物及其製法ニ
醫碩學ノ研鑽増脩シテ今日ニ至リモ一ニ其内容ニ於テ主トシ
本草ノ科ハ漢土原史時代ニ創テ後漢ニ世ニ登錄セテ歷代ノ名

任ニ昨ト雖モ瘡ヲ起シ絶ツ續ハシ余息ハ能ハズ同志ヲ鳩令手
ハ本書留註國譯辭條ノ事ヲ以テ子ニ囑セラル子漢子罪大其
數ナリ子句ノ海解ハ易カラザルナキ由ナキ春陽堂主人茲ニ慨
本知國子孫ハ之ヲ來セバトスルハ今ノ庫ニ何ニシテ然レト入テ估
ノ近時歐米ノ學者此書ヲ注目シテバノ講決スル事漸ク行ハレヨ
ラシニ其意ハ余ハ密ト受セリ然レトモ明如玉如何ニカ先哲ヲ敬ミ
羽衣退シ此有用ノ書ヲ棄テテ顧ミサルコトナキ如ク可國ヲ美テ
ルコト容易ナリトモ明治時代ニ入リ漢文ヲ好ム所ハトサナシ漢子講
川氏時代ニアラフニ漢學ノ隆ナリト爲メ原書ニ就テマノ講決ス
物産家ノ輩ト出ツルカレバ國利民福ヲ増進スルニ與ニ力アリナシテ

醫方類聚
 天正十一年
 五行運六氣
 大考一
 以三
 集錄
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

返され激し議論も、その紛端の多くはこの點にあつたのだ。難關の扉は、かゝつて所謂瀰瀰を分つは、如何にも容易なことでなく、支那の學者たるに歴代の學者の間、屢に繰を經て記述するところ、かゝる舛誤がその都度加はつて、層々積まれ、數へ難き傳、版、刻、學者の説、記述、その難、簡、單、の、は、行、か、ぬ、の、で、あ、る。その全體との結構として、太古以來、各時代の、各、籍、は、必、し、それ、も、國、語、の、相、異、と、い、ふ、だ、け、な、ら、ば、さ、し、て、問、題、は、な、い、苦、だ、が、本、草、の、典、籍、は、必、に、それ、で、あ、る。

而も近代人の訪問を遮つた極め、て頑なな鐵扉であつたのだ。記述の難解が實ある。それは、その訪問の目的からいへば、殆ど重要意義の乏しいもので、先づ第一に難關である。或は科の如し、何れに、か、か、る、の、内、容、に、向、つ、て、研、究、を、進、む、に、乏、しい、の、で、さ、へ、嘆、息、さ、れ、て、關、心、を、本、草、の、典、籍、に、學、術、的、に、實、用、的、に、も、近、代、の、智、識、を、刺、戟、す、る、多、く、の、事、實、を、蘊、ん

昭和四年四月

理學博士

白井光太郎識



ニサレハム

區ノ勢力モ亦國利ヲ起シ民懷ヲ救フ於テ補ナクハ下
ハ醫方藥物ノ精髄ヲ咀嚙スルヲ得テ入リ實ニ地ニ應ジ用セハテ平
以テ其事ニ當ルカリトナリ大方ノ讀者此書ニ由リテ東洋ニ發達セ

たの筆を起し、首尾完全を耳氏、舊藏本一は、博士の激發あり、吾邦斯學の權威者、白井光太郎博士のたであつた。幸に辱を得の、井上通泰博士の腔の間に、心血を獲て、傾け、然として孤志を、振ひ、遂に譯稿

○ 子 卯

[illegible]

容と、その國語、文章と極めて密接な關係がある。それ等の學問が近代文化の世界に凡そ、支那、古來の學問で、諸般の文化、科學の範圍に入る方面は、多くは、その學問の内に由なしとはいはれない。文化の過渡期に際し、本草が危く置き忘れたのも、全く理

うな有様だから、吾、邦文化の過渡期に際し、本草が危く置き忘れたのも、全く理
ほ往類、似の誤を免れな。水等諸儒に著し、進むも、終に要領を得やうの
ない場合が屢ある。益軒、若、水等諸儒に著し、進むも、終に要領を得やうの
を反對に讀んだものや、一つであつて、原う。單なる點、劃の字、句の誤は、際限がない。就中、立
甚しいものは、傍訓とて、一つであつて、原う。單なる點、劃の字、句の誤は、際限がない。就中、立
に肯せらるる苦惱な典、籍が、國語の異なる邦人に、容易に、取扱はれやう、わけは、固より
ない。如何に苦心澹々であつたか。現存の種人、たつたもので、あるが、起原し、發達した支
那に在つて、學問、主として、支那の文字に、頼り來つたもので、あるが、起原し、發達した支
は、百、般の學問、主として、支那の文字に、頼り來つたもので、あるが、起原し、發達した支
離つて、吾、邦に、傳はれた斯の學の有様は、どうであつたか。明治、文運の打開已前に

一、振假名。やや六ヶ敷い文字には振假名を施した。藥名、病名、術語等の讀音は、宛

理、義解の一門に就ては、監修、白井、私註、私註を以て入られた。

意、義解は、一に監修、白井、博士の註、並に顧問、考定、各専門諸家の審接に仰ぎ、地、附會するは、頗る危険な譯とて、あゝ、それなら、いふものがあつて、原語のまゝに存置して、内容を表すべく、適、當な譯の語、全く、見當らないものがあつて、強ひて新語、造語に、不、譯。病名、術語等の特殊の語には、神農以來の古代語が多、く、その含蓋され

家、仰いだものである。

人、に解し易きを要とした。藥物、標名下の和名、學名の註記は、すべ、て監修、考定諸、本、文の意、味を解するに紛、錯を招き、勝、難があつて、ある。こゝに、概、して直譯なるものは、て、現代語を用ゐ、解した。直譯の方、正、確のやうにもある。こゝに、概、して直譯なるものは、一、譯、文。舊本の疑、誤は、各種刊本、並に原著者の引用の典籍と、參、校、刊、正、し、譯、文は、す

で、ある。

凡、て白井、博士の懇、切、周到なる提、擧、の下に、大、略、左の如き要、を以て終、了し得、た、士に請ふ、て、親、しく監、修、の勞を、惠、するの、金、諾を、蒙、り、こゝに譯、業、は、頗、る光、明を、得、て、

モ、其本文ハ第二版ノ和刻本ニ據リタルモノナレドモ、其圖畫及崇禎版本草綱目小引ハ承應版ヲ採用
 及圖畫ヲ新刻シ、之ヲ寛永版江西北本草綱目ニ附加セリ。之ヲ承應版本草綱目トス。註國譯本草綱目
 正セリ。承應二年、寛永版江西北本草綱目發行肆出彌次右衛門此書ヲ得、崇禎版本草綱目トス。註國譯本草綱目小引
 ル免レズ。是ニ於テ、明ノ崇禎庚辰、我寛永十七年ニ第三版武版林錢模ヲ刻セルモノナレバ、頗ル粗拙ナ
 珍著ノ脈學ニ關スルモノ三種ヲ附刻セルノミナラシ、其圖畫ハ初版ヲ模刻セルモノナレバ、頗ル粗拙ナ
 刻ハ寛永四年初春、京都ニ於テ發行セラレタリ。而シテ江西北本草綱目ハ初版ノ字ヲ訂正シ、時
 畫ノ漫漶ナルヲ訂正シ、別ニ奇經八脈ヲ攷ハ、脈訣攷ハ、頻湖學ノ三書ヲ附刻セシモノナリ。此本ノ和
 ヲ得ルコト容易ナラザレバナリ。江西北本草綱目ハ、萬曆癸卯、即我慶長八年ノ開版ニシテ、初版之
 刻本ヲ擇ビ、之ヲ得ルコト容易ナラザルヲ爲シ、江西北本草綱目モ、唐ハ已ニ現今稀有ニ屬シ、和
 リ、最初ハ本草綱目ノ初版ニ就テ譯出セシコト金タリ。然レドモ、初版ハ現今アリタリハ稀
 頭註國譯本草綱目ヲ作ルニ就キ、成可ク正確ヲ期スルヲ爲メ、底本ヲ擇ビ、誤謬ヲ減スルコトヲ圖

頭註國譯本草綱目ノ底本ニ就テ

尤も多とすゝる版行の事に従はれ組、版、感、謝、意、を、篇、に、多、く、記、す。
に、資、を、投、じ、て、版、行、の、事、に、従、は、れ、組、版、感、謝、他、の、手、数、に、多、く、記、す。我、儘、を、容、さ、れ、た、芳、情、は、

昭和四年四月八日

駒込 榎 柳 庵 鈴 木 眞 海 誌

(記)

ヲ參考シ、加フルニ洋名及羅丁名ノ對照シ得ベキ者ハ之ヲ記入シ、以テ學者ノ參考ニ便セリ。(礪水
 備ノ書ト稱セラフル。然レモ百餘年前ノ著シテ、洋名及羅丁名ヲ缺ナス。頭註國譯本草綱目ハ此書
 本草綱目物品ノ和名ヲ考定セラルモ、本草綱目啓蒙アリ、小野蘭山著ハ、所ニシテ、最モ該博
 及輯書姓氏ナリ。此輯書姓氏ハ、第二版以下ニハ、省キテ載セザレバ、其舊態ヲ見ルガ爲ニ之ヲ掲グ。

進本草綱目疏	01
重刻本草綱目小引(崇禎庚辰第三版)	八
重刻本草綱目序(萬曆癸卯再版)	三一
重刊本草綱目序(萬曆癸卯再版)	五
本草綱目序(萬曆庚寅初版)	一
頭註國譯本草綱目底本二就子	三一
例	六
頭註國譯本草綱目序	四一

目次

頭註國譯本草綱目第一冊

相須相使相畏相惡藥	四二
藥名同異	四二
序例第二卷目錄	四二
本草綱目序例第二卷	四二
引經報使	四二
臟腑虛實標本用藥式	四二
五臟五味補瀉	四二
五臟六腑用藥氣味瀉	四二
五臟六腑用藥式	四二
四時用藥例	四二
升降浮沈	四二
標本陰陽	四二
五味宜忌	四二
氣味陰陽	四二

十劑.....

本草綱目序例第一卷下

九方.....

七十一藥六氣藥物.....

五〇陶氏別錄合藥分劑法則.....

四神農本草經名例.....

〇採集諸家本草藥品總數.....

五引據古今經史百家書目.....

五引據古今醫家書目.....

一歷代諸家本草.....

一序例第一卷目錄.....

本草綱目序例第一卷上

〇本草綱目凡例.....

三本草綱目總目.....

(萬曆庚寅初版)

(一) 紀に「龍光を望んで古劍を知り、寶氣を覘つて明珠を辯ず」といふのであるが、
 後にも、物に博きは華は稱し、字を辯ずるは康を稱し、實玉を析はつとつ倚頼を稱
 した。が、それ等の明智は誠なることと曉の星にも比すべきものである。
 楚の蘇陽の李東璧君が、たまたま予の弁山園へ訪ねられて、親しく數日間を過され
 たが、その爲人を見るに、(一) 眸然たるその風貌、(二) 癯然たるその體軀、(三) 津津然た
 るその議、(四) まことに北以南の一入者である。その旅装に帯びたものとは、他
 に何等の長物もない、ただ數十卷の本草綱目一書のみであつた。そして謂はれるに
 は、『時珍は荆楚の田舎者で、幼時から羸疾多く、資性鈍椎な人間であるが、典籍に於
 てこそが生れつきで、(一) 蕉館を咲かふが若くといふ有様、遂に羣書を漁り、(二) 家の
 説を採集め、凡そ子史、經傳、聲記、農圃、醫卜、星相から藥府のやうなものも
 のまで、ややや理解したものをもばつぽつ書留めた。中に、(一) 古から尊ぶ本草の一書

三六一一.....
原漢文.....

宋本草舊目錄	九七
神農本草經目錄	三七
藥對藥物藥品	一七
病有八要六失六不治	一七
張子和汗吐下三法	二六
陳藏器諸虛用藥凡例	二六
李東垣隨證用藥凡例	四一
飲食禁忌	四四
妊娠禁忌	四四
服藥食忌	四四
相反諸藥	〇五

はあそこ人々を愛したもので、義(ぎ)皇(こう)のたとへば頗る人(ひと)の卦(け)の排列(はいれい)を創意(さいい)して、炭(すす)人(じん)垂(た)り上(う)る。

帝の獻兒を賜ひ、宮廷に官し、うやまひに所藏せられたるものであつた。

そこで手に取つて見ると、それは楚の名醫李時珍が編じたもので、嘗て神宗皇帝一ツこれが普及の方法を講じて見たいと思ふがどうであらうと『いふ話があった。

い。しかるに^(五)初版は印刷もまた精工でなく、一般的にもまた流行つてゐないから、

健、衛生に益するものなり、たゞの知り、材料の性質のものとて、な

の御史中丞桐の夏公に會つたときのこと、本草綱目なる書籍は大に國民の保

内へ腰を運び移すところを日課にしたといふ語と、意味は殆ど近かつた。ある日長官

た。が、それは吾人の陶侃が氣力を衰へて防ぐ爲に、朝夕屋敷の内から外から

[illegible]

余は二萬曆二十九年から江西北方の廳に承けて居るが、按察司の事務は閉

重刊本草綱目序

[illegible]

本所長。蘇。行。里。疫。初。砂。人。宋。可。知。字。虎。丸。蘇。之。東。陽。記。唐。書。藝。文。志。今。食。公。處。方。大。指。濟。臣。方。華。子。八。具。藥。精。類。十。小。羅。郭。註。是。穀。盛。分。ナ。モ。ト。草。ナ。レ。ト。何。物。

中丞公は江西を巡視されるところに茲に四年、その間常に元費節約を勵行され、
 無論未の末といはねばならぬ。

一 大原理を以て追窮し發見せざるであらうと思ふ。物知りの材料と見るが如きは
 の研究を進められなるば、これに依つて萬物の幽遠なる造化の靈妙なる、宇宙
 こそ、や、かて神農氏の理想と徳化にも合致する。更にまた偉大なる學者にして
 以て生を全うすべし、親を養ふべし、以て世を濟ふべきものであつて、かく
 遡視しやうとするは何事であるか。その養性の精を得るならば、以て身を保つべし、
 も博く知り得てこそを甚だ遺憾に思ふのである。然るに米鹽など一觀に之を
 公は石穀と稱する饑を救う道元は牧靡と名ける解毒の草のこを述べてゐる。即
 實が書いてあつた。(三三) 道元は牧靡と名ける解毒の草のこを述べてゐる。即
 いふ實驗談を讀んだことがあつた。またた微の書には獼爪が肺蟲を治すといふ事
 めて可なりといふ理由は何處にある。嘗て(三三) 東陽記に、虎丸で心疾を癒した
 已に實在せぬものとなつて居るが、しかし現代に實在するものもまたで埤埤に歸せし
 したことをいふであつたといふはなにか。それとも今はただ一片の昔の語に現代は

非常に重大な問題といはねばならぬ。

。誤は極めて些細な點にあつても、その結果は人間の殺活に關するものであるから、
れる藥を與へ、病理、生理との關係が明でなければ誤つた効果を來すは當然であ
である。故に名稱が正確なれば誤れるものを來收し、性質に精審でなければ誤
水澀あらゆる場所に散在するが藥物としての根據は、すべて人間の臟腑に歸する
する研究は、飽くまで複雑多岐を極めたもので、その研究の對象たる藥物は、山野
ばならぬ。本草の學は元來醫家の極端であり、弓矢である。その大小の動植物に關
とへいつて居るではないか。醫を蔑しむ未技の如く心得るは甚しい謬見といはね
のであるが、しかし賈子（賈誼）は古の聖人は朝廷に居られれば必ず醫卜の間に居る
れを視るやうになり、貴顯上流の識者は、これが研究を甚だ等閑に付する向も多
濟つたものだ。故に仁術と稱したのである。ところが後世では單なる技術として
夫れ醫の道たるや、君子躬（こ）これを用ゐて生命を衛り、一般に施して廣く世人を

新書卷ノ著
死、年三
傳、時王
大、梁三
中、大ニ
士、夫ヲ
漢、中ヲ
（一）賈、子ノ
實、帝ノ
誼、時ヲ
指、博ヲ

重刻本草綱目序

（萬曆癸卯再版）

畢

刷上を手にして、意のまに讀んで見るに、舊版に比較して遂に鮮明なものにな
等も應分の資を不足の補充に醗出して、前後六閱月にして再版の事業は完成した。
は忽ち纏つた。是に於て、剩餘の著積全部を投出して再刻の費用に充て、諸大
夫の誤が甚だ多く、如く何にもこれでは讀みにくい。版を改めて再刊しやうと、議
大いにその話をして見ると、いつれもその點は同感であつて、且つ現行の刊本では
力とは誠に敬すべし、畏るべきものもある。醫學に従事する人がこの書を常に座右に
とれて、その効果の極めて明確にされたものである。その研究の上にも近世に習
ひながら、新に加へられた藥だけでも三十七種に上り、いづれも近世に習用
の蹟に就いての研究の證、考證の豊富なる點に於ては、たゞそれ等の書の内容に倍
微の證類と表裏相須つものである。しかしその物の名稱、性質、實驗上及び經
目の手に入れて、幸ひそれをも参考して見ると、大體に於て蘇頌の圖經、唐慎
余は以前から瘵量で苦んで居るが、近頃それかすす甚しく、折醫藥の

[illegible]

心重刻生之地古今江浙言桐廬縣境桐江附近。

江蘇桐城縣近。

癸卯秋孟之朔
巡撫江西都察院右副都御史
占納郡夏良心撰

津浦浦の末まで鵜の如き虎の如き眼を光らして居る。これは邪氣旺盛の徵候では
 ない。この書再刻の完成に因んで、敬んで國を醫するのみに商たし。
 出に現に須の外は覺束ない。この書再刻の完成に因んで、敬んで國を醫するのみに商たし。
 藤、醫和の視、長桑君の方、太倉公の診の如き、その病理に精徹する偉大なる國手の
 しかし更に治世を仁壽の健康狀態に回復しやうとには、何としても命を賭か。
 樞機を根本的に調治するには、果して如何にせば誤りなきことを得てあらうか。
 喙に依るべきか、しき水を澤に散在するものの中から採出して、臍
 や文無を用うるか、攻を用うるか、黄や芒に依るか、または葦や下
 患部は攻を用うるか、いかに感ぜざるを得ぬのである。この症狀は補を行ふか、いかに
 入る醫もがなと猜ふか、明か。この時に當り表裏、標本の容體を正確に診察して、切實な治療を加へ

重刻本草綱目小引

(崇禎庚辰第三版)

を期し、舛を糾し、訛を訂すこととに於ては、一一點一畫一曲一直と雖も忽にせし、遺を拾ひ、
また争はなれ、い事實であつた。そこで今、回の再版では、重ねて校讎を加へて、飽く迄に確
うな其しい訛謬はなしいにしても、爲に牽強の解釋を附せざる處の舛からぬことも
もなかつたところから、空しく出蛇の想を抱くといふ次第、たひ陶氏の註本のや
しきに涉つては、やはり(一)積畫の嗟をうする。また字句の出入など、匡をすほどの人
如きものだから、改めて多くを言ふの必要はなしい。しかしただ典籍としての保存が
を忝し、有識諸家の推稱を博しつゝあるに見るも、宛も皎として日星を仰ぐが
り、人生幸福の窮極の妙といふべきであつて、それには、就ては、すでに天子の寶
らしめたるものである。かやうなる一大成果は、まことに社會救済の最高級の要具であ
なく、藥物の產地、生育に關する本來の狀態を詳述して、異同正否を一、二に瞭然た
羅羅編述したもので、藥方醫術の實際應用の記載、文獻として、微塵ばかりの缺點も
本書は物質の精細と理論の奥妙とを融會互考し、現實の材料と歴史上の事實とを

發而邪二不子已
邪有子二華右
四二太平御
ラ(三)出愛多
其法詩ノ意
多二樓ノ意
輪ノ所ナリ
入樓ノ意
久殘
(一)魚藏ハ書久殘

取語ル恭欽ハ
勅命ノ依テ表ニ對ス
シ。

聖旨ヲ奉シテ書ハシ留覽ス。禮部知道、此ヲ(五)欽ス。
萬曆二十一年四月十八日進呈

四(一) 屏營ノ懷恐ナリ。
 子。日。月。明。ノ。時。二
 二。位。離。ス。傳。長。卦。南。方
 ホ。ツ。國。ヲ。九。州。ト。ス。如。

聖ノ至任コルト無シ。
 天仰
 恩ヲ啣ミ、存歿均シカレ。臣膽
 ニハ行セラレバ、父子
 九重ノ覽ヲ干ス。或ハ禮部ニ准行シ、轉發シテ史館ニ采擇セラレ、或ハ醫院ノ重修
 至ニ勝ヘス。『臣建元、此ノ壽ヲ萬民ヲ以テ天ヲ治ム、書當ニ日月ト光ヲ爭フヘ。國
 昭代ノ典ヲ著成ス。身ヲ治メテ以テ天下ヲ治ム、書當ニ日月ト光ヲ爭フヘ。國
 特シテ。大權ヲ司リ、情ヲ民懷ニ留メ再テ司命ノ書ヲ修メ良臣ニ
 皇帝陛下、道ヲ體シ成守リ、祖ニ遵ヒ志ヲ繼ギ、離ノ正位ニ當リ、考文
 世祖肅皇帝、既ニ醫方選要ヲ刻シ、又衛生易簡ヲ刻シ、仁政、仁聲ヲ率テ遠
 ス。

第廿六卷	菜部五類	菜の	一	蔓草類	三十三種	附錄	九十九種	雜草類	九種	有名未用	三十五種
第廿五卷	穀の四	造鹽類	二十九種	隱草類	三十七種	毒草類	四十七種	上			
第廿四卷	穀の三	菽豆類	十四種	隱草類	三十五種	芳草類	五十六種	上			
第廿三卷	穀の二	稷粟類	十八種	山草類	三十九種	芳草類	五十六種	上			
第廿二卷	穀部四類	穀の一	麻稻類	二十種	山草類	三十九種	芳草類	五十六種	上		
第廿一卷	草の十	苔草類	十六種	石草類	十九種	水草類	二十種	上			
第廿卷	草の九	石草類	十九種	水草類	二十種	蔓草類	三十三種	上			
第十九卷	草の八	水草類	二十種	蔓草類	三十三種	蔓草類	三十三種	上			
第十八卷	草の七	上		蔓草類	三十三種	蔓草類	三十三種	上			
第十七卷	草の六	上		蔓草類	三十三種	蔓草類	三十三種	上			
第十六卷	草の五	隱草類	三十七種	蔓草類	三十三種	蔓草類	三十三種	上			
第十五卷	草の四	隱草類	三十五種	蔓草類	三十三種	蔓草類	三十三種	上			
第十四卷	草の三	芳草類	五十六種	蔓草類	三十三種	蔓草類	三十三種	上			
第十三卷	草の二	山草類	三十九種	蔓草類	三十三種	蔓草類	三十三種	上			

有る名未用一頁三十五種

本草綱目總目

第二十卷	草部一類	草の一	山草類 <small>さんそうるい</small> 二十三上種
第十一卷	石の五	石の五	附錄 <small>ふりよく</small> 、石類 <small>いしるい</small> 三十七種
第十卷	石の四	石の四	石類 <small>いしるい</small> 下四十四種
第九卷	石の三	石の三	石類 <small>いしるい</small> 上三十三種
第八卷	金石部五類	金石の一	金類 <small>きんるい</small> 二十八種
第七卷	土部一類	土の一	凡六十種
第六卷	火部一類	火の一	凡十一種
第五卷	水部二類	水の一	天水類 <small>てんすいるい</small> 三十三種
第四卷	百病主治藥下	百病主治藥下	地水類 <small>ちすいるい</small> 三十三種
第三卷	百病主治藥上	百病主治藥上	
第二卷	序例下	序例下	
第一卷	序例上	序例上	

右通計十六部、二千八百七十七種

第五十二卷 人部一の類一(人)五十三種、又(二)

第五十一卷 獸二の類二(獸類三十八種)三(獸類三十三種)四(獸類二十八種)五(獸類十八種)共八種

第五十卷 獸部五の類一(獸類二十八種)

第四十九卷 禽三の類(林禽十七種)四(禽類三十三種)五(禽類三十三種)六(禽類三十三種)

第四十八卷 禽二の類(原禽三十三種)

第四十七卷 禽部四の類一(水禽三十三種)

第四十六卷 介二の類(蚌蛤類二十九種)

第四十五卷 介部二の類一(龜類二十七種)

第四十四卷 鱗三の類(魚類二十二種)四(鱗類九種)五(無鱗魚類二十八種)附錄九種

第四十三卷 鱗部四の類一(鱗類一)二(龍類九種)三(蛇類七十七種)

第四十二卷 蟲四の類(滋生類三十三種)附錄七種

第四十一卷 蟲三の類(化生類一十三種)

第四十四卷	蟲の二卵生類下十二種	(種)
第卅九卷	蟲部一の蟲	(種) 卵生類上二十二種
第卅八卷	服器二類	服器の一(種) 服器類五十二種
第卅七卷	木の四	木の五(種) 木の六(種) 附錄七十九種
第卅六卷	木の三	灌木類五十五種
第卅五卷	木の二	喬木類五十五種
第卅四卷	木部六の木	(種) 香木類三十五種
第卅三卷	果の五	蘆類九種
第卅二卷	果の四	味果類三十三種
第卅一卷	果の三	夷果類三十三種
第三十卷	果の二	山果類三十四種
第廿九卷	果部六の果	(種) 五果類一十五種
第廿八卷	菜の三	蘆菜類十一種
第廿七卷	菜の一	菜滑類四十四種

のは八千六百六十一である。

もあるが、それは體あつて用なきものとなる。(舊本の附方は二千九百三十五。今増したも

も發明で不明の意義を解釋し、次に附方で用法を示した。或は方はなくがなとの説

修制は製法を慎重にし、次に氣味で性能を明にし、次に主治で効力を録し、次に

形態、采收方法を解説し、次に辯疑、正誤で疑はしきを辨別し誤謬を正し、次に

一、諸目の首に釋名を置いたのは先づ名を正すのである。次に集解でその生産地、

の下は、赤、黄の梁米をそれぞれ目とした類である。

した綱の下には、齒、角、骨、胎、涎をそれぞれ目として列ね、梁を標した綱

併すへもものは併せ、明にその綱を標してその目を附列した。たとへば龍を標

混同して註記されることが、今はいづれも正しく整理して、かへもものはかけ、

一、唐、宋に増入せられてある藥品は、或は一物にして再出三出し、或は二物三物が

名目を註したのには、起原を正確にせん爲である。

て綱となし、その他は皆釋名の下に附けて始めて正した。そして各本草に記された

一、藥には種種の名があつて、今と古とは同じくなく、かゝる特に正しい名稱を標出して

ついでに、

本草綱目序例
第一卷
上

引經報使

五臟五味補瀉

五連六淫用藥式

升降浮沈

五味耳忌

十劑

采藥六氣歲物

神農本草經名例

引據古今經史百家書目

歷代諸家本草

臟腑虛實標本用藥式

五臟六腑用藥氣味補瀉

四時用藥例

標本陰陽

氣味陰陽

七方

陶氏別錄合藥分劑法則

采集諸家本草藥品總數

引據古今醫家書目

本草綱目序目錄第一卷

馬錫曰、北齊の徐之才の著書で、多くの藥物の名稱、品類、君臣の關係、性毒

雷公藥對

時采藥太常采藥時月などの書がある。

を記述したものであるが今は已に傳つて居らぬ。後人の手に成つた同種の書に四時珍曰く、桐君は黃帝の時の臣である。この書凡二卷、花、葉等の形狀や色な

桐君采藥錄

事キ
ニ
テ
時
ヲ
採
ル
功
用
ノ
中
ニ
時
四
ノ
採
ル
功
用
ノ
中

リ。吾世ヲ去ル後、諸ヲ知音ニ足ラスト雖モ、蓋シ亦一家ノ撰製ナ
略合シテ卷ト爲ス。未ダ前良ニ踵スル足ラスト雖モ、蓋シ亦一家ノ撰製ナ
兼テ時(一)用、土地所出及ヒ仙經、道術ノ須サル所ヲ注シ、此ノ序ヲ并セテ
五、合セテ七百三十種、精粗皆取ツテ復遺落ナシ。料條ヲ分別シ、物類ノ區々
農本經ノ三品合シテ三百六十六主ト爲シ、又名醫別品進ムルコト亦三百六十
ルコト能ハザレバ、智則淺深アリ。今輒テ諸經ヲ苞綜シ、煩省ヲ研括シ、神
シ、草石分クズ、蟲獸辨ス。ナリ。且主治ル所互ニ得失アリ。醫家ノ備見
或ハ五百九十五、或ハ四百四十一、或ハ三百二十九、或ハ三品混雜シ、冷熱年節

[illegible]

(一) 唐ノ高宗ガ英司空李勣等に命じて陶隱居が註した神農本草經を
條本草ニ作ル。英
唐ノ高宗ニ當シ。新

炮灸等ノ事ヲ
灸事ハ解リ。本草名例
中ニ載ス。本草名例
後章ニ載ス。本草名例
後章ニ載ス。本草名例

至五十八年閏
二〇〇年閏
二〇〇年閏
二〇〇年閏
二〇〇年閏

時。曰く、唐の高宗が英司空李勣等に命じて陶隱居が註した神農本草經を

唐本草

論といふ六卷の著書もあるが、それは神農家の煉丹研究、即ち丹石家の書である。

なものである。後段に録するところにした。乾寧先生名封といふで制伏草石

據つたもので、その書の首序に物と理とに就て論述してあるが、これまた甚だ幽玄

もまた古風な質樸なもので、別に一家を成すものがある。大體は乾寧先生の説に

文章、熟煮、修事の法を述べてあるが、その所説には古奥なところが多く、文章

更に胡居士が定めて居るが、或はこれか幾の官名であつたのか知れぬ。この書は

國安正公と自稱されて居るが、或はこれか幾の官名であつたのか知れぬ。この書は

時。曰く、劉宋の時の雷殷の著書で、黃帝の時の雷公とは別人である。内宛守

雷公灸論

の藥の性味を分條記して甚だ詳細なものであつたが、これからは傳つて居らない。

時。曰く、その書は神農、黃帝、岐伯、桐君、雷公、扁鵲、華佗、李氏等が所説

ある。

年當時ノ西ノ人ヲ殺ス。一〇四
ル。凡西ノ人ヲ殺ス。一〇四
化。凡西ノ人ヲ殺ス。一〇四
醫。凡西ノ人ヲ殺ス。一〇四

江ノ南ニ在リ。南丹者丹

吳氏本草

保。曰く、魏の吳普は廣陵の人で華佗の弟子である。この書は凡て一卷に纏めて

あるものである。

時珍曰く、その書は吳氏、陶氏の本草の中に見え。頗る研究得るところの
が世に稀に行はれて居る。

保。曰く。魏の李當之は華佗の弟子である。神農本草三卷を修めたものである

李氏藥錄

封爵を追われ、文明と諡された。北史に傳記が載つて居る。

て寵を得、官は尚書左僕射で上り八年で卒したが、死後司徒の官と西陽郡王の
のと思はれる。之才は丹陽の人で、博識にして醫を善くし、北齊の諸帝に歷仕し
引用したのがそれである。蓋し黃帝の時の雷公の著書の後、之才が増訂修飾したも
の時珍曰く、この書は梁の陶弘景以前からあつたもので、吳普の本草に雷公として
て居る。

の相反するもの、及び主治する疾病等を類を分けて記述したもので凡て二卷になつ

連類ト爲シ、釵錫辨スルコト莫ク、橙柚分クザルガ如キ至ル。凡ソ此ノ比例、蓋
ヲ雞腸ニ異シ、由テ跋ヲ意尾ニ合セ、防葵狼毒妄同根ト曰、鈎黃精引、
ヲ、秋楸仁ヲ採リ、冬實ヲ收メ、衆米ノ黃白ヲ膠リ、荆子ノ牡蔓ヲ混、縷
ニ闕ケ、事僉議ニ非サレバ、詮釋獨ニ學拘。建中ノ已重、槐ノ半夏ヲ葉
成、亦以テ經方ヲ瑠玕ノ醫業ヲ潤色ス。然レトモ時鐘、鐘ツ聞見殊方
ス。(一) 桐雷ノ衆記ト頗ル駁ス。路駿スルコトヲ言興シ撰録シテ勸テ家
本草經ハ神農ノ作ル所、不刊ノ書ナリ。惜ラクハ其年代遠クシテ簡殘
喪ニモ斯ノ道ハ尙存ス。梁ノ弘景雅ニ攝生ヲ好ミ藥術ヲ研精ス。以爲ク
李華張昺吳普後ニ振フ。昔秦政ガ燬燔ニモ茲經ハ預ラズ。(二) 永嘉
成ニ邁フ。日ニ用テ知ラズ、今ニ于テ是レ頼ル。岐和彭紹軌ヲ前ニ勝テ、
ツテ清和ヲ引ス。大ニ蒼生ヲ庇ヒ普クハ戰言ヲ濟フ。功造化ニ倅シク、恩裁
得、鬼神情ヲ通ル、所無シ。麝麝ヲ剝リ犀刺ツ邪惡ヲ驅シ、丹飛シ石煉
石ノ功ヲ識リ、雲瑞ニ名ケテ診候ニ術ヲ窮ムル。寶クテ草木咸シ其ノ性
トモ救止スルコトヲ知ラズ、漸ク膏盲ヲ固メテ夭折ヲ期ス。(三) 炎暉物ニ紀シテ藥

ニ官名ハ雲瑞ハ以テテ故
ス。黃帝瑞土ノ德ヲ君
。(一) 雲瑞黃帝ヲ指
ト。イテ官紀ハ下
火指ス。以テ神農氏
指ス。燔、溫、風。
。(二) 辛、酸、甘、
ノ發用スルハ生肌應
サ人器工ヲ加具作ル
サト鑄割水ヲ器作
サコ鑄金ハ鏡ハ作
サ。(三) 金、鏡、金、
サ。ト。官紀ハ生肌應
サ。ト。官紀ハ生肌應
サ。ト。官紀ハ生肌應

○ 留るのちほつと蒸る

二
0
2
2
2
2
2
2
2

6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529

羊胃

育 / 游 習。 (1) 丁 刑

あると謂り、宋代の人も大分刪り去るといふ有様であつたが、豈知らんや天地間
 の淺薄な人にしてその該詳なる著述の精神を知らないで、ただ惟しげなものも擧げて
 誤謬を訂繩し、幽隱を搜羅したたもの、實に本草あつて以來の第一人者である。世
 時珍曰く、藏器は四明の人である。その著述は博く羣書を極め、物類を精覈し、
 遺といふのである。

といふので、別に序例一卷、拾遺六卷、解紛三卷の書を作つた。その全部を本草拾
 ては陶、蘇に補集の説もあるのだが、それでも取遺されたものや埋れたものが多い
 馬錫曰く、唐の玄宗の開元年代に三原縣の尉陳藏器の著である。神農本草經に就
 遺

本草拾遺

養方三卷の著もある。傳は唐史に載つて居る。

に因んで著したもので、相當に學的價值のあるものである。この外效方十卷、補
 のたが固辭して受けず、年九十にして辛たのであつた。この書は周禮の食醫の義
 なつて台州の司馬から同州の刺史に轉じ、睿宗の時にまた中央政府に起用の命があ
 時珍曰く、梁の武后の時舉進士となり、鳳閣舍人に累遷し、地方官と

ノ地ニ明四ノ山
 地ニトノ縣
 種ノテ、方
 附ノ南、浙
 名スル江、餘

至一七九
 七三ノ一
 二四ノ七
 四元ノ四
 八曆

ノ頭ニ當ル。
 曆六〇一
 二一六ノ
 五ノ一六
 一ノ一六
 年四ノ年
 西
 太
 乙、南
 縣ノ山
 或、西
 陝省
 郡

九種を以て凡七十一卷なり。

馬○錫○曰く、唐の同州刺史（二）孟詵（さんしん）の著である。張鼎（ちやうてい）がまたそれによつて足らざるもの八十八

食療本草

著書は千金方、金翼方、枕中素書、握生真錄、福祿壽三教圖、老子莊子注等がある。そのしむべし召命（きめい）があつたが、遂にそれを受けず、年（とし）百餘歲（ひやくじよさい）で卒（す）したのであつた。そのな詳細（しうじゆ）なものである。思（おも）は（三）太（たい）白（はく）山（さん）隱（いん）棲（せい）した人（ひと）で、隋（ずい）唐（たう）の二（に）朝（てう）にか官（くわん）に就（しゆ）か米穀（まいこく）、果菜（くわいさい）、鳥獸（ちうばう）に分（ぶん）類（るい）し、食治（じきぢ）としてその附錄（ふろく）としたもので、それを采摭（さいぢやく）し、確（たしか）めた。

千金寶治

一 卷の著書がある。詳細は^{たゞ}唐史に載せられてある。

權二十一年は、勤問に對してこの書は詳細に藥の主治を論じたもので、この外脈經明堂人形圖各卷に對してこの書を奉呈した。その爲に朝散大夫位を授けられたといふので、幸に就いて藥性に就て御下問があつたのである。

(三) 太白山ハ即チ迷子

○ 子名暴二

寺、二十、家、山

（二）

○

○ ○ ○ ○ ○

有開封道二區

(二) 扶藪ノ今ノ河

設、
世、
二、
相、
。、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

美醴鮮明

三二(丹)青煥八附圖

二
日
工
。 乙
五
十
五

二(四) 鋁(輕) 草入文字

4.

神規勅命

紀。一。○。孝。子。

昭上階ノ文宣散官

六二(二)太中大夫、從四

日
 11
 十
 九
 五
 六

草の藥名を類別に陳ねて解を釋を施し、諸藥の制使、畏惡、相反、相宜、解毒の說明、本禹。錫曰く、京兆の醫者杜善方（善方、京兆の醫者）の著であるがその時代は明でない。凡て一卷、本

本草性事類

義の著がある。

時珍曰く、凡て二卷、唐の李含光の著である。この外豎立言、殷于嚴などに

本草音義

入で内容もあり價值あるものでない。

されぬものや有名未用のものを削除して五卷としたのだ、著者は開元以後の禹。錫曰く、唐の潤州の醫博士兼御藥院使楊玄操（玄操、潤州の醫博士）の著である。本草の一般に常用

刪繁本草

卷、學的な價值はない。進士の王叔收が序を書いて居る。

字、だけを取り、平上去入の聲に分け音引きにして閱覽に便にしたもので、凡て五禹。錫曰く、唐の在野の學者で蘭陵の蕭炳（炳、蘭陵の蕭）といふ人の著である。本草の藥名の頭

四聲本草

茅山居士居ル。
華前ノ人ヲ書年
代凡シ西暦光宗
（一）

東三ノ東陵ハ詳
リ。齊ノ梁代ノ
或ハ齊ノ梁代ノ
或ハ齊ノ梁代ノ

藥物。
(一) 海藥ハ海外產ノ

ル。年五七同六七八九
七五七七九
六六六六六
五五五五五
四四四四四
三三三三三
二二二二二
一一一一一

州(一) 以南南海方
指交

書があらたが今は傳らない。

詳しくいものである。その他に鄭虔著の外國の藥物だけを集めた胡本草といふ七卷の書である。珣は蓋し書宗、代宗の時代の海藥だけを集めて極めて時珍曰馬錫のいふこの書が即ち海本草である。凡て六卷、唐の李珣著縣名、治病上の功を力に記したもので、記述は順序亂である。

馬錫曰く、南海藥譜二卷著者不明となつて居るが、(一) 南方の藥物、その産地の郡

海 藥 本 草

詳細であつても厭はないものであることを知らねばならぬ。

研究することが出来やうか。この本草の學なるものは詳細に究むべきことは如何程か、若しこの拾遺に收載されてなかつたら、現在何を據として舊時からの状態を、ではないか。仰天皮、燈花、敗扇などはいづれも世間一般に用ゐられてゐる。辟瘟、海馬、胡豆など、いづれも昔は認められなかつたが今は用ゐられてゐる。一隅の狭い見を以てして軽く博識な人の業績を議論すべきものではない。物は無限であり、時の古今に依つて認められ、認められぬこともある。

南ノ地ヲ指ス。南國ハ揚子江以

參校ヲ加ヘ、藥ヲ増スコムトハ百味ニ餘リ、註ヲ添ヘテ二十一卷ト爲ス。本經功
 ヘラ之ヲ註釋ヲ爲リ、列ネテ七卷ト爲シ、南國ニ行ル焉。有唐ニ逮テ別
 テ其ノ本經ニ參ヘ、朱墨雜ニ書ハス、明ニナリト謂フ。而シテ又彼ノ功
 ニ流傳スル所、名醫別錄ニ編纂ス。梁ニ至リ正白先生陶弘景乃チ別錄ヲ以
 三、唐ノ書ハ神農其ノ一預ル。百藥既ニ辨シ、本草其ノ錄ヲ存ス。舊經三卷世

序を左に掲げる。

へられたるは墨に書いてて區別し、目錄共合せて二十一卷の書としたのであつた。
 學士李防等に一々檢校せしめ、すへて神農の分は白字、その他の名醫に依つて傳
 多選が字句の刊正に當つたのであつたが、七年に復馬志等に詔して重定せしめ、
 て別名を刊正し、藥を増すと三百三十三種、馬志がこれに註釋を加へ、翰林學士盧
 蜀二本草を底として詳校せしめたもので、陳藏器の拾遺その他の諸書を參考し
 時。曰く、宋の太祖が(二)開寶六年に尙藥御、道士馬志等九人に命じ、唐、

開寶本草

陶、蘇等書のより更に頗る詳なるものである。

九三七開寶六年當ル。西曆

シ、廣ク二卷ト爲ス、之ヲ唐本草ト謂フ。國朝開寶中、兩々醫工劉秘、劉道、三、百六十五種、因テ註釋シテ分チテ七卷ト爲ス。唐ノ蘇恭等又一百一十四種ヲ増シ、神農本草經三卷、藥三百六十五種ニ止ル。陶隱居ニ至リ又各醫別錄ヲ進ム、亦之ヲ左に掲げる。

校修を加へたところもあることとはあるが、大なる發明は無いためである。その序は略種、通計一千八百二十八條、これを嘉祐補註本草といふのである。共に二十卷、その書は林億等詔し、諸の醫官と共に本草を重修せしめた。新補八十二種、新定七十種、時珍曰く、宋の仁宗の嘉祐二年、光祿卿直秘閣掌爲、尚書祠部郎中秘閣校理嘉祐補註本草

頌チ傳ヘテ馬行ハシム。

亦詳明ナリ。今新舊藥合セテ九百八十三種、并ニ目錄二十一卷ヲ以テ廣ク天下ヲ今註ナシ、文記ヲ放テテ之ヲ述ブルモハ又今按ト爲ス。義既ニ刊定シテモ其ノ解ヲ詳ニシ、其ノ形ヲ審ニス。謬誤シテ之ヲ辨スルモノハ署シテ以テ神農ノ說ト爲シ、墨字ヲ名醫ノ所傳ト爲シ、唐附、今附、各顯註ヲ加

一〇五
嘉祐二年
當西曆

難キハ、但々類ヲ以テ附見ス。緣ヲ釋石ニ次ギ、山花ヲ京薙ニ次ギ、扶移
 シ新補ト云フ。凡ソ藥ニシテ舊ト上ノ下ニ品ニ分チ、今ノ新補ニ詳辨スルニ
 ト曰フ。凡ソ今ノ増補スル所ニシテ舊經ニ未ダ有ザルハ、逐條ノ後ニ註シテ開
 亦其末ニ註シテ唐本附ト曰フ。凡ソ註ヲ以テ末ニ附ク。凡ソ顯慶ニ増スル所ノ者
 者ハ之ヲ名醫別錄ト謂ヒ、並ニ其ノ註ヲ以テ末ニ附ク。凡ソ陶隱居ガ進ム所
 餘ノ増スル所ノ者ハ皆別ニ條ヲ立テ増スル有ル者ヲ墨ヲ以テ朱字ニ間ヘ、
 名、醫ノ神農ノ舊條ニ因テ増スル有ル者ヲ墨ヲ以テ朱字ニ間ヘ、
 唐本ニ云ク蜀本ニ云クト曰フ。凡ソ字ノ朱墨ノ別ハ、所謂神農經ハ朱字ヲ以
 者ニテ今引用スル所ハ但其ノ所作ノ人名ヲ著シテ某ト曰ヒ、惟ダ唐ノ蜀本ハ則
 シ、他ノ書ハ書ハ則チ著スル所ノ先ヲ以テ次序ト爲ス。凡ソ書ハ唐ノ蜀ノ二本草ト先ト爲
 チ、其ノ末ニ解シテ云ク、某書ニ見エト。凡ソ引ク所ノ書ハ唐ノ蜀ノ二本草ト先ト爲
 シ云ク、臣等謹ヲ某書按ズルニ其事ト云フト。其ノ別ニ條ヲ立ル者ハ、則書
 ニ之ヲ存シ、詳ニ其ノ舊ニ已著見シテ而モ意未ダ完カラスハ、後書ニ復言フ有ルハ、亦具
 複ク避ク。其ノ舊ニ已著見シテ而モ意未ダ完カラスハ、後書ニ復言フ有ルハ、亦具

一〇八年當
西曆

合して一書となし、それ唐本草、陳藏器の本、草、孟詵の食療本草から舊本に遺落
時。曰く、宋の徽宗の二年に蜀の醫士唐慎微が意補註本草と圖經とを綜

證類本草

公の傳に封ぜられた人であつた。

頤は字を子容といひ、同安の人で進士に擧げられ哲宗の時に丞相の高位に昇り魏國

と出してある如きがそれである。しかしそれ些些たる手に過ぎぬものである。

して列にあり、棠樾子即ち赤瓜、天花粉、木香、肥根、橘根であるが、それを重ねて條

などがある。江州の裴仙遺糧に、潯州の青木香が肥根となつて俱に圖が混

の物があつても、拘らず圖の落ち居るもの、説明は妥當でも圖の妥當ならざるもの、

るが、ただ圖と説明との合せぬものがあつたり、圖があつて説明のないもの、

書凡て二十一卷を完成したのであつた。詳明にして頗る發揮するところ、あ

圖寫して差出させ、唐の永徽の時前に倣つて太常博士蘇頌に撰述を命じて、こ

それが完成したので、更にまた全國の地方廳に詔を下し、各管下に生産する藥物を

時。曰く、宋の仁宗が既に堂禹錫等に命じて本草を整理し、編修せしめ、累年して

草 經 本 圖

載スト云フ。
著ス。英公、陶氏、開實ノ三序皆義例アリ、去ヘルカザル所ナリ。仍テ首卷ニ
ル者ハ馬ハ預ス、新定一十七種、總テ新舊一千八百八十二條、皆類ニ隨テ之ヲ附
別ニ立テテ條ヲナシテ新定ト曰フ。舊藥九百八十三種、新補八十二種、註ニ附
證スル所無キ者胡盧巴、海帶ノ類ノ如キ有リ、則チ請フテ太醫ノ衆論參議ニ從ヒ
バ亦本註ノ末ニ附ク。凡ソ藥ニシテ經ニ已見エトモ功未ダ備ラズ益ニ有所ル者
ス。凡ソ藥名ニシテ本經ニ已見エトモ功未ダ備ラズ益ニ有所ル者
傳ニ記ス。攷ハカ據カル者バ別ニ今按、今詳ニ又按ト曰フ。皆朱字ヲ以テ別ニ其端ニ書
ヒ、顯慶ニ出ル者バ唐本註ト曰ヒ、開實ニ出ル者バ今註ト曰ヒ、其ノ開實ノ
ヲ海藻ニ附クルノ類ノ如キ是ナリ。凡ソ舊註ノ陶氏ニ出ル者バ陶ニ隱居クト曰
並ニ本註ノ末ニ附シテ續テ曰フ。地ヲ垣ニ衣ニ附ニ燕ニ覆ニ通ニ草ニ附ニケ、馬ニ
舊註ニ已ニ曾ニ引ニテニ注ニセニルニ有ニリ、今増ニ所ニ但ニ相ニ類ニ涉ニハ、更ニ條ニ立ニテ
ヲ水ニ楊ニ次ニガニノ類ノ如キ是ナリ。凡ソ藥ニシテ功用アリ、本經ニ未ダ見エザルモ

日華諸家本草

るもあるが、いついれども淺雅なもので高論と見るべきものがない。
末期に醫先王官等命じて本草を校正した、その時にこの書に増附したとて
書に合し、所々に語を達し、これを別説といつたものである。高宗の紹興一
時。曰く、宋の哲宗の元祐年間、閩中縣の醫士陳承が本草と圖經の二書を一

別本草説

しめたことがあつて又これをして政和本草といふのである。
實にその功といはねばならぬ。後政和年代に復官の曹忠に命じて校正刊行せ
諸家の本草や各各の單方を千古の至つて湮没せず存せしめたものは
草と名けたのであつた。愼微は容貌醜い人であつたが、學殖は極めて該博で、
全に古の今の一巻に經史百家の書から藥物に關するものを探つてこれに附記し、
更に唐本、食療、陳藏器の説にして未だ収め盡さなかつたもの各條に加へ、又
されども五、百餘種を拾收して各部に附入した外更に五種を増加し、また雷公炮炙

樂林序ノ文即類本
草序曰重ノ草リ
モ本圖經又曰
重抄ノ圖經又曰
保元中曰神農本草經
經補本草又并圖
廣終一政和元年西
以。年。和。元。西。曆
云。材。單。方。二
藥。用。方。二

湯液本草

ひ試效方の著書もあるが、それ等は皆門人が果の說を集轉記したものである。及傷寒六經の法則と比較對照して此事難知二卷を著した。別に癰疽眼目などの諸書及推窮明して、醫學發明九卷、蘭室秘藏五卷を著し、經絡、本草、脈訣及び難病方論を明を下して辨惑論三卷、脾胃論三卷を著し、素問難經、本草、脈訣及び難病方論を多きこととを慨し、脈證、元氣、陰火、飲食、勞倦、有餘、不足に就き明確なる說も一般に内傷と外感とに關する正確な智識を缺き、爲に混同せる基礎の上に治療を施す藥の凡例、諸經の總綱を要、活法を附して一書としたものである。果は當時たのであつた。當時人は神醫と尊稱した。この書は潔の古の珍珠囊を基礎とし、用た醫學は潔古人を學んで盡くその學を窮め、更に進んで新なる研究の境域を開いた。家に豐にして慈善を好み。その德望を以て當時の制度に依り濟源の監稅官に任ぜられた。東垣といひ、春秋、易の學に通曉し、忠信にして守操の堅い人格者であつた。時珍曰く、凡て一卷、元の眞定の明醫李杲の著書である。杲は字を明之、號が

家用藥法家

一一八〇年。
一凡西曆一〇二〇年。
一李杲、字明之、河内人。
一李杲、字明之、河内人。
一李杲、字明之、河内人。

陰チ云ツ。
經六チ云ツ。
系六チ云ツ。
經六チ云ツ。
系六チ云ツ。

ル。三十一
年一六三
一三武
終、西
當、元

觀ナ
現、四
象、時
生、分
ズ、行
ス、シ
ル、コ
切、ホ
者、木
金、土

華連
義島、
江、以
終、元
曆、西
一、三

としたのであるが別に増益なし。

集したもので、張潔古、李東垣、王海藏、朱丹溪、成無己、數家の説を取集めて一書
時珍曰く、凡て三卷、明洪武年代に丹溪の弟子山陰徐彦純字は用誠の編

本草發揮

外科精要新論、風木間答の諸書がある。

な、ど、はや、り、舊、説、に、因、は、れ、た、觀、な、い。諸藥を強て五、行、説、に、配、當、した如きも
く、發、明、す、る、所、も、多、い、の、で、あ、る、が、蘭、卓、が、蘭、花、に、な、り、胡、粉、が、錫、粉、に、な、つ、て、居、
爽、の、本、草、衍、義、の、學、説、を、推、し、普、及、せ、し、め、と、し、た、の、で、増、補、した藥品が二百種に
主、唱、し、發、揚、し、て、醫、の、學、に、於、け、る、正、統、派、を、標、榜、し、た、の、で、あ、つ、た。この書は蓋に寇宗
太、無、に、從、つ、て、醫、を、學、び、遂、に、劉、元、素、に、張、潔、古、に、李、東、垣、の、學、を、修、得、し、その説を
道、士、許、白、雲、に、從、つ、て、道、教、を、學、んだ人、で、世、間、か、丹、溪、先、生、と、呼、ば、れ、て、た。得、て、羅、
時珍曰く、(一)元朝末期の朱震亨の著である。震亨は(二)義烏の人で字を彦修といひ、

本草衍義補遺

時○形○曰く、弘治年間、禮部郎中、蔡懋○の王○繡○が本草中の普通薬品及び、東垣、丹溪の増すところなく、たまたま、古説に、はれたものとして、入卷に續めたる、字は、繡○の字である。

本草集要

白^{しら}秘^ひ法^{ぽう}、三十六^{さんじゅうろく}水^{すい}注^{しゆ}、伏^{ふく}制^{せい}草^{そう}石^{せき}論^{ろん}などがあるが、皆同様な性質のものである。してつたものに相違ない。古書として太清草^{たいせいそう}、木^{もく}方^{ほう}、太清^{たいせい}服^{ふく}食^{しょく}經^{けい}、太清^{たいせい}藥^{やく}錄^{ろく}、黃^{わう}托^{たく}言^{ごん}傳^{でん}へ記載してあるもので、土^ど宿^{しゆく}尾^び元^{げん}眞^{しん}君^{くん}の所^{しよ}説^{せつ}に抱^{だう}朴^{ぱく}子^しが註^{しゆ}解^{かい}を加へたものと假^{かり}と種^{しゆ}を記^き載^{さい}してあるもので、種^{しゆ}を數^{かず}百^{ひやく}卷^{わん}の多^{おほ}きに及^{およ}んでゐる。前^{ぜん}掲^{けつ}の造^{ぞう}化^か指^し南^{なん}なる書^{しよ}は三^{さん}十^{じゆ}三^{さん}篇^{ぺん}に分^われ靈^{れい}草^{そう}三^{さん}十^{じゆ}三^{さん}篇^{ぺん}、仙^{せん}臚^ろと仙^{せん}家^かの學^{がく}に關^{かん}する著^{しやく}書^{しよ}凡^{おほ}そその生^{せい}産^{さん}地^ち、形^{けい}狀^{じやう}、陰^{いん}陽^{やう}の區^く別^{べつ}に關^{かん}する説^{せつ}は相^{さう}當^{たう}信^{しん}憑^{へい}すべしである。王^{わう}は號^{ごう}を靈^{れい}苗^{めう}、靈^{れい}植^{ちつ}、羽^う毛^{もう}、鱗^{りん}甲^{かう}、飲^{いん}饌^{しん}、鼎^{てい}器^きの各^{おの}部^ぶに分^わち、通^{つう}計^{けい}二^に卷^{わん}、凡^{おほ}て五^ご百^{ひやく}四^し十^{じゆ}一^{いつ}品^{ひん}、草^{そう}木^{もく}の燒^{せう}丹^{たん}術^{じゆつ}の材^{さい}料^{りやう}に使用^{しよじよう}する者^{しや}を集^{しゆ}めて此^こ書^{しよ}を著^{しやく}したのである。部^ぶ門^{もん}を金^{きん}石^{せき}、

縣名。浙江內
 (一) 以弘治八年改元。西曆
 一四八〇年。

卷最喜洪抱朴號子ナリ。篇外ナリ。

引據古今醫家書目

そのうち唐慎微のものが大部を占めて居る。それ以外のものでも今時珍の引く時珍曰く、梁の弘景以下、宋の本草に引かれた醫書は八十四種で、

用した醫書類は凡そ二百七十六種である。

黃帝素問（王氷註）
唐宗貞元廣利方
扁鵲方（三卷）
張仲景傷寒論（成無己註）

孫真人千金翼方
孫真人千金方
范東陽方
王壽外臺祕要方
徐文伯方
張仲景方

孫真人枕中記
孫真人千金金匱要略方
華佗中藏經
初廣世古今錄方
支太醫方
張仲景金匱玉函方

席延實方
孫真人食忌
姚和衆の延至實方
奉承祖方
張文仲の隨身急方
華佗方（卷）
宋太宗太平聖惠方
天寶單方圖

し、藥を増すと三百七十四種、處方^{ばくはう}八千六百六十名を收めてある。
六部となし、各部各類を分ち、數凡そ六十、名を標^めとして綱^{きよう}となし、事を列^{れつ}ねて目^めとな

宋煥經心錄
巢元方的病原論
王叔和脈經
皇甫謐甲乙經
皇朝市隱
秦越人難經
黃帝書
靈樞經
寒食散方
普救方
萬全方
谷股產寶
必用方
蘇沈良方
東坡中存す

以上八十四家の著書は、いづれも舊來の各本草に引れば、たのものである。

李氏食經
神農食經
彭祖の服食經
劉克の藥性賦
劉氏病機賦
李瀛の醫史
張杲の醫說
賈誼の馬經
嵩陽の子
李翱の何首烏傳
小兒氣方
楊氏乳集方
谷氏一般食心鏡

魏武帝食制
神農食忌
張仲景金匱要略
宋徽宗聖濟經
平濟總錄
褚氏遺書
王冰女密
賈相公牛經
神農食方
太清草木方
譚小兒方
張傑の子母祕錄
十全博方

近效方
救急方
塞上方
勝金方
斗門方
孫氏集驗方
崔元亮海上集驗方
胡洽居士百病方
葛洪後百一方
劉涓子遺方
李翰林部集方
王紹顏續傳信方
許孝宗篋中方
孫真人千金髓方

陳抃經驗方
張路の大方濟方
王發の博濟方
文潞公の養濟方
韋宙の獨行方
孟詵の必效方
深師の脚氣論
孫兆の精義方
服氣集效方
乘間集效方
御藥院方
延年秘錄
錢氏篋中方
葉天師の枕中記

陳氏經驗後方
崔知悌の勞瘵方
沈存中の靈苑方
周應簡の要濟方
王珉の傷寒自驗方
平堯卿の傷寒類要
姚僧垣集驗方
梅師集驗方
謝士泰の刪繁方
陳延之の小品方
崔行功の纂要方
柳州救三死方
劉禹錫の傳信方
篋中祕寶方

國比南屬

目録

葉氏醫家統旨

傳はのの集しふ成せい

虞搏（イ） 正齒（イ） 搏（イ）

嶺南衛生方

眞西山の衛生書

雞ニトリ 密ヒソカニ の 備ビ 急イサカ 方カタ (張銳)

胡二 疾ハヤの 衛エ生セイ易イ簡カン方ホウ

利居士易簡方

是齋ぜさいの指迷さしめ方ほう王わう旣け

王氏わうし易い簡かん方ほう王わう

陳言の三因方

程てい充じゆうの丹たん溪けい心しん法ぽう

楊氏頤眞堂經驗方

孫氏存仁堂經驗方

萬表の積善堂の經驗方

瑞竹堂の
兼斎

李仲南の永類鉤方

初虞世の養生必用方

趙士衍ちうしえんの九衛くゑい生せい

孫用の傳家の秘寶方

朱端しゅたんの衛生家えいせいけ寶方ほうほう

楊氏家藏方（楊侯）

楊士の仁齋直指方

楊子建の萬全護命方

孫真人千金方

得伯仁の櫻心要

劉純の玉機微義

不勝重負の誠實

戴原禮の證治要訣

王履の遊河集

周憲王の袖珍方

周憲王しゅうけんわうの普濟方ふじほう（一百十卷）

王方慶わうほうけいの嶺南れいなん方ほう

王隱君の養生主論

許學士きがくし 本事ほんじ 方はう 許叔微きしゆゐ

濟こいせい生せい拔はく萃すい方ほう（杜思敬）

余居士選奇方

洪 濟 方

嚴用和の濟生方

惠民和劑局方

楊琦の丹溪心法
丹溪局方發揮
丹溪陰證發明
王海藏の醫家大法
王海藏の脾胃論
東垣の醫家珍
潔古の鑑信
醫鑑（雙信）
張子和の儒門事親
胡演の鍊丹秘訣
土宿真造化指南
許洪の本草指南
劉河問の宣明方
劉河問の原病式
王執中の資生經

方廣丹溪心法附錄
盧和の丹溪纂要
羅天益の衛生寶鑑
海藏の醫元戎
東垣の蘭室秘藏
李東垣の醫學發明
活法機要
張潔古の醫啓源
名醫錄
醫餘錄
黃氏本草權度
戴起宗の脈訣誤
太清靈方
婁居中の食治通説

丹溪活套
丹溪醫案
丹溪の格致餘論
海藏の此事難知
東垣の試方
東垣の辨惑論
楊天惠の附子傳
葛蒲傳
月池の艾葉傳
月池の參人傳（李言聞）
陸氏證治本草
吳の猛服訣
玄明粉方
飲膳正要

吳 吳の扶壽精方
臚 仙の壽域神方
象 囊の急方
囊 要奇方
子 益の奇疾方
李 樓の怪證奇方
十 便良方
海 上名方
海 上仙方
溫 居の海上方
白 飛霞の方外奇方
急 救良方
救 急易方
經 良方

李 延飛の三元延壽書
陳 直の奉親養老書
史 堪の指南方
端 效方
摘 玄方
生 生論
孟 氏說方
包 會の應驗方
談 野翁の試驗方
鄭 氏家傳方
徐 氏家傳方
雙 氏經方
張 氏經方
唐 璩の經方

何 大英の發明證治
世 醫變要法
王 璆の百選方
王 永輔の惠濟方
趙 宜眞の急仙方
邵 眞人の吉囊雜纂
張 氏江切要
何 子元の群書續抄
丘 瓊山の群書日抄
王 氏奇方
張 三丰の仙傳方
白 飛霞の韓氏醫通
王 英の杏林摘要
鄧 肇峯の衛生雜興

朱端章の集驗方
董炳の集驗方
孫一松の試效方
經濟世方
試效錄方
孫仁の集效方
閻孝忠の集效方
方賢の奇效良方
醫方大成
楊拱の醫方摘要
周良采の醫方選要
饒氏正宗
王璽の醫林集要
醫學切問

楊氏經驗方
趙氏經驗方
阮氏經驗方
簡氏經驗方
龔氏經驗方
戴古淪の經驗方
馮講師の經驗方
劉長春の經驗方
王仲勉の經驗方
陳日華の經驗方
劉松石の保壽堂經驗方
法生堂經驗方
德生堂經驗方
陸氏積德堂經驗方

居家必用方
危氏得效方
坦仙の皆效方
楊起の簡便方
瀨湖集簡方
瀨湖醫案
趙氏儒醫集要
吳球の諸證辨疑
吳球の活心統
梁氏總要
寬玄子の法天生意
麗仙の乾坤生意
麗仙の乾坤秘蘊
劉純の醫小學

眼科龍木論

楊清叟の外科秘傳

齊德之の外科精義

陳明之の外科精要

李實の痘疹淵源

高武の痘疹管見(名正)

王日新の小兒方

湯衡の嬰孩妙訣

湯衡の嬰孩寶鑑

魯伯嗣の幼童百問

痘衡の全幼心鑑

世榮の活幼心書

劉防の幼新書

一難寶鑑

飛鴻集

李迅の癰疽方論

薛己の外科發揮

薛己の外科心法

聞人規の痘疹八十一論

李言聞の痘疹證治

小兒宮氣集

姚和衆の童子秘訣

衛生總微論(全)

活幼全書

演山の活幼口議

徐用宣の補珍小兒書

幼科類萃

婦人經方

倪惟德の原機啓微集

周采の外科集驗方

薛己の外科經方

外科通論

張清川の痘疹便覽

痘疹要訣

魏直の博愛心鑑

全嬰方

鮑氏小兒方

鄭氏小兒方

阮氏小兒方

張煥の痘疹小兒方

陳文中小兒方

錢乙的小兒直訣

婦人明理論
郭稽中婦人方
陶華傷寒六書
趙嗣真的傷寒論
韓祇和傷寒書
蘇適女感傳論
通眞人方
嚴月軒方
唐仲舉方
王氏集
攝生妙用方
傳信適用方
神醫普救方
王氏捷徑

婦人千金家藏方
熊氏良方補遺
李知先活人書括
成無己傷寒明理論
龐安時傷寒總病論
上清紫庭勞方
三十六黃方
鄭師市方
楊堯輔方
蕭靜觀方
艾元英如宜方
王氏源方
楊炎南行方
保慶集

便產須知
胡氏濟陰方
陳自明婦人良方
劉河間傷寒直格
吳綬的傷寒要
朱肱的南陽活人書
葛可久十藥神書
芝隱方
金匱名方
錦囊秘覽
濟生秘覽
王節齋的明醫雜著
彭用光體仁堂編
保生餘錄

咽喉口齒
目經方
明方

宣明眼科

眼科針鉤方

以上二百七十六家著書は時珍の引用したものである。

丁謂の天香傳
范勝之の種楨書
賈思勰の齊民要術
魏王花木志
太清石壁記
太清草木記
獨孤の丹房鑑源
軒轅述實藏論
五溪記
朱應の扶南記
劉恂の嶺表錄
楊孚の異物志
裴淵の廣州記
顧徽の廣州記

八帝女化經
八帝聖化經
三洞要錄
夏禹神仙經
靈芝瑞草經
神芝草經
東華真人の養石法
青霞子の丹臺錄
王氏番禺記
張氏吳行記
孟珙の嶺南異物志
房千里の南方異物志
萬震の南州異物志
徐表の南州記

陸機の詩義疏
崔豹の古今義廣志
郭泰の義廣志
四時纂要
狐剛子鎖粉圖
異魚圖
房室圖
斗門經
白澤圖
南城志
永嘉記
太原地志
南蠻記
嵩山記

何晏の九州記
 東方朔の神異經
 何承天の纂文
 王建の平典
 吳均の續齊諧記
 劉敬叔の異苑
 洞微志
 劉向の列仙傳
 葛洪の神仙傳
 梁四子記
 李孝伯傳
 崔魏公傳
 崔武成事
 漢穆公傳
 秦穆公傳

宗懷之の荆楚歲時記
 盛弘之の荆州記
 張華の博物志
 杜祐の通典
 段成式の酉陽雜俎
 王子年の拾遺記
 郭象の洞冥記
 徐鉉の稽神錄
 于闐の搜神記
 于闐の實錄
 唐武后傳
 李司封傳
 李實臣傳
 李武內傳
 漢王本記

華山記
 郭璞の山海經
 魏略
 異類
 異術
 廣平記
 太史公の史記
 樂史の廣異記
 玄中記
 紫雲夫人傳
 南岳魏夫傳
 柳宗元傳
 何君謨傳
 靈居士傳
 魯定公傳

韓彦直の橘譜

馬經

龜經

黃省曾の歷代經

師曠の禽經

劉熙の釋名

楊雄の方言

孔鮒の小爾雅

急就章

洪武正韻

倉頡解詁

顧野王之玉篇

周彌の說文解字

許慎の說文解字

毛文錫の茶譜

張世南の蟹譜

王元之の蜂記

袁達の禽蟲記

司馬光の名苑

陸佃の埤雅

曹憲の博雅

張揖の廣雅

陰氏韻府群玉

丁度集韻

孫愐の唐韻

王安右字說

呂忱字林

唐蒙の博物志

李石の續博物志

鍾離之果賦

朱仲之貝經

淮南公相鶴經

陸機の鳥獸經

坤雅廣義

羅願の爾雅翼

孫炎の爾雅正義

包氏續府群玉

黃武公古今韻會

魏才の六書精義

趙古則の六書本義

周彌の六書正鵠

疏魚

以上一百五十一種の書はいづれも従來の本草に引用されたるものである。

陳子昂集 <small>ちんしやうしふ</small>	陸龜蒙詩 <small>りくきゆうもうし</small>	梁簡文帝勸學文 <small>りやうかんてんくわんがくぶん</small>
江淹集 <small>かうえんしふ</small>	宋王微讀賦 <small>そうわうけいどくふ</small>	庾肩吾集 <small>こゝろけんごしふ</small>
李善注文選 <small>りぜんしふのしふせん</small>	張協賦 <small>ちやうけうふ</small>	本事詩 <small>ほんじし</small>
范曄詩 <small>はんてふし</small>	宋齊丘化書 <small>そうせいきうわしや</small>	楚辭 <small>そし</small>
黃休復の茆亭客話 <small>わうしゆふのぼうていかくわ</small>	金光明の采經 <small>きんくわうめいさいけい</small>	顏氏家訓 <small>げんしけいけ</small>
景煥の野閑話 <small>けいゑんのののくわ</small>	韓終の采藥詩 <small>かんしゆうさいやくし</small>	王充の論衡 <small>わうぢゆうろんけい</small>
沈括の夢溪筆談 <small>しんけつのもうきふふだん</small>	耳珠先生訣 <small>みみしゆうせんけつ</small>	龍魚河圖 <small>りゆうぎやうと</small>
歐陽公歸田錄 <small>おうやうこうきふだんろく</small>	陶隱居の登真隱訣 <small>たういんきよのとうしんいんけつ</small>	遁甲書 <small>とんけつしや</small>
孫光憲の北夢瑣言 <small>そんくわんけんのほくぼうさくごん</small>	左慈の祕訣 <small>さじのひけつ</small>	廣五行記 <small>くわうごうぎ</small>
鄭氏明皇雜錄 <small>ていしめいけうさくろく</small>	顏子修真祕訣 <small>げんししゆしんひけつ</small>	五行書 <small>ごうぎしや</small>
關元實遺事 <small>かんげんじついじ</small>	修真秘旨 <small>しゆしんひし</small>	宣政錄 <small>せんていろく</small>
張彊の朝野僉載 <small>ちやうけうのてうやけんさい</small>	神仙秘旨 <small>しせんひし</small>	楊億の談苑 <small>やういふのだんえん</small>
陸羽の茶經 <small>りくよのちやけい</small>	神仙應篇 <small>しせんおうへん</small>	李敖の該聞錄 <small>りあうのがいもんろく</small>

吾學編	顧玠の海槎錄	劉都の使西域記
元史	費信の星槎勝覽	周達觀の真臘記
遼史	野史	宋祁の劍南方物贊
宋史	逸史	任豫の益州記
南唐書	類編	東方朔の十洲記
五代史	世本	東方朔の林邑記
南齊書	劉義慶の世說	范成大の桂海虞衡志
唐會要	東觀漢記	劉欣期的交州記
南齊書	環氏紀	萬震の涼州異物志
後魏書	張勃の吳錄	薛氏叔的異物志
法盛の晉中興書	三輔故事	曹叔雅の異物志
謝承の續漢書	三輔黃圖	陳祈暢の異物志
左氏國語	陸禮の續水經	臨海異物志
汲冢竹書	酈道元的續水經注	沈璧の臨海水土記
逸周書		

太平寰宇記
大明一統志
李德裕の黃冶論
杜李陽の雪林石譜
蘇氏硯譜
蘇易簡の紙譜
僧養寧の竹譜
戴凱之の竹譜
陳仁玉の菌譜
陳壽の桐譜
劉蒙泉の菊譜
范成大の梅譜
歐陽修の牡丹譜
蔡襄の荔枝譜

祝穆の方輿要覽
韋述の兩京記
昇玄子の伏虎圖
九鼎神丹訣
蘇氏墨譜
蘇氏筆譜
洪駒父の香譜
葉庭珪の香譜
王西樵の野榮譜
沈立の海菜譜
史正志の菊譜
范成大的菊譜
劉貢父の芍藥譜
蔡宗顏の茶對

樞含の南方草木狀
寶辨疑
桓譚の鹽鐵論
張杲の玉樹要訣
張杲の丹砂訣
洛陽名園記
周叙の洛陽花木記
李德裕の平泉草木記
穆修靖の靈芝記
天玄主物籙
王佐の格古論
楊杲の物理論
寶寧の物類感志
張華の感類從志

王安の武陵記

河絶の松漢開

洪邁の臨川記

荀伯子の南康記

方國志

鄧顯明の襄沔記

嵩高記

周處の風土記

金門記

辛氏三秦記

廉州記

鄴中記

郡國志

許善心の符瑞記

孫柔之の瑞應圖

葉夢得の水雲錄

劉績の雪霽錄

楊慎の丹鉛錄

方鎮の年譜錄

方勺の泊毛編

蘇軾の杜陽編

杜實の大業拾遺錄

松窓雜記

鮮于樞の釣竿

蘇子仇筆記

毛直方的詩學大成

邵桂子の楚天語

春秋題辭

河圖括地象

河圖玉版

杜臺卿の玉燭寶典

顏師古の刊謬正俗

服虔の通俗文

班固の白虎通

應劭の風俗通

伏侯の中華古今注

高氏事物紀原

淮南萬畢術

洪邁の夷堅志

錦繡萬花谷

文苑英華

徐聖初學記
賈似道悅生隨鈔
虞世南北堂書鈔
陶九成說郛
鄭樵通志
歐陽詢藝文類聚
祝穆事文類聚
古今事類彙編
白孔六帖
馬端臨文獻通考
集事淵海
冊府元龜
太平御覽
大明會典

徐氏總龜對類
葉盛水東日記
陶九成輟耕錄
羅大經鶴林玉露
周密志雅堂雜抄
周密浩然齋日抄
周密癸辛雜志
周密齊東野語
葛洪西京雜記
楚國先賢傳
李肇國史補
江南異錄
陳彭年江南北錄
朱輔山の溪蠻叢笑

伏深齊地記
南郡記
田汝成西湖志
竺法真羅浮山疏
南齊記
永州記
荆南記
西涼記
太和山志
茅山記
華陽志
蜀地志
永昌志
袁滋雲南記

乾象占

雷書

五雷經

地鏡圖

魯剛王後靈機要

太清外術

太上科

楊氏洛伽密記

陶氏續神記

祖台之志怪

異聞記

戴祚野異傳

錄異記

李元獨異志

陳寔兩山鑿險

景煥牧閑談

王清明揮塵餘話

姚福庚己編

琅玕漫鈔

西樵野記

陶隱居雜錄

三洞珠囊

奚囊難纂

萬寶山

事海文山

陳元龍事林廣記

閻問事宜

林洪山家清供

王叔微炙轂子

盧諶終法論

杜恕篤苑

劉向說苑

韓詩外傳

賈誼新書

董子

晏子春秋

墨子

管子

鶡冠子

老子

朱子大全

程氏遺書

通鑑綱目
五經大全
性理大全
皇極經世書
南宮從之圖
遁甲山圖
劉向洪範五行傳
京房易占
周易通卦驗
周經援神契
禮斗威儀
春秋異郵
春秋元命包
春秋運斗樞

洞天保生錄
起居雜記
俞宗本の種樹書
務本新書
臚仙の隱書
劉伯溫の多能副事
便民圖纂
居家必用
山居要
王畏の山居錄
王楫の農書
月令通纂
崔實の四月令
夏小正

神異記
陳翔の卓異記
薛用弱の集異記
祖冲之の述異記
任昉の述異記
述征記
玉策
隋帝開河記
胡嶠の陷虜記
段公路の北戸錄
張師正の倦游錄
金幼孜の北征錄
張匡業の行程記
趙葵の營難記

曹子建集

魏文帝集

魏武帝集

仇遠の稗史

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

潘壅の楮記室

林氏小說

唐小說

張來の明道雜志

江隣幾の雜志

趙澄の養痾漫筆

解頤の新語

謝苑叢記

周必大の陰德錄

李氏仕學鈔

王濟の日詢手記

熊太古の黃越集

胡仔の漁隱叢話

俞琰の席上腐談

姚亮の西溪叢話

治間說

瑣錄

海錄

百感錄

劉義慶の幽明錄

自變論

楞嚴經

圓覺經

涅槃經

法華經

劉根別傳

周顒仙碑

修眞指

南

吳淑の事類賦
類説
黃震の慈溪日鈔
何孟春の餘冬錄
朱の離騷證
文系の
翰墨全書
百川學海
百邁の容齋隨筆
章俊卿の山堂考索
王浚川の雅述
蔡邕の獨斷
梁元帝の金樓子
葉世傑の草木子

劉禹錫の嘉話錄
葉石林の避暑錄
趙與時的責退錄
王性之的揮塵錄
陸文量的菽園雜記
顧文薦的負陰錄
遜齋閑覽
蔡條の鐵圍山叢話
彭乘の墨客揮犀
愛竹談藪
龐元英の談藪
孫升の談圃
章航の細談

造化指南
鶴頂新書
八草靈變篇
李峯の太白經註
太玄上の靈變篇
朱眞人の靈變篇
陶弘景の眞話
許眞君書
蕭了眞の金丹大成
魏伯陽の參同契
謝道人的天經
吐納經
演禽書
列星圖

以上四百四十種の書はすべて時珍の引用したものである。

古今詩話

方虛谷集

焦希程集

唐荆川集

楊升菴集

張東海集

何仲默集

錦囊詩對

葛氏韻語

王梅溪集

左貴嬪集

李義山集

李紳文集

張籍詩集

蔡氏詩話

張宛丘集

陳止齋集

陸放翁集

范成大集

石湖集

楊萬里集

誠齋集

陳白沙集
吳玉崑山小稿
方孝孺遜志齋集
宋景濂潛溪集
楊維禎鐵厓集
吳萊淵穎集
吳澄草廬集
畢氏府燕閑錄
高氏蓼花洲閑錄
宛委錄
三蘇文集
歐陽文忠公集
柳子厚文集
韓文公集

劉禹錫集
元稹長慶集
白居易樂天長慶集
錢起詩集
岑參詩集
王維詩集
杜子美集
李太白集
山谷刀筆
蘇黃手簡
邢昺之筆衡
康譽之昨夢錄
劉跛子暇日記
鬼道客話

周必大集
邵堯夫集
王荆公臨川集
梅堯臣詩集
王元之詩集
宋徽宗詩集
黃山谷集
東坡詩集
何遠春渚紀聞
張世南游宦紀聞
異說
白獺髓
靈仙錄
龍江錄

陳士良の食性本草より二種、菜部一種、果部一種。

蕭炳の四聲本草より二種、草部一種、服器部一種。

種、介部二種。

李珣の海藥本草より十四種、草部四種、穀部一種、果部一種、木部五種、蟲部一

十五種、人部八種。

八種、金石部十七種、蟲部十四種、介部十種、鱗部二十八種、禽部二十六種、獸部

果部二十種、木部三種、十三種、九種、服器部十三種、火部一種、水部二十六種、土部二十

陳藏器の本、草拾遺より三百六十九種、草部六十八種、穀部十一種、菜部三十種、

種、禽部二種。

孟詵の食療本草より十七種、草部二種、穀部三種、菜部三種、果部一種、鱗部六

孫思邈の千金食治より二種、菜部

種、權の藥性本草より四種、草部一種、穀部一種、服器部一種、金石部一種。

一種、禽部二種、獸部八種、人部一種。

木部二十二種、服器部三種、土部三種、金石部十四種、蟲部一種、介部二種、鱗部

蘇恭の唐本草より一百一十種、草部三十三種、四種、穀部二種、菜部七種、果部十種、

雷斅の炮炙論より一種、獸部

吳普の本草より一種、草部

李當之の藥錄より一種、草部

獸部二十二種、人部五種。

二種、土部三種、金石部二十三種、蟲部十七種、介部五種、鱗部十種、禽部十種、

三十種、穀部十九種、菜部十七種、果部十七種、木部二十二種、三種、服部三部、水部

陶弘景の名醫別錄より三百六種、併入されども九十五種を除外、草部一百

一種、蟲部二十九種、介部八種、鱗部七種、禽部五種、獸部十五種、人部一種。

四種、穀部七種、菜部十三種、果部十一種、木部四十四種、土部二種、金石部四十

神農本草經より三百四十七種、併入されども十八種を除外、草部一百六十

采集諸家本草藥品總數

五種、獸部二十二種、人部十一種、

種、水部十種、金石部十二種、蟲部二十六種、介部五種、鱗部二十八種、禽部

穀部十種、菜部七種、果部三十種、木部十二種、服部三十五種、火部十

李時珍の本草綱目(本書)に於いて新に増せるもの三百七十四種、草部八十六種、

陳嘉謨の本草蒙筌より二種、介部一種、人部一種、

汪機の本草會編より三種、草部一種、果部一種、蟲部一種、

醫原の食鑑本草より四種、穀部一種、菜部一種、鱗部一種、獸部一種、

種。

汪謙の食物本草より十七種、穀部三種、菜部二種、果部一種、禽部十種、獸部一

周臺王の救荒本草より二種、穀部一種、菜部一種、

吳瑞の日用本草より七種、穀部一種、菜部三種、果部二種、獸部一種。

朱震亨の本草補遺より三種、草部一種、穀部一種、木部一種、

李杲の用藥法象より一種、草部

寇宗奭の本本草衍義より一種 獸部

二種、獸部一種、人部一種。

唐愐微の證類本草より八種 菜部一種、木部一種、土部一種、金石部一種、蟲部

部八種、蟲部一種、鱗部一種、禽部一種、人部一種。

大明の華本草より二十五種 草部七種、菜部二種、果部二種、木部一種、金石

部一種、金石部三種、蟲部二種、介部一種、禽部一種、獸部一種。

蘇頌の圖經本草より七十四種 草部五十四種、穀部二種、菜部四種、果部五種、

人部四種。

木部六種、服器部一種、水部四種、金石部八種、介部八種、禽部十三種、獸部一種、

掌禹錫の嘉祐本草より七十八種 草部十七種、穀部三種、菜部十種、果部二種、

十一種、禽部一種、獸部四種、人部一種。

種、木部十五種、服器部一種、土部一種、金石部九種、蟲部二種、介部二種、鱗部

馬志の開寶本草より一百一十種 草部三十七種、穀部二種、菜部六種、果部十九

韓保昇の蜀本草より五種 菜部二種、木部一種、介部一種、獸部一種。

たのは、一には古來の學說の出處を存せんが爲め、一には各家それぞれの學說を家名を明記したの事はその事蹟を明にせん爲である。分註に各その人名を書いた本草及び三品の別を明記したのは本草學の原始に遡り得る爲め、小綱の下條に未尾に附加したのは、その藥の用途を詳にしたものである。また大綱の下條に疑、正誤、附錄を加へたのは學としての體を備へんが爲であり、單方をその辨出しとし、釋名、集解、發明をそれぞれ分註してその日ち要領を詳にした。辨出一を標出してそれ大綱即ち正題とし、氣味、主治を大書して小綱即ち小見せず、ただ各部を逐ふて物は類に從ひ、目は綱に隨つて擧げ、藥毎にその總名を移すは併せ、移すは移し、増すは増し、三品の區分に拘泥の擧げた藥全部を總括し整理して六部に別け、分つべきものは分ち、併すべし根據に至つては始と求むべき處がないのである。今この綱目に於ては古今諸家の同く玉璫（玉璫は玉の環なり）分たすといふ有様、名目さへ已に尋ねやうがないのだから、事實は蟲を木部に入れ、水と土と同一所に扱ひ、蟲と魚を混雜し、（混雜は混雜する）或は木を草部に置き、或

照。二〇イ。玉璫ハ序ノ註參
之ヲ辨シテハ易ト
モトメテハ辨シテ
水ノハ辨シテハ難
合ノ水ノ味ハ異シ
ノ在ルニハ共ニ山東

實際はその間に於て早くも紊亂されてゐたのである。或は藥にして數條に分
 入が行はれたので、朱書、墨書、朱書、墨書の區別や三品の名目を存したといひながら、
 始めて部ぶ分けとし、唐、宋諸家が更に大に増補を加へると同時に種種なる出
 時。珍。曰。神農の本草は藥を三品三品に分ち、陶氏の別録で藥品を倍に増加して
 が、その否ひ認にん説せつの根柢は、朱書、墨書、朱書、墨書の紛ま入いの事實を捉へたものである。
 な紛錯ふんさくの跡を摘發して、本草は神農の書に非ずと信ぜられたるやうになつたのだ
 て傳ふるうちに、何時どとはなく本ほん文ぶんに紛錯ふんさくつて此こなつたもので、後世こうせいに依つ
 こになるのだから、この一節だけは別録の文であつて、久しい間に手寫ていに依つ
 の數を倍ばい合あせて七十三名であるといふ、これは別録の副品ふくひんと併せてといふ
 してあるのだが、神農の本草は、百六十六種に止るに拘らず、今此書に
 掌禹錫しやううしやく曰く、陶氏の本草の體裁は、神農の本ほん文ぶんを朱書しゆしよに、別録の文を墨書ぼくしよに
 途とに偏執へんしやくがあつてはならぬといふのである。
 自らその人の病狀びやうじやうに隨つて適宜てきぎこれを用ゐるべきものであつて、必ずしもその用
 一、種しゆのみのみを服はくすべき場合もあり、他の藥と配合してて效力を現す場合もあり、

のである。本草に上品を君と爲すとの説は各その宜しきに従ふもので

これに随つて佐使薬を用ゐ相當の效力を發揮させることが制方の要といふ

中焦の熱には黄連が君である。それは何等かの症か反應があればまたそれ

濕を治するには防己が君であり、上焦の熱を治するに黄芩が君であり、

ある。假令風を治するに防風が君であり、寒を治するに附子か君であり、

随つて氣を換ふるのであるつて、その病に對し主たる效力を有するものが君で

に李杲曰、凡そ藥の所用の效力は氣と味と主である。こゝは補瀉は味にあり時

なるものを君と爲すといふ。

之に次ぐのであつて、對症上效力の同じきものは各分にする。或は力の

張元素曰、君たるものを最も多くし、臣たるものは之に次ぎ、佐たるものは

である。

上、中、下三品の等差の意味ではない、效果に現れる善惡の殊を示す意味なの

のが、君を佐けるの臣が、應じて働くものが使ひの用である。

岐伯曰、處方の法則にいふ君臣とは、その病に對し主たる效力を有するも

方。

一、部以上、胸膈以下。

二、部以上、胸膈以下。

三、部以上、胸膈以下。

四、部以上、胸膈以下。

五、部以上、胸膈以下。

六、部以上、胸膈以下。

七、部以上、胸膈以下。

八、部以上、胸膈以下。

九、部以上、胸膈以下。

十、部以上、胸膈以下。

十一、部以上、胸膈以下。

十二、部以上、胸膈以下。

十三、部以上、胸膈以下。

十四、部以上、胸膈以下。

トイフ。君臨スル帝ヲ
天ノ命ヲ受ケテ
帝ヲ

同用するのハ王道であり、相惡、相反を同用するのハ霸道である。相殺をたのもあるが、蓋し相須、相使を同用するのハ帝道であり、相畏、相畏をたのもは彼の毒を制するものである。古方には多く相惡か相反するのハ相殺すものハ彼の制を受くるものであり、相反するものハ兩ながら相合はず、相殺す相使ふ者は我の佐使であり、相惡むものは我の能を奪ふものであり、相畏るものは同類離るべからざるもので、人參、甘草、黄蘗、知母の類の如くである。時珍曰く、藥に七情がある。獨行するものは單方で輔を用ゐないが、相須である。

ない。現今の畫家が雌黄と粉とを混て相近ければ自ら駢に妬むものその證の力があからである。然るに相反するものは彼交に讐として絶對に和合しか、龍骨は牛黄を得て更にその效果の良いやいなるもので、これはそこに制服つより彼我を惡く我に忿る心がなければ、宛も牛黄は龍骨を惡むものである。宗黄曰く、相反するもの害となることは相惡むものより深いものである。

た、細辛は水に漬けて直した、黄耆は蜜で蒸して甜くした、常歸は酒に
けがつかぬこととなるのをそまに仕入れ、轉ずる間に眞僞も好惡も全然見別
蒐て送つて來るのをまた藥の實質を見別ける智識がないから、產地の地方民が採
にあり、藥種はまた藥の眞實を見別ける智識がなく、すべし藥種のいふま
わけてある。はなはた病の成續に於て既往の及ばないものに、斯る原因によ
得る道理はない。建三塘の錢は外はないのであるが、これでは到底斯る効果を擧げ
錢塘の例へば荆州の益州方面へ交通が塞がつた爲に、全國の麻陽の當歸や
及ばない。出るのがあるが、氣力、性理に於て到底舊の中國の本場の物は
な地方から出るのがあるが、氣力、性理に於て到底舊の中國の本場の物は
宋以來楊子江以南の所謂江東の地に於ては、極めて佳からば、かの雜藥は手
縣を舉げてあるの者は、當時の列國の地名を擧げるとき、だかである。國が東晉、劉
ある秦、漢以前であれば當時の列國の地名を擧げるとき、だかである。國が東晉、劉
弘。景。目。漢。以前であれば當時の列國の地名を擧げるとき、だかである。國が東晉、劉
産出する土地とその物の眞僞、陳と新と、いついそれともそれの法がある。

頭、天雄子附云。
四九(三建、烏

シ安徽ノ地方及江西、江東ト稱ス。對江ニ蘇、長江(四)

た。それは陽氣を傷めることを恐れたからであつた。二劑をそれぞれを服させて見用ゐ、人參、肉桂を加へて急に正氣を扶け、生地黃をばその半量を減じて湯にしてはまた復活する、即ち正氣を回復する。そこで仲景の復脈湯（五苓散）を冷まし傷め、四肢が逆冷して目眩昏睡に陥り、心臓の動悸が高度、胃を冷まし傷め、四肢が逆冷して下けたのであつたが、梨を食つた爲にまた脾（脾）はそれの適當として涼薬でその熱を下けたのであつたが、梨を食つた爲にまた脾（脾）とであるが、伯威は元來弱質で、傷寒を病んで八日目に發熱し、醫師とにあるのだ。至元、庚辰六月に許伯威が年五十四で中氣に罹つた時々のだから、ただ右の六陳だけが良いといふ。要は專精なるを用ゐる。つて居るが、かしかし、大黃、木賊、荆芥、花柳の花の類も陳久なものが良い。久しく保つたものが良く、その他のもは精新なものを用ゐるがよいといふ。泉。曰く、陶隱居の本草には、類毒、枳實、橘皮、生薑、麻黃、吳茱萸は皆陳年である。若しその根拠を推定せ

水

五九(註) 脉

卷之四

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

五七(逆冷)熱ヲ失フ

五六(傷寒)熱病。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

卷之五

(五)至元八世祖

○ 子 嶺 華 / 聚 中

五州華州、陝西、關

省絲戒ノ地ヲ。

西ノ北ノ東ノ三ノ山(川田)

卷一百一十五

子
 者、靈、道、南、部、今、地、山、方
 靈、道、南、部、今、地、山、方
 韓、地、今、國、時、西、代
 金、上、黨、ノ、義、本、參、照
 本、草、(一) 柳、代、諸、家、本、草、
 金、(二) 柳、代、諸、家、本、草、

漿水の類の如きは、その物は至つて微なるものであるが、その用に至つては甚
 用ねれば誤りはない。それには據がある、(金) 上、黨、ノ、義、本、參、照、
 宗。曰く、凡そ藥を用ゐるには必ず本場の產地から出たものか否かを擇んで
 難なことである。
 るので、斯の如くして病を治療しやうとして固より効驗を期待することは至
 の者が竊に素人好みに藥と取換へたのをそのまゝ知らずに終るやうなこともあ
 ぬといふ有様であり、それが王公貴人の爲に合藥するやうな時になること、
 そ皮を去り心を除く等、取扱に就て適量にも合はず適當な量を取ることを知ら
 纔に半分をも取らず、地黄、(金) 門、冬、は三分してその一を棄てるといふやうな凡
 ふまでもない。合藥の場合にも剝除の分量の適度を知らずにだ遠志、牡丹は
 の價物に使用したりするが、それ等の大價物であることは
 蟬蛸を膠で桑の枝に附着せたり、蛇胎を醃(金) 身代りにしたり、齊虎を人參
 で酒して潤を取つたり、蜈蚣は足を朱で染めて赤くしたりして良品の如く見せ、

に上するものである。泉曰く、急病を去るにこれを用ゐ、のち大病を去るにこれを用ゐ、徐に緩やかに病

かすへを吐かせねば、
 結胸、上喘、口入らずして死す。
 亂せしめ、發汗すべきものを散り、
 胃を開き、胃を利する。下通どすへ、
 飲食を進むべし、陰陽を調て發汗せしむるの宜きもの、
 肺を蕩滌し、經絡を導き、吐瀉の宜きもの、
 華佗曰く、病に湯に導き、
 九の宜きもの、散の宜きもの、
 下通せしむるは、
 堅積、
 腸積、
 煩、
 腹脹満して、
 心悶、
 寒、
 毛孔が閉ぢ、
 形物も固、
 動物も流、
 して喘、
 上喘、
 口入らずして死す。

性能に随はねばならぬところにて、それによつてはなからぬのである。

云云。肺炎、良子、胸結(六)弱、胃、腸、合、助、消。

ても宜きものあり、湯や酒に人れてはならぬものがある、それはいづれもその薬の
 に漬けて宜きものの、膏に煎して宜きものと散薬と散薬にして宜きもの、水で煮て宜きもの、
 薬の性能に丸薬に九薬に膏薬に散薬に水薬に酒薬に湯薬に人薬に、これらはいづれもその薬の
 新方を誤る『過』とはこのことだ。○藏物專精に就ては後に述べる。
 者そのものの過、過とはいねばならぬ。唐の耿湋の詩に「老」醫舊疾に迷ひ、朽
 を正確にせずして病に用ゐるならぬ。固より効驗はなわけ、随つてそれ等は
 一でなく、精と粗とではそれだけの差異がなければならぬ。もそれ等の撰擇
 り、その時季を誤れば氣味が完全でない。それと同じく新と陳とでは効力が同
 一の採取に時季がある。産地を誤れば性味が不充分であるとか異なる場合があ
 であるから凡そ諸の草木、昆蟲は産地に依つて良否があり、根、葉、花、實は
 と、その脈證は半に減じ、更にうつけて服させて見ると、追追本安に赴いた。
 ふことに氣が付いたので、再び薬品の新しいものを買つてそれと服させて見る
 て居る。そこで薬品が新しいので、精新なものでなく、恐らく陳腐なものであつたのだとい
 たが病勢は一に向退かぬので、改めて再び診察して見ると脈證はやはり相對し

あるものも化し易くする爲である。水滴を入れて丸にするのも化し易い。煉蜜で稀糊を以てする。それは化し易くする爲である。一夜水に浸した餅を炊き用る。半夏、南星を強ひて用ゐて燥去らうとするときは、丸にするのに薑汁と使用するに、よく、酒や醋で服させるのはその丸薬を腹中で溶せる意味なのである。小さくする、丸薬に用ゐる稠糊は直に溶けずその丸薬に落付くものにして、圓からしめる。中焦を治するには大さこれにカギ、上焦を治するに極めて煎じ滓と共に服させる。下部の痰を去るにはその丸薬を極めて大きくし光りは去るだけのものである。氣味の厚ものは白濁へて用ゐ、氣味の薄いものは積を以てし、痰を去るに及ばず、ただ胃中及び臍の積を以てし、風寒を發散するに慈白を以てし、膈上の痰を去るに蜜を以て治するに、酒を加へて煎じ、濕を去るには生薑を以てし、元氣を補ふには大棗を以てし、かすれば丹り易く散じ、經絡をめぐるのである。凡そ至高の病を具がなかつたから、藥品を口で細かに咬み砕きその汁を煎じて飲ませたもので、を治するのである。咀咬といふのは古の方治で、古は鐵石等の物を研り砕く器

※(四)稀糊ハスノリ。

ユ
リ
稠糊ハソノリ

云フ。
※(三)臍ハ胸臍以上

ト耳ノ目至高ノ病ハ部等ノ病ノ頭

（トハ）小豆ハアツツキ。

（セト）胡豆ハ晩豆。

（オホ）大麻ハアサノ實。

（モ）細麻ハ胡麻粒。

毒の場合には四丸を服し、大さ小豆程にする。五物のうち一物が毒の場合
ち一物が毒の場合には三丸を服し、大さ大さ胡豆程にする。四物のうち一物が
物のうち一物が毒の場合には二丸を服し、大さは大麻程にする。三物の
には毒なものも一つの物のみの場合は一丸を服し、大さは細麻程にする。二
軍の如きものだけは極量まで用ゐてはならない。右の本經のいふ所をやうにす
弘景曰く、今の藥の中で單行するものの一兩種は毒がある。巴豆、甘遂、
將にして病が去る程度とする。

で病が去れば直に止める。去らぬ場合にはそれを倍にし、なほ去らぬ場合には十倍す

若し毒藥を用ゐて病を療する場合には、最初には黍粟一粒程の少量から用ゐ始め、
に用ゐるわけに行かぬのである。誠に困つたものといふ外はない。

服せぬといふやうなことになる。これでは四種の診察の術の一々をだも完全
無いから煩しく詢ねるかの如くに誤解し侮つて、往々にして藥を與へられ
ところが患者はまたあまり細かく詢ねることをうとがり、醫者に實力が
へ十分に行かぬ以上、勢ひ患者に就いて詳細な點を詢ねる外はないのであるが、

切（セ）ノ四ツツリ。
（セ）四診ハ望・聞・問、

から、容體を見るにも聲を聴くにも、神様でもなけれれば六ヶ敷い。脈を見るさ
奥深く帷を垂れ籠めた中に生活し、その身は手や臂まで薄く纏ふて居るのだ
で完全なり得や道理かあらうか。現今の富の家の婦人などになれば、常に
とが出來ず、醫者はただ脈だけを根據として藥を與へたとならば、いか
にあるか、若し脈と病とが相應せぬ患者があつた場合、その病狀を十分に
と骨皮膚を觀れば能くその情を知り得るから、それを以て診法とするとい
は外である。素問に、凡そ病を治するに、その形氣、色澤を察し、人の勇怯
に虛、二に實、三に冷、四に熱、五に邪、六に正、七に内、八
のである。この六失のうちの一失があつても病は治し難い。又要がある。
るに失し、醫を擇ばざるに失し、病を識らざるに失し、藥を知らざるに失す
宗。曰く、病に六失がある。審にせざるに失し、信ぜざるに失し、時を過ぐ
であつて、その内の一があつても治癒し難い。
ぬのが四、衰弱甚しくして藥を服せないので五、巫を信じて醫を信せぬのが六
身を輕じ財を重するの二、衣食の適度を守れぬのが三、陰陽氣の定ら

患者の體質の強弱と病の輕重とを計つて進退、増減すべきものであつて、必ず

服、三服に分服するといふことは勢力を續けて及ぼさしめる意味なのである。

に効力が滋^じし、病の下部に在るものは多量を服めば下部に効力が峻^{けん}するといつてある。凡そ再

でもよく、病の下部に在るものは多量を服するがよい。少しづつづつ服めば上部

果^{くわ}曰、古人の服藥の活法として、病の上部に在るものは少しづつづつ幾度服ん

の法則があるから、よくそれを審にする必要がある。

薬にも、生を煮て服む場合と、熟^くを煮て服む場合とあり、それぞれ服用に就て

薬を服むには、時間を長く隔てて服む場合と、度々續けて服む場合とあり、煎

入^いきものと、飲で服むものと、冷して服むもの、と、熱して服むものとあり、煎

弘^{くわ}曰、今の方家が先食^{せんじき}、後食^{こうじき}をいふのはこの意味である。又、酒で服む

た朝^{あさ}がよく、病の骨髓^{こつち}に在るものは食物を十分攝^{とつ}たた夜^よがよい。

るものは先に薬を服んで後に食事を攝^{とつ}る。病の四肢^{しじ}、血脉^{けつみやく}に在るものは空腹になつ

病の胸^{きゅう}膈^{かく}より上に在るものは食事を先に^{せん}して薬は後に^{こう}に服む。病の心腹^{しんぷく}より下に在

點^{てん}を約^{やく}取^とつたことである。

めてこれ衰へしめるのであるといふ。これ皆素問の中の最も精要な
 あり、熱にして而して寒にするのは之を陽に取るのであつて、所謂その
 ともいつてある。又、多くの場合寒にして而して熱するのは之を陰に取るの
 して氣をして和せしめて必ず已ましめ、病勢展の餘地なからしめねばならぬ
 もは勢ひ破れしめねばならず、堅結したものは勢ひ潰しめねばならず、
 するであつて、その始には同じい所を伏する爲にその因を先に通する
 通するので、それは必ずその主たる所を伏する爲にその因を先に通する
 は反治する。反治とは熱因は寒用し、寒因は熱用し、塞因は塞用し、
 しいに拘らず同一な手當の法である。又、逆なるものは正治し、從なるも
 せ、發汗させ、下し、補し、瀉する、かやうにすること病氣の久しいと新
 め、損するものは益し、逸なるものは行かしめ、驚くものは平ならしめ、吐
 るものは行らしめ、燥けるものは濡し、急なるものは緩にし、散するものは
 ともは削り、客するものは除き、勢するものは溫め、結するものは散し、留
 高きものは抑へ、下きものは舉げ、餘有るをば折き、足らざるをば補ひ、堅

秦承祖、南齊、(は)尚書、(の)格、澄や、
(光宅)徐文伯、嗣伯、群、從兄、弟、あ、り、い、つ、れ、も

仲の垣ちゅうのゐ　諸しよ　名な　士し　工こう　匠しやう　の　術じゆつ　に　精しやう　く　し　く　、　劉りう　宋そう　の　時とき　代だい　に　は　幸きやう　成せい　、　元げん　徽き　、　胡こ　治ち　、

の
高
い
も
の
で
は
阮
鑑
如
張
先
な
ど、
逸
民
に
は
官
市
に
安
や
江
左
の
葛
洪、
謝
靈
運、
殷
璠

來は張苗宮泰劉更斬郡趙泉李子などの一代の良醫が、あゝ身分か

し得るを以て神、天子の統御する範圍をなすことを以て皇朝とする。

[illegible]

敬
 啟
 者
 本
 館
 為
 廣
 告
 之
 便
 特
 設
 此
 欄
 凡
 有
 欲
 登
 告
 者
 請
 向
 本
 館
 接
 洽
 或
 函
 索
 簡
 章
 即
 寄
 奉
 不
 誤
 此
 佈
 宣
 統
 三
 年
 十
 月
 十
 日
 大
 清
 報
 館
 啟

[illegible][illegible]

りてある處の濃の淳于意と華佗の用いたる方々に於て居るものもある。

の
方
注
略
載
せ
ら
れ
て
あ
る。
そ
の
薬
の
用
方
を
見
る
に
や
は
り
本
草
の
主
張
の
通

和緩の書は傳らぬから批判ならぬが、道徳の教に精練の中に智慧の用ゐたといふと、士と

其の理を盡すといふのは、その故である。春秋時代よりも以前や周の秦の暴虐たるを

其の理を盡すといふのは、その故である。春秋時代より以前や、秦の時の名醫

（九七）南米ノ時ノ人

如。源、俗ニ本ノ家ト別ノ本ノ派ト稱ス。陸下同シ、陸ハ男子

間へて見やうとはせず、徒に虚名だけを追ふに専なる態度である。自ら恐るゝ自らの研究の多くの過去の省みとさば、これは病源を深く結^{むす}己惚^{おぼ}れを起し、十日一ヶ月と經つても病氣が癒えぬとさば、忽ち起^{おこ}減^{げん}に居らうといふ向構ひなく、それが偶々當りて居らうといふ分量が取違つて居るに到りやうがない。薬の性質の反對相^{はんこう}、畏^{おそ}れ付けをややそれを見せ、或は怪しい聞きかきとしたかのやうに鼻高くして居る。その藥にじつ付けるやや、それを大發見でもしたかのやうに思ひ、たゞ舊方なはい處方などをして患ひをもつかぬ出して方を見る、本草などを看ることを耻やうに思ひ、たゞ當今^{かうこん}の醫者^{いしや}のやうに覺える、それで止めてしまふやうなものではない。一般の間が微^かかに効力がある。所謂^{いわゆる}本草の間久しく之を服する種位のもので、僅に數種のものをすすめるのである。多量も少なくはない。多くて二十餘年

日雲コニ神ノ藥石、兵ヲ命コニ延ニ老ヲ除ク
白ヲ生シ服ス品ヲ仙飛丹、依服道食、
神ノ藥石、兵ヲ命コニ延ニ老ヲ除ク
白ヲ生シ服ス品ヲ仙飛丹、依服道食、

[illegible]

部去つて當歸一兩半を加へて見ると安になつた。小續命湯は今の人も多く用ゐる。人参、芍薬を加へて足ると、後にまた大いに冷感を覺えるといふ。因て人参、芍薬を加へて筋急を治し、黄芩、人参、芍薬、各半減して中寒を避け、杏仁、薤白を加へて上二部、右下部の二部が緊して力がある。五七年来右の手足の筋急し拘攣を、持するに服したるが、近來は寛解を服して効果あるといつてゐた。脈は寸口左〇〇ある患者は五年四十五年來弱で屢に來服して、少年の頃は土硫黄數斤をせると遂に癒えた。

名水カサ、即水泡疹。(一一一)和

尺中云。右ノ口、左(三二)ト
上ノ口、左(三二)ト

してこれに掲げたのである。
るが、徴候に随つて加減するところを知らねば危険な場合があるから、特に例と

宗。賣く、咬咀には合味の意味がある。人の口齒を以て物を咀嚼するやうに、

恭。曰く、咬咀とは商量樹酌することである。

(のやうにするのである。

末の多いものと末の少ないものとを細切するところ咬咀(口で咬み砕く、大の大豆、吹いて細末を去るのである、薬には碎け易いものと碎け難いもの、凡そ湯、酒、膏、藥に咀といふことがある。それは分量を秤り畢り、之を搗いて

斛といひ、二斛を右といふ。

撮とし、十撮を勺とし、十勺を合とし、十合を升とし、十升を斗とし、五斗を

時。曰く、古代の一升は今の二合半である。量の起算は圭であつて、四圭を

る。

内てから上から抑へ均してはならぬ。正しく置き微動させせて平にするのである。する。升の寸方は上徑一寸、下徑六分、深さ八分である。散薬を入れて量るには、合は升を用ゐて均に平にする。十撮を一勺とし、十勺を一合とし、十合を一升とす。藥を升、合で分つのは藥に虚實、輕重があつて、斤、兩で量り得ぬものがある。

凡そ方に紐（紐）一尺を用うとあるは皮を削り去つて重さ半兩のものが正しく、甘草（甘草）を正確とする。

が正しく、その子に各一匁、輕重があつて正確には秤ぬものは升で平に量つた兩が正しく、一升は四兩が正しく、蛇子（蛇子）一升は三兩が正しく、地膚子（地膚子）一升は四兩が正しく、一升は三兩あるが正確、吳茱萸（吳茱萸）一升は五兩が正しく、兔絲子（兔絲子）一升は九兩が正しく、椒（椒）一升は三兩あるが正しく、洗ひ去つたものを秤つて五兩あるが正確である。

凡そ方に半（半）一升といふは、洗ひ去つたものを秤つて五兩あるが正確である。小あるが三箇が一兩に相當し、乾薑（乾薑）一匁と一兩を以て正確とするのである。若干箇は（若干箇）を去つたもの一が二箇に當る。橘皮（橘皮）一分は三枚に相當し、棗は六箇に當る。附子（附子）、干烏頭（干烏頭）、干姜（干姜）あるのは、粒に大小があるが、心皮を去つて秤り一分が十罪なのである。

効力があるがなかつたのだといふ。しかしそれは藥の罪ではなくて藥を用ゐるものに入（入）は九（五）楊梅（楊梅）のものを服（服）させて、それで病が去らなければ、これは藥になしたので、或は丸藥にし難（難）く黄大にして用ゐてもいづれも奇效がある。今の

世アリ。附（附）謂ハ藥ハ禾莖

（五）楊梅ハヤハモモ。

ト。青斑豆ハ豌豆ノ

雞子黃丸。製ノ丸。用
彈丸。製ノ丸。用
丸。製ノ丸。用

を水で煮て三升を取り、一升づつ一日三回到服させ反應のあるを以て度と
櫓くもものを治するに用ゐた治中湯は、人參、虎骨、甘草、四物共に二兩
古人の用意を知らぬからである。仲景の胸痺の中心痞逆氣で心を
宗。黄曰、現今の人が古方を用ゐて一向効果が見えぬのは何故かといふに
如しは大豆二箇に相當し、彈丸及び雞子黃の如しといふのは梧子四十に相當する。
豆の如しは今の赤豆で三、大、小に相當し、大豆の如しは小豆二箇に相當し、梧子の
豆の如しは細三箇に相當し、胡豆の如しは今の青豆の如しは二大、小に相當し、小
くても宜しいが餘り大が小さいが。黍粟も同様である。大、小の如しといふ
凡そ丸藥の場合の標準に、細麻の如しといふのは胡麻の如し、大、小の如しといふ
ある。
豆の大を以てしてこれを用ゐたのである。現今の人の刀を以てて倒すと同様で
果曰く、咬咀は古制であつて、古代には鐵が刃がなかつたから口で咬細し、麻
味である。

二大十濟
通學三ノ
醫士シ人
衛ナリサ
毒シイサ
スクシイ
漢禮レテ
朝

毎に水一甌を用ゐるのが標準である。多ければ加へ少ければ減する。もし劑多
時珍曰く、陶氏がこゝにいふのは古方なのである。現今少量の湯劑は、一
之。オ。曰く、湯中に酒を用ゐるには、熟した時を見計つて飲下すがい。
湯を服する場合は、少くは少し沸かす位がい。熱ければ下り易く、冷ければ嘔き出し易い。
かすの濁を去り、紙を以て密蔽して置く。藥湯を溫むるに鐵器を用ゐてはならぬ。
つてはならぬ。い。汁を取るには新布を用ゐ、兩人で尺を以てこれをつくり、澄し計
湯は熱くする。利湯は生なることを要するから、水を少く用ゐ、藥汁を少量に取り、
ある。しかし湯は生なることを要するから、水を少く用ゐ、藥汁を少量に取り、
處に隨ひ、大略二十兩の藥に對して水一斗を用ゐ煮て四升までにするところが標準で
凡そ藥湯を煮るには微火で少し沸ける程にせねばならぬ。使用する水は方
完全に混合するやうに軽い疎かにして見て、再び混合して、むらなく擣くのである。
結の反（い）いて見ても、かになつたとき、ソロソロと散中に入れ合せて研擣く。散が
諸藥はいづれも黄になるまで煎つて膏のやうになるまで擣合せ、指で撥（發音莫
回擣き、色と理と全く同す）ればよい。巴豆、杏仁、胡麻などの膏膩のある

る場合には三度火にかへ三度休め、折熱勢を洩して薬味を存分に抽出せざるやうに日の朝から明日の朝迄をいふのである。また一々に止むるものもある。膏を煮て密覆して洩れないうやうにする。時といふのは時一週一晝夜をいふので、今凡そ膏を合すには初め苦酒(醋也)に漬けて浸み徹せしめて汁の多くを用ゐない。服むのである。

膠などをを用ゐるには、粉の如く細末にし、用うるに方も湯中に入れ攪き混ぜて陳藏器曰く、凡そ湯中麝香、牛黄、犀角、羚羊角、蒲黄、丹砂、芒消、阿膠、これら一劑に匹敵するものがある。いづれも先に暴燥するのてである。飲む凡そ建中、腎瀝の諸補湯は滓を二貼分を一つに合せ、水を加へて煮竭して之を七日の間土中に埋めて火毒を出して飲む。

の袋に入れ壁に入れて密封し、それを大鍋の中に入れて求で一日間煮沸した後、それぞれ方々の法則に隨ふのである。又酒で煮るものもあるが、それは薬を生絹の袋に入れて酒の中に置き、或は薬物を煮て飯に和して同じく醗すものもあり、時珍曰く、別に酒に醗すものもあり、或は薬を以て汁を煮て飯に和し、或は

方名ナリ。
建中、腎瀝、鹿

けてもよし、散にして服んでよいのである。
口數は寒暑に隨ひ、澹して汗を出るのである。汗はまた暴燥し、微し、搗いて更に實置、凡そ藥を酒に漬けるには皆細かに切つて生絹の袋に盛り、酒に入れて密封して置く。
冷にして服むがよい。
又陰寒や暑中の伏陰に在るものには水中に沈めて服むがよい、又陰寒や煩燥や暑中の伏陰に在るものには水中に沈めて服み、補中藥はトロ火で温めて服むがよい、陰寒、急病はまた強火で急に服み、攻下藥も強火で煎る。また汗藥の場合には必ず強火を用いて熱いまま服くは水部に述べてある。また煎熟したの汁を服下し、大黃、硝石ある藥は再煎して温め、服み、位のものでなければならず、流水、井水、使用する水は汲みだてての甘味のあるらぬ。火は木炭か蘆、葦を用ゐるが最よい。使用する水は汲みだてての甘味のある意せねばならぬ。また火加減を計ることも重要なことで、強過ぎ弱過ぎては注いで、これが取扱には、よく洗ひ淨め封を固くし、小心な者取扱はすやうに注る。凡そ藥を煎するにはいづれも銅鐵器を忌む。銀器、瓦罐を用ゐねばならぬ。して水少し、水少し、藥味が出ず、劑少くして水多ければ藥力が煎耗するからであ

サ 著ス、本草集驗撰
炮二卷、三及乾寧記。
世論之、雷公ト謂フ。
梁守國、雷公ト御ス。
二 雷、雨、宋、人、内

かくす。れば丸薬は久しきを經ても壞れない。

凡そ蜜を用ゐるには皆先づ大に煎じてその沫を掠め去り色を微黄色ならしめる。でも含んで居たとすれば、爲に却つて害がある。蠟を用ゐる本意ではない。

下と直に散化し易いわけで、完全に臘中へ到達する筈はあるまい。もし毒薬を通つて病に直接作用せしめる爲である。しかるに若し蜜を投じたならば咽を果曰く、丸薬に蠟を用ゐるのは、その薬の氣味、勢力をそのまゝに關^{かん}腸^{ちやう}を

るのである。

凡そ丸薬中に蠟を用ゐるには、皆熔して少量の蜜の中に投じ攪^かき調^{てう}へて薬と和する。水飛して瓦で炒つて用ゐるがよい。

いづれも膏仕^し上^{じやう}る頃を待つてこれ投入し、黄丹、胡粉、密陀僧^{みつたそう}はいつれもまた朱砂、雄黄、龍腦、麝香、血竭、沒藥等の材料を含ませる場合には、

も時に火加減に深く注意して強過たり弱過たりせぬやうにせねばならぬ。
やうになるまで煎じてから水に入れたれど數百回まで抜離し引離す。いつれ
して火毒を去つてから用ゐるのである。また松脂を用ゐる場合は、延べに
すとの滴が球になつて散らぬまで煎じてから別の器に移し、三日水に浸
煎して黄丹、或は胡粉、或は密陀僧を入れ、二度火にかけて三度休め、水の上
三日間浸してから煎じ、藥の枯れるまで煎じたととき絹濾して雜物を除き、
時珍曰く、凡そ膏を熬つて癰疽、風濕の諸病に貼けるは、先づ藥を油中

糊粉を膏の中に入れて研つて消散させるのである。
くし、絞つた膏の中に入れて下に沈んで凝聚せぬやうに手速く攪拌する。水銀
塗、擦してもよい。膏中に雄黄、朱砂、麝香などを入れるときは別に擣つて
れを新布で絞つて滓を去るのであるが、滓も酒で煮て飲んでよく、膏の滓を病所に
焦る位を頃合とし、白芷、附子があるときは少し黄色になつたときと程度とする。
沸かき、静になるまで揺廻して止める。中、薤白、薤白を入れたときとあるは、薤白が黄色
せねばならぬ。火にかけたとときよく揺廻しなから沸騰させ、最後にこれを下して

藥效が病的に中せぬといふこととはないのである。歲物は天地の氣の專精なるもので、病機を視誤る失敗はなく、司歲がその用ゐんとする藥物に完備してゐるに居れば、故によく慎重にして、その氣の關係と、適否に對する注意を正確ならしむれば、のならば天地の氣の盈虛、地に本く系統のものならば地の氣の盈虛が原因となつて居る。そも病發の端といふものであつて、その病が主として天に本く系統のも對する關係の如何に依つて、それぞれ治を分たねばならぬ。乃ち五臟の盈虛が、天地の氣の相關に因る六化の理を明にして、五味を生ずる所以と、それが五臟の司天は寒化を爲し、在泉は燥化を爲し、在泉は辛化を爲し、濕毒を生ぜぬ。太陽の寒毒を生ぜぬ。陽明の燥化を爲し、在泉は火化を爲し、在泉は苦化を爲し、在泉は甘化を爲し、在泉は苦化を爲し、在泉は酸化を爲し、少陽の寒毒を生ぜぬ。太陽の熱毒を生ぜぬ。厥陰の風化を爲し、在泉は燥化を爲し、在泉は酸化を爲し、少陰の熱毒を生ぜぬ。岐伯曰く、

采藥分六氣歲物

ノ説
(一)素問至真要大論

ある。交ぜ用ゐてはなぬ。交ぜ用ゐれば下痢するところがあるからである。
をうゝとものには飴のみを用ゐ、糖^{ハチ}を用ゝとものには糖のみを用ゐるので

腎は遠にあり、脾は胃の中にある。腸、腫、胞、膽にもまた遠近がある。これ
 薬に用ゐる。輕に重が、臟の位置、單方が奇であり、複方は偶である。心、肺は近にあり、肝、
 王。冰。曰、所謂寒、熱、溫、涼をその病に逆用するのである。
 法を用ゐる。奇にする。奇にして去れば偶にし、偶にして去らぬときは反佐の方
 少きは一にする。大量のものは數を少くし、少量のものは數を多くし、多きは九に量
 を原則とする。大量のものは數を少くし、少量のものは奇に偶にして服薬は大
 量に偶から奇にして服薬は少量を原則とし、ひ下を治するに急を原とする。近
 きに偶から奇にして服薬は少量を原則とし、ひ下を治するに急を原とする。近
 を補ひ上を治するに緩を原則とし、下を用ゐず、下通させるには偶を用ゐない。上
 もの病は偶にする、發汗させるには奇を用ゐず、下通させるには偶を用ゐない。上
 く、病に遠近あり、證に中、外あり、治に輕重あり、緩に急あり、方に大に小あり。又
 岐伯曰、氣に多少あり、形に盛衰あり、治に緩急あり、方に大に小あり。又

七方

勝つ所の以てこれをも平治するのであつて、風は濕に勝ち、酸は甘に勝つ類の
 效力、作用は異なるのである。故に天氣下に浮し地内に浮するものは、皆その
 氣が散らず、氣が專なれば專に當る。不足なるを專精せんけいの氣が藥物を肥濃ひじやうにし、
 五連ごれんが十分餘あるに當る。專精せんけいの氣が藥物を肥濃ひじやうにし、使用の結果がい氣味
 病の主たるものに於けるせしむるやうにして、遺漏いろうなきやうに心懸けねばならぬ。

あるが、力化する。氣味は厚みあり薄く下淫するには燥あり、随つて外に多差あるが、力化する。氣味は厚みあり薄く下淫するには燥あり、随つて外に多差

本草綱目序例

らしめるのである。

あ、力を參合して引出すやうにする。乃ちその始は同じくしてその結果を異な
その佐を逆にし、その氣を同じくして、寒に對しては寒、熱に對しては熱を用
ば調子が合はぬと同様に、氣も同じくなくれば相格するもので、聲が同じくなく
熱の極端に甚しい場合は反對の氣とは相格するもので、あるが、かし寒、
寒を以てして、微小の冷はこれ消するに熱を以てするの微小の熱はこれを折くに
ち反佐に依つて病の氣と同じものを用を試る。一 體微小の熱はこれを折くに
ものを取る。かくて奇方で去らぬときは偶方を主とし、偶方で去らぬときは小
もの毒を、毒あるものは寧ろ毒なきを穩なもの量を大ききいものよりは小
腎には一を服するの常制となつて居る。方はその重きものより寧ろ輕き
て服する。肺には九を服し、心には七を服し、脾には五を服し、肝には三を服し、
を用うべき場合は數を多くして服し、遠にして奇を用うべき場合は數を少くし
方が奇にして分兩の偶なるあり、方が偶にして分兩の奇なるあり。近にして偶
に對する醫者の識見さへ高遠であれば自由な事に當つて必要を得るのである。

し得ない。必ず大劑にして數を少くし、下走を速くし、下走を速くし、やうにする。心、完。素曰、肝、腎は位置が遠いから數多くすればその氣が緩にして速く下達して服させるものがこれである。

つて度服する小方がある、これは心、肺や上部の病によい。徐徐に少くし、微なく系統が單一で、二味の薬で治し得るものによい。また分量を少く證小方。從。正。曰、小方に二ある。君一、臣二の小方があつて、これは病に他の證分中。脘。人が分であると思ふのである。

三にして天の分、身の半より下はその氣三にして地の分、胃を中心とした氣を近としないのである。しかしを以て之を觀れば、身の半より上はその氣を肝を遠とし、脾、胃を中としない。劉河間曰、身は遠となし、身の裏を下部遠き箇所にある病に多いのである。王太僕曰、心、肺を以て近とし、腎、下のこの方がよい。また分兩を大にして頻服する大方がある。これは肝、腎や微が幾種かを兼ねて居て系統が一でなく、二味の薬品では治すべくない證張。從。正。曰、大方に二ある。君一、臣三、佐九の大方がある。これは病の證

汗に奇を以てせず、下には偶を以てせずといふのである。
 根、青龍は偶大方である如き、所謂その表を發するに用ゐるのである。故
 である如き、所謂その裏を攻るに用ゐるのである。桂枝、麻黄は偶の小方、
 ある例へば小承湯、調胃承氣湯は奇の小方、大承湯、抵當湯は奇の大方
 完素曰く、身の表は遠であり裏は近である。大、小は奇、偶を制するの法で
 きとさには二にするのである。
 大なるとは数は少くし、小なるとは数を多くし、多くするときは九に、少
 れば奇、偶の制共にその服を大にし、近ければ奇、偶の制共にその服を小にし、
 は制の中なるものであり、君一、臣二は制の小なるものである。又曰く、遠な
 大方岐伯曰く、君一、臣二、佐九は制の大なるものであり、君一、臣二、佐五
 治に緩急あり、方に大小ありといふのである。
 は三種の方の形式であり、大、小、緩急は方調製の四箇の法則である。故に
 めて七方の制なるものが分れて來るのである。次第で奇、偶、複といふ
 或は堅、それぞれ臟腑の證徴に隨つて藥の品味を施さねばならぬ。是に於て始

頃は藥力が已に衰へるものだからである。

る方、これは氣、味が薄ければ上を補ひ上を治るに長があつて、下に行き無い藥物は藥性が純にして功が速い。無毒の藥を用ゐて病を治する方、これは毒の性を肆に働かせぬのである。これに散比すれば効力の發生が速いのである。品數多く用ゐて緩める方、これは藥品數が多ければその力が互に牽制して各藥を緩める方、病が胸に在るものに對してその留恋を取るのである。丸藥に從正、緩方、五緩方にある。甘草を以て緩める方、これは甘草、糖、蜜の類である。

すものである。乾薑を服して中を治すれば必ず上に偕し、附子を服して火を補へば必ず水を潤用ゐて肺を治すれば必ず脾を妨げ、茯苓を用ゐて腎を治すれば必ず心を妨げ、好古曰く、上を治すれば必ず下を妨げ、表を治すれば必ず裏に達ふ。黄芩といふのである。

中を治するには上下俱に犯さない。故に過無さざるを誅伐するを命けて大惑といふ

完素く、聖人^{せいじん}は上を治するに下を犯さず、下を治するに上を犯さず、

對する例も同様である。

藥が心を凌げば心はまたまます衰へるものである。その他の上下、遠近に腎にぬ。腎に收させてはならぬ。その氣味を心に吸させてはならぬ。その氣味を心に吸させてはならぬ。急に通過し

王冰曰く、

假令^{かろう}腎に在つて心氣が不足せる場合、服藥は、急に通過し

が吸收されて行つて了んである。その制の適度を越え誤らぬやうにせねばならぬ。病所に行き過ぎて遠いものに對し中道の氣味のもを以てすれば、途中で效力の制は急を以てする。氣味を急なるには氣味を厚くし、緩なるには氣味を薄くする。緩方岐伯曰く、上を補ひ上を治するの緩は緩を以てし、下を補ひ下を治するの緩方

を服すといふのは乃ち五臟の生成の數なのである。

氏所謂^{しそ}肺は九を服し、心は七を服し、脾は五を服し、肝は三を服し、腎は一王^{おう}す小劑^{せうざい}にして數を多くし、散じて上に行き易からしむるやうにするのである。必ず肺は位置が近いから數多くすればそれの氣が急に下走して上に升發し得ない。

のは何故であらうか。事に臨んで宜きを制するには、また増減が必要だといふ
 て五味を以て奇となす、大承氣は下藥なり、反つて四味を以て偶となすといふ
 するといふことであらう。然るに仲景が方を制するに、桂枝は汗藥なり、反に
 も微にす。汗は出難いものであるから、併せ用ゐて力を齊し、効果を大果
 する意味は、下すこととは易いものだから、單行で力を孤にし、効果
 ず、下藥は奇を以てしなれば藥毒が攻めて過る場合があるといつて居るが、
 下に宜くない。王太僕は、汗藥は偶を以てしなれば氣が外に發するに足ら
 ざるもの宜い。藥を陰の數二、四、六、八、十に合す偶方、これは汗に宜く、
 用ゐる偶方、これは古方といつたもので、この二方は病の下に在つて遠
 從。正曰く、偶方に三ある。兩味相配するの偶方と、古の異なる二方を合せ
 偶方。大方で、所謂その發散の效力を用ゐるのである。
 所謂その攻下の效力を用ゐるのである。桂枝、麻黃は偶の小方、青龍は
 完。素曰く、假令小承氣は奇の小方、大承氣、抵當湯は奇の大方である如き、
 下すに宜しい、汗に用ゐてはならない。

近きもの、宜いもの、薬を賜ふの數、一、三、五、七、九に合す奇方、これば

從正曰、奇方に二ある。單獨に一物を用ゐる奇方、これらは病の上に在つて

奇方。王氷曰、單方である。

ぬかたであらう。

下。いづれも緩にすへ、急にすへ、急攻の急病、これは中風、價格の病に用ゐる。氣、味俱に厚きの急方、これは氣、味俱に厚き下泄を以て病勢を奪ふの方であ
る。毒藥の急方、これは毒性の能く上涌、下つて散じ易く反應の速なる方
である。湯、散、急方、これらは咽を下つて散じ易く反應の速なる方
である。急方に四ある。急病、急攻の急方、これは中風、價格の病に用

春を治するに急なるか。い。急なればその標^{めづ}を治するのである。表^{うへ}、裏^{うら}汗^{あせ}である。

好古曰く、主を治するに緩なるか。い。緩なればその本^{ほん}を治するのである。

陽中の陰である。味厚きものに氣厚きものを發汗する。氣厚きものは陽である。氣薄きものは陰である。味厚きものは陰である。味薄きものは陽である。故に味厚に味厚

本草綱目第一卷上終

と意味をいふのではあるまいか。
あるからだから、それは偶は乃ち二方相合したものと、複は乃ち數方相合したものと
る。王太僕は偶を以て複方となして居るが、今現に七方の中に偶もあれば複も

意味あらうか。

復方 岐伯曰く、奇方を用ゐて病の去らぬときは偶方を試みる。これを重方といふ。

よのである。

好古曰く、奇方で病の去らぬときは同時に奇方を用ゐる。これを再び重であらぬと

さ。は同時に奇方を用ゐる。これを再び重であらぬと

る。所謂たび補つて一たび泄し、數度泄して一たび補ふの意味である。又、

傷寒の患者に風の脈があつた、傷寒の患者に風の脈を認めたり、復雜にして

病と脈證が一致せぬやうの場合には、この複方を用ゐて病氣の實體を治する

を宜しとするのである。

從正曰く、複方に三ある。異なる二方、三方、及び數方を合せて同一患者に行

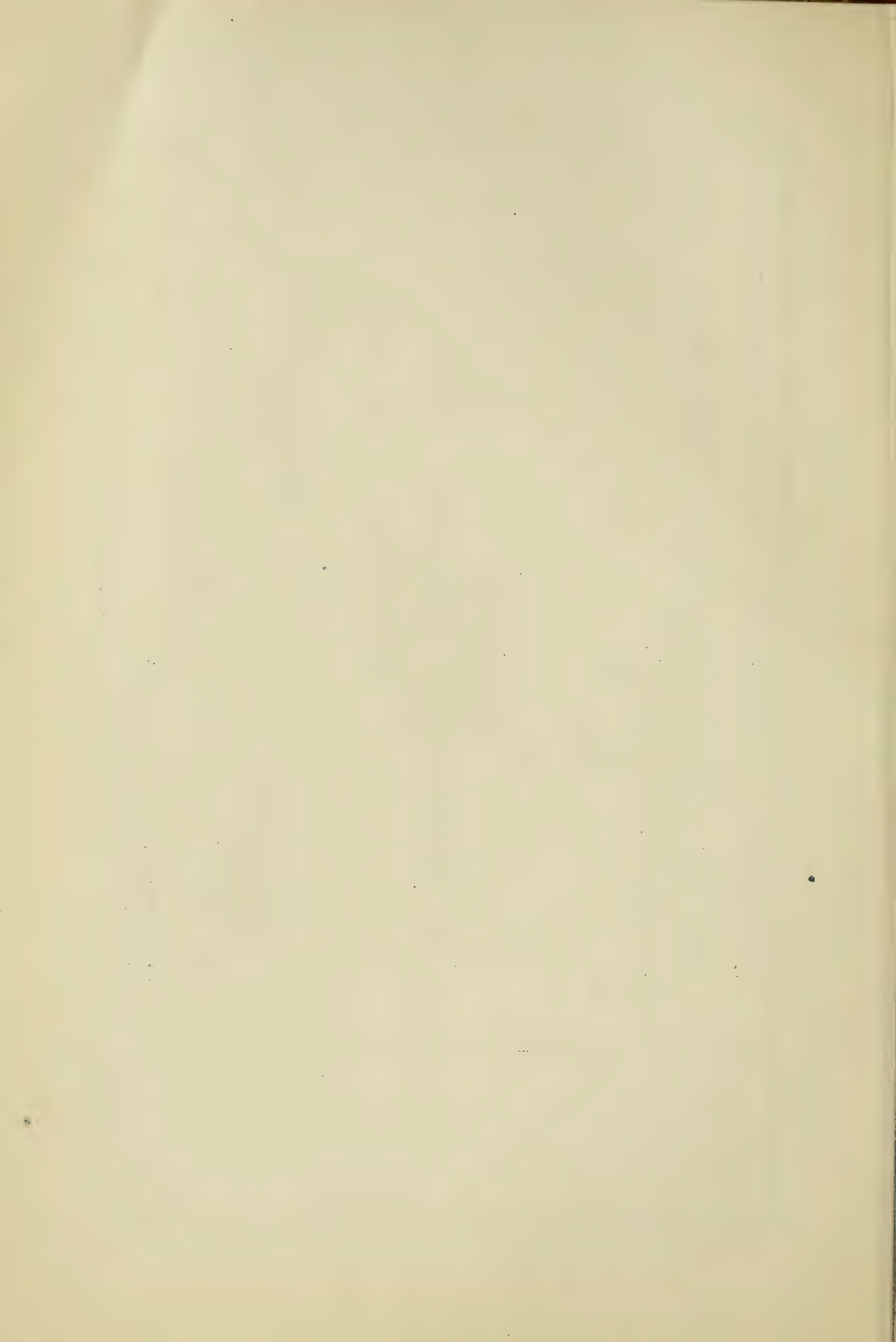
ふの複方、これは桂枝二、越婢一の湯や五積散などの類をいふのである。ある

病に對し基本的な方に外に別種の薬を加へるの複方、これは調經の胃承氣に連翹、

薄荷、黄芩を加へて凉膈散を作るとある。各藥の分兩を均

齊にするの複方、これは胃風湯の如く各藥を等分にするもの類をいふのである。

本草綱目序例卷一下



に因るものだから、必ず薑、橘、藿香、生薑の類の破氣薬を以てて薑を瀉する
 じなくなり、或は嘔し、或は嘔する。それが所謂である。三陰は脾の關係
 が充實して居てこれを受け入れぬ、爲に胸中に逆み、天分が窒塞して通
 氣が六經から外部に居てこれを受け入れぬ、爲に胸中に逆み、天分が窒塞して通
 氣が六經から外部に居てこれを受け入れぬ、爲に胸中に逆み、天分が窒塞して通

宣劑。之。曰く、宣は薑を去るものである、生薑、橘皮の屬をいふ。

る過失は生ぜぬであらう。

し凡そ薬を用ゐるものは十分に之を研究し、精確なる智識を以て臨むならば遺憾な
 は薬の大體であるが、本經にも論ぜられなくて、後人にも未だ述べられてない。い
 徐之。曰く、宣、薬に宣、通、補、洩、輕、重、澀、滑、燥、濕の十種がある。

十劑

序例 上

(三) 陰、陽、三、火、濕、和、六、經、六、氣、不、
 陰、陽、三、火、濕、和、六、經、六、氣、不、
 陰、陽、三、火、濕、和、六、經、六、氣、不、
 陰、陽、三、火、濕、和、六、經、六、氣、不、

シ
チ
五
起
肺
チ
ハ
氣
チ
云
云
。

ル
ト
火
心
ノ
肝
シ
脾
ノ
類
土
ノ
云
云
。
當
母
ノ
火
ノ
心
由
リ
。

時珍曰、閉を去るとあるは實を去るとするが如きである。經に實するも

を破り、氣を洩す、下す作用のいふのである。

瀉劑であつて、分岐を促し、乳の出を催し、積を磨し、氷を逐ひ、經血を瀉するものである。隨つて緩するものもある。大黃、牽牛、甘遂、巴豆、屬は利通する。實するものは之を瀉する。多くの痛は實するが爲であつて、痛は從正曰く、實するものは之を瀉する。多くの痛は實するが爲であつて、痛は

よくする。凡そこの二二藥と同じ效力のものは皆洩劑である。

洩す。一は氣閉を洩して小便の通じをよくし、一は血閉を洩して大便秘通じを

し又大腸を泄す。大黃は走つて守らざるもので、能く血閉、腸閉、胃滯、積物を

呆く、大腸を泄す。大黃は走つて守らざるもので、能く血閉、腸閉、胃滯、積物を

洩劑之。曰く、大黃は閉を去ることである、葶藶、大黃の屬をいふ。

が補劑といふのではな。

を補ひ、當歸が肝血を補ふ如き類はいつれも補劑である。特に人參、羊肉のみ
ひ、阿膠が肺血を補ひ、杜仲が腎氣を補ひ、熟地黃が腎血を補ひ、芍藥が肝氣
地黃が心血を補ひ、人參が脾氣を補ひ、白芍藥が脾血を補ひ、黃芪が肺氣を補

塌。(三三) 驚癇小兒ノ搐

だけのものではな。い。故に諸風、掉眩及び驚癇、痰喘、病、吐逆止むべきのである。大抵重劑は浮火を壓して痰涎を堅けるもの、獨り法を治するやうな不安を感ずるものがある、これには礞石、沈香の類でその腎を安定させる氣が下り、精神、意志が失ひ、驚はれたやうに、他人に捕縛されずもするぬものがあつて、これには硃砂、紫石英の類でその心を鎮め、恐怖心が起るやうな付かず些細なことに驚き易く、健忘になり、心が亂して少しも落付かなくなつて、これにはいづれも鐵粉、雄黃の類でその肝を平調ならしめる。精神を喪つたやうになるものと、怒る氣逆し肝氣が激烈となつて狂怒する時。曰く、重劑に凡そ四味、驚くとは氣亂れて魂氣が飛揚し精神の落付く原因。これと減ずとある意味で、その(三三)漸を貴ぶのである。極端に衰弱して直接治療に入へぬものもあるから、久病咳嗽で涎が上流いで、體力が寒石の類は皆體の重いものである、これには硃砂、水銀、沈香、黄丹、やうな重と驚悸して氣が上るものがある。法とは鎮め絶する意味である。從。曰く、

作用ヲ云フ。
(三三) 緩慢ナル

善下事ニ備フ。事ニ親ツリ。
ヲ世ノ法ニ通ル。精ヲ通
定人ヲ昌ノ間ヲ通ル。精
載ノ正ノ字。字。字。字。字。

澀する。凡そ酸味は澀に同じく、澀即ち收斂の意味である。しかし、この種の
意、枯、木、賊、汗、の止むに麻黄根、喘嗽、上奔、烏梅、は子以て
從、正、曰、寢、汗、の止むに麻黄根、喘嗽、上奔、烏梅、は子以て
を遣する類で、これには必ず澀剤を用いて收斂するのである。
完。素曰く、滑するときは氣が脱する。膨がいて排泄が停らぬものや、尿
之。オ。澀は脱する。脱するものは氣が去るものであつて、牡蠣、龍骨の屬をいふのである。
燥でなないである。
のは膠つて居る。濕が去るから土は燥くやうなもので、この薬の性そのもの
辛は能く潤し能く氣を走らせて化液するのである。これを燥く物のように考へる
である。半夏、南星はづいれも辛く凝る滑にして濕氣を洩して大便を通ずる。蓋し
屬、瘡毒を引いて小便から排出するに五葉藤、薏苡根の屬、いづれも皆滑劑
に黄葵子、王不留行の屬、痰を引いて小便から排出するに黄葵子、薏苡根の屬、いづれも皆滑劑
は車前、楡皮の屬、精氣の澀るものに黄葵子、薏苡根の屬、いづれも皆滑劑
者を著しいものである。大便の澀るものには波稜、牽牛の屬、小便の澀るものには

(二五) 精氣液ノ通

する種類の薬でありありも濕熱の有形邪を去るものである。故に前者を滯といひ、後する薬物でありありも濕熱の無形邪を去るのであるが、葵子、榆皮は甘味にして滑する。滯を去ることに於て似通つて居るが、事實は同一でない。木通、猪苓は淡味、漚瀉は滯その留著の物を引去らねばならぬ。此の點では木通、猪苓が通じを付けて小便の濁滯、痰涎、胎胞、癰腫の類がそれぞれである。これ等は皆薬を用ゐる時、珍著と有形の邪が經絡、臟腑の間に留著するところをいふので、大約は束である。先づ滑劑その燥を潤養してから治療を加へるのである。子、滑石の類がよい。兩便が通ぜず兩陰の俱に閉つるものを三焦約と名ける。從正、大便秘結するに麻仁、郁李の類がよく、小便が淋瀝するに葵子、能く養ふて潤するものである。これには必ず滑劑でこれを利する。滑完素、曰く、瀝するところには氣が著する。これには必ず滑劑でこれを利する。滑劑之、牙、曰く、滑は著を去るものであつて、冬、葵子、榆皮の屬をいふのである。それを膠とねばならぬ。

もの及び反胃 (三三) 痰涎が害をなすのである。いづれも重劑でこ

切ナヲサレチル云
(三)恍惚ノ知覺
ヲ。

機仕懸。
圖(二)カハシ
ノ。ホコ
ミ。

圖(一)ハ目ノ
ス。氣味ノ
ミ。

突スルヲ日。

らしめる。所謂その氣餘れば足らざるを補ふものではないか。鯉が水を治し、
剋して相制するものではないか。熊の肉は衰弱者を元氣付け、兎の肝は視力を明
その乳で渴が止む。豕は水畜である、その心で恍惚の病が鎮る。所謂その氣相
は水穀で水を治す。所謂氣相同じき相求むるものではないか。牛は土畜である、
する。所謂その勝つ所に因つて制を爲すものではないか。麻は木穀で風を治し、
で、これを用うれば酒に勝つ。獨活は風に搖るものがあるまいか。浮萍は水に沈むもの
である。所謂その用因つて使を爲すものであるまいか。枳殻は下けるといふは、枳殻が發しては引留め
のだからであり、枳の殼が咽つ、枳の殼が發しては引留めるといふは、機が發しては引留め
で動物で、これを藥として用うれば漏る。所謂その性に因つて用を爲すも
穿つ動物で、穴は血を飲め、これを藥として用うれば血を治す。鼠は善く
穴を退ける。虫は蛇に故に蛇の性は上質するもので藥導き、鯉の性は外脱するもので
ある。故に蛇の性は上質するもので藥導き、鯉の性は外脱するもので
ば意を以て使ふものあり、質同らして性異なるものあり、名異にして實同じきものも
を、氣餘有つて足りざるを補ふものあり、氣相感するものも

その勝つ所に因つて制を爲すものもあり、氣同うして相求むるものもあり、氣相
用範圍は無^ん限^んでなければならぬ等だ。さればその性に因つて用を爲す者もあり、
適當に應用^んしその作用^んを發揮せしめて藥品藥劑を用ゐるならば、その效力とその應
答^ん素質があるのだから、その最適^んの特長を見定めてこれを用ゐ、これを變に應じて
道^ん達人^んが規矩^んを出して方圓^んをへられたいのである。夫れ物には各働^んきを爲すべ
は劑^んでなければいのである。この故に太古^んの先覺^んが、細墨^んを設けて曲^ん直^んを正し、
證^んに對應せぬものは、それは方ではない。劑^んにして病患^んを除き去^んぬものは、それ
て方の變を盡すに足らず、劑^んに方にならず、劑^んの用を盡すに足ぬ。方にして病^ん
品^ん味を調節せねばならぬ。故に方に七あり、劑^んに十あるわけ、方七ならざれば以
緩^んし、苦^んの堅^んし、鹹^んの淡^ん味^んの滲^ん洩^んは陰^んであり、鹹^んの味^んの堅^んし、苦^んの堅^んし、
ある。鹹^んの味^んの滲^ん洩^んは陰^んであり、鹹^んの味^んの滲^ん洩^んは陰^んであり、鹹^んの味^んの滲^ん洩^んは陰^んであり、
る。合^ん場^んは之を補ふに味を以てする。辛^ん、甘^んの發散^んは陽^んである。酸^ん、苦^んの滲^ん洩^んは陰^んな
之を溫^んむるに氣を以てして、天に産するものは精を養ふのであるが、その精の不足は
るのである。故に地に産するものは形を養ふのであるが、その形の不足なる場合は

て登陟するも同様である。迂かと動けば大怪我をする。それで病の治療を試みようと然る後に以ては天の疾病を語らざる可きである。然らずれば目無くして夜遊し、足無しく自然なる上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知り、三者俱に明にして欲しめるならんばそれにて自ら必然なる故に各物の本質に触れて十分に分けてそれを發揮し發顯せしめ黄色にして脾を主する。金に法り白色にして肺を主し、磁石は水に法り黑色をして腎を主し、黄石膏は土に法り青色に法り木に法り青くして肝を主し、丹砂は火に法り赤くして心を主し、雲母は空に法り白くして肺を主し、毛物類は陽に生じて陰に屬し、鱗甲類は陰に生じて陽に屬し、象は存するものはすべからず是の陰陽から離れたいものなく、その形と色とは自らは法うたがへられて關係に屬するものではある。又天地間に形を與へられける藥に生じ、養蒙は覆益を生ずる。これは名が異つて實のものである。

(五) 麻は温にし油には寒にする。これ性質として異なるものだ。(四) 麝香(麝)は無味無臭を取成るものであるが、蜜は溫にする作用があり、蜂は寒にする作用がある。油は麻から取

か水を通利するも所謂その氣相感するは意を以て使ふものでないか。蜜は蜂蜜から

下三卷と爲し、三百件の名を擧げた。具に後に陳へる。
 いた。某短見を量らず炮、煮、炙の製法を直録し、藥を列し方を制し、上中、
 不可能ではないのである。實驗に知りたりといふば海集を一覽して貰ひ
 制に就て實驗を経たものである。つて、炮、煮、炙の實驗の年月を記すことが
 能く書列ねた。これは仙人の要術に溺れたやうな妄誕なものではなく、一藥の調
 のである。女微を窮め著すといふことは大なる難事であるが、略藥師たるもの功
 某赤く聖明の世に遇ひ、兎も角も醫學の研究に従事し、聖法の推究を進めた
 延胡索か散にして酒に服せばよろに癒える（かくの如き多くの現象はいづれも藥の力である。

ことであり、泄とは小便を利することである。

れである。氣の薄いは滲する、甘淡、平涼がそれである。滲とは小汗の泄する、鹹苦、酸寒がそれである。氣の厚いものは熱する、辛甘、溫熱がそれである。果。曰く、味の薄いは通ずる、酸苦、鹹平がそれである。味が厚いものは

る。

どれの氣があり、氣と味にも各厚、薄があるから性用が相等しくないのであれば陰に入るものは陰の體を離れないのである。凡そ氣を同する物にも必ずそれの體を離れない。麻黄は味が薄い、陰中にある。ゆゑに小便を通利せしめ、手の陽氣が薄い、陰中にある。手の太陰に入るものは陽氣が厚いから陽の味は黄、大陰の味は厚いから陰である。疾沓は氣が濁なるものが六腑に歸し、濁の清なるものが五臟に走るのである。附子、元。素。曰く、清なるものが清に發し、濁の清なるものが四肢に實ち、濁

は堅うする。その作用の有効な點を取つてその力を發揮させ、その氣を調へて生理

氣味陰陽

好。古曰く、本草では味に五あり氣に四あり然も一味の味の中に四氣があつて、
 地に本くもだから下に親む。地は現れ、天に本くもだから上に親む。氣味厚きものは重濁なものとて現れ、
 長化、收、藏と働き、下に應ずる作用を有つ。氣味薄きものは輕清なものとて現れ、
 は地の陰であつて陰地にも陰陽があるのである。金、水、火、土の各の力が生、
 天に仕へる作用を有つ。味は地に象るものでも、辛、甘、淡は地の陽、酸、苦、鹹
 であつて天に陰陽があるのである。風、寒、暑、濕、燥、火の三陰三陽は上天に受
 けあつて氣の異なるものもある。氣は天に象るもので、溫熱は天の陽、涼寒は天の陰
 味と兼ねる性と性具へて居る。或は氣が同一でも味の殊なるものあり、味は同
 る。升降、浮沈が相互に關係あり、厚薄、陰陽が同一でない。一箇の藥物の中に氣と
 李杲曰く、夫れ藥には溫、涼、寒、熱の氣と辛、甘、淡、酸、苦、鹹の味とがあ
 ふことは蓋し六ヶ敷いといはねばならぬ。
 ずまづこの理を詳に識得したのである。然らずして能く人の病を治するといひ
 せばそれが爲に更に病を起すものである。古の生を養ひ病を治する者は、必

は用ゐてはならぬ。これを用ゐても甚だ度を過すこととはよくない。度を過す
 ずへく、緩ならしむる要を認める場合には甘を用ゐ、その要を認めぬ場合に
 ふきものである。之を堅にして而る後に要にすへく、之を收めては以て肉を養
 撃せぬ、故に辛には以て筋肉を養ふへく、緩なれば強く、酸は以て骨筋を養ふへく、散すれば
 脈骨を養ふへく、故に苦には以て氣を脈を養ふへく、要なれば和する、故に鹹は以て
 れば壯である。故に苦には以て氣を脈を養ふへく、味は緩に用ゐきである。氣の堅
 り凝るところ和せざるものはない、故にその味は緩に用ゐきである。氣の集
 故にその味は散に用ゐく、土は氣に困つて成立したものであつて、氣の集
 は堅に用ゐく、風氣は散なるが故にその味は用ゐく、熱は要なるが故にその味
 理だ。寒氣は堅なるが故にその味は用ゐく、寒氣は要なるが故にその味
 ば、そこに耦が成立し、耦を基本として物が生ずれば、その奇が成立する道
 は氣なり、之を成すものも味なりといふのである。奇を基本として物が生ずるの
 五氣がそれぞれ形質化されたときと五味となつて現れる。故に物を生ずるもの
 宗。龍。曰く、天と地との分が現れてあらめらるる物を發生したの五氣なのである。

ら靈妙であり、形は五味を受けるから成立するのである。若し氣を食として
は味を食とする。味が形を養ふから力が生ずるのである。精は五氣に順ずる形
遜思。曰く、精は氣を食とする。氣が精を養ふから色が榮えるのである。

藏つて五氣を養ふのである。

氣が肺に藏つて色を明にし、聲を彰にし、氣は水の母であるから味が腸、胃
は肺に濇り、腐氣は腎に濇る。心は色を榮えしめ、肺は音を主するものがある
王。曰く、五氣の腸は氣に濇り、焦氣は心に濇り、香氣は脾に濇り、腥氣
これに温にする氣を以てし、精の不足のものは之を補ふに味を以てする。

は氣が和して津液がから入つて腸胃に藏り。それぞれの臟に藏つて五氣を養ひ、それ
する。五氣は鼻から入つて心、肺に藏り、上に五色を明に見せしめ、音聲を彰
六節臟象論に曰く、天は人を養ふに五氣を以てして、地は人を養ふに五味を以てす
きものではない。

四時、六位同じからず、六氣各異なるのであるから輕しく用へ

(一) 冬、六時、春、夏、秋、北、上、五、運、木、火、土、金、水、六氣、暑、火、風、寒、燥、濕、金、水、土、金、木、火、土、金、水、六氣、暑、火、風、寒、燥、濕、

ひ、量りやうの雨うとときは寒かんに従ふ。かやうにその變化へんかは一ならぬものである。況や
 て升あがり、夜よ服ふくば寒かんの方かたの力ちからに従つて降ふりるものもある。晴はれ天てんのときは熱ねつに従
 可たなりと思おもはば誤あやりである。或あるは寒かん、各おのづか半はんして、書き服ふくめば熱ねつの方かたの力ちからに従つ
 く熱ねつなるものか少すくい場合ばいは没な却たされ現あらわれぬこともある。だから一様いつようにして多
 が多おほく寒かんなるものか少すくい場合ばいは没な却たされ現あらわれぬこともあり、寒かんなるものが多
 て寒かんとなることあり、或あるは寒かんと熱ねつとが相あひ半はんして温ぬるくなることあり、熱ねつなるもの
 と氣き味みの異ちがひるものもある。或あるは温ぬるくして熱ねつとなることあり、或あるは涼すずくして
 り、一物ひともの二氣ふたきの異ちがひもある。或あるは生なまと熱ねつとで氣き味みの異ちがひるものあり、或あるは根ねと苗こ
 のもある。一物ひともので一味ひとみのものあり、一物ひともの三味さんみのものあり、一物ひとものの氣きものあ
 ふあり、先まづづ氣きを使つかふてから味みを使つかふあり、先まづづ味みを使つかふてから氣きを使つかふも
 て、陽やうなれば浮うき陰いんなれば沈しづむ。氣きを使つかふあり、味みを使つかふあり、酸さん、苦く、鹹かんは地ちの陰いん
 升あがり陰いんなれば降ふりる。味みは地ちであり、辛しん、甘かん、淡たんは陽やう、酸さん、苦く、鹹かんは地ちの陰いん
 のである。夫それは天てんの氣きは天てんであり、温ぬるは附つは熱ねつ、半はん夏げは温ぬる、薄はく荷かは涼すずであるやうな
 同じ辛しん味みだけども石せき膏こうは寒かん、桂けいと附つは熱ねつ、半はん夏げは温ぬる、薄はく荷かは涼すずであるやうな

春は涼を食ひ、夏は寒を食ふて陽を養ひ、秋は溫を食ひ、冬は熱を食ふて陰氣が恒久に存するのである。

聖人は春は夏に陽を養ひ、秋と冬は陰を養ふ。それでその根に従ふから二く流れ、理がよ密になれば、骨がそれで清かに長く天命が保てるのである。又曰く根本は五味にあり、陰の宮の五の障も五味に原する。骨正しく筋柔かに血氣が臓の病に對して、適當なところに随つて用ゝるものである。又曰く、陰の生ずるば精を補ひ氣を益す。この五者は各利するところの特長があるのだから、四時を助け、五音は養分を増し、五味は養分を補充する。氣、味を適合させて服すればある。毒藥は健康を傷み邪惡を攻め治し、五穀は常の榮養となり、五果は榮養の力を生ずる、辛は散で、酸は收であり、甘は緩であり、苦は堅であり、鹹は要で岐伯曰く、木は酸を生じ、火は苦を生じ、土は甘を生じ、金は辛を生じ、水は鹹を

五味宜忌

て命を防護せり、氣味の溫補によつて精と形とを保持するのである。
このゆゑに聖人は先づ食禁の法を用ゐて純粹な生を保持し、後に藥物を調劑し
てかゝる順でなければ精を傷り、味を食とすることか調和を缺け形を損ずる。

ことである。このゆゑに藥の五味を具へず四氣を備へない一味、一氣に偏した
 勝^{しょう}て必ず偏^{へん}絶^{てつ}することがある。臟に偏^{へん}絶^{てつ}することあれば必ず突然^{とつぜん}急死する
 あつて、苦以外^{いげん}の四味もこれと同様である。氣が増して已まなければ臟氣^{ちやうき}が偏^{へん}
 に久しく苦^く、黄連^{わうれん}、苦參^{くさん}を服すれば反つて熱が出る。それは苦化^{くわ}の勢^{せい}に從ふからで
 を久しきに亘つて攝^{しやく}取^{しゆ}れば、氣に從つて化^わし、動^{どう}の勢^{せい}にある。故
 味の増すに從つてその氣を益^{えき}することになる。各その本臟^{ほんちやう}の氣に從ふ味
 となり、腎^{じん}に人つては寒^{かん}となり、脾^ひに人つては至^し陰^{いん}となり、四氣を兼ねていつ
 王^{わう}氷^{へい}。曰^{いは}く、肝^{かん}に人つては温^{ぬる}となり、心^{しん}に入つては熱^{ねつ}となり、肺^{はい}に入つては清^{せい}
 とが更に久しきに亘れば、死^しの原因^{げんいん}となるのである。
 入る。それが久しきに亘れば氣を増す。これは物の動^{どう}の自然であつて、氣を増す
 に入り、苦^くは先^{せん}心^{しん}に入り、甘^{かん}は先^{せん}脾^ひに入り、辛^{しん}は先^{せん}肺^{はい}に入り、鹹^{かん}は先^{せん}腎^{じん}に
 岐伯^{きはく}曰^{いは}く、五味^{ごみ}は胃^いに入つて各その喜^きび相^{さう}あはするところ^{ところ}に歸^{かへ}する。酸^{さん}は先^{せん}肝^{かん}

五味偏勝

於(五) 曰肉ノ脈ヲ硬ク化ノ肉。

(六) 五宮ハ五臟。

で即ち臟氣の偏勝である。

宮の傷るは五味に在りである。五過は各本臟の味がその勝つ所を伐つけ
時珍曰く、五走、五傷は各本臟の味が自ら傷るであつて、即ち陰の五

が過ぐれば、骨が氣勞し、心氣が短く、脈が抑へ、澀滞して色が變る。
味が辛に過ぐれば、筋脈が沮し、精神が盡き、筋が縮んで爪が枯れる。味
が甘に過ぐれば、心氣が喘滿して色黒く、腎氣が衡ならず、骨が痛んで髪が脱
する。味が苦に過ぐれば、脾氣が濡はらず、胃氣が厚くなり、皮が皸れて毛が抜ける。
五過 味が酸に過ぐれば、肝氣が津して、脾氣が絶し、肉が皸み、傷み、唇が揭

勝つ。

り、酸は甘に勝つ。辛は皮を傷り、苦は辛に勝つ。鹹は血を傷り、甘は鹹に
五傷 酸は筋を傷り、辛は酸に勝つ。苦は氣を傷り、鹹は苦に勝つ。甘は肉を傷

血病に苦を多く食ふてはならぬとなつて居る。

鍼論には、鹹は骨に走る。骨病は鹹を多く食ふてはならぬ。苦は血に走る。
が合ふと、凝り胃が汁がそれ注ぐから咽が焦けて舌の本が乾くのである。九

陽應大論素問、陰陽。

す先つ満なり大小便の不通なりを治ることか應急の所置である。それは所謂満と大小便の利通せぬ病の場合には、その前後や標たる本たるとに拘らず、必なかから治して後に重きもを治する。それで邪氣は伏するものである。ただ中のだから、たとひ先つ輕病を生じて後に重病を生じても、やはり先つその輕きも標を治する。然らざれば邪氣がますます甚しく、その病はますます深く重くなる。疾と現れる症候がいへば、先づ主たる病を感したころのものが本で、第二次、第三次、病に就いていへば、陰陽、臟腑、氣血、經絡にまたそれぞれ標と本とがあるのである。五臟は陰に屬して本である。臟腑にある臟を本とし、外にある十二經絡を標とあり、部が標であり内部が本である。陽を標としし陰を本とするので、六腑は陽に屬して標で夫れ治るには標と本とに注意せねばならぬ。身體に就いていへば、外

標本陰陽

逆へば死である。たとへ死なぬまでも危險に陥れ治療を困難にする。○王好古曰
 諸藥を佐使するものもある。藥を用うる場合、この法則に循へば生であるが、これに
 身體では肺に當るの當るである。淡味の藥は滲しては升となり泄しては降となり、
 は、秋、冬の降、沈、沈を助けるもの、即ち春、夏の生、長を瀉する藥をいふので、人
 に當るのである。所謂之を補ふに酸、苦、鹹、寒及び氣味の厚きを以てすと人
 升、浮を助けるもの、即ち秋、冬の收、瀉する藥をいふので、人の身體では肝、心
 である。所謂之を補ふに辛、甘、溫、熱及び氣味の薄きを以てすと人、春、夏の
 厚きものは浮きて長じ、味厚きものは沈んで氣味平なるものは化して成する
 時に配するやうになつて居る。春は升り、夏は生じ、秋は收め、冬は藏し、土は中
 李杲曰く、藥には升、降、浮、沈、化、生、長、收、藏、成があつて、それが天の四

升降浮沈

君となる。經に所謂標にして本たるものは先づその標を治して後にその本を治すと
 である。この場合藥を用ゐるに、腎に入る藥が導く作用、これはその本を治する
 後に肝經に對して肝木を補ふて肝木を刺して肝木を治するのである。然る
 穴を刺載して肝木を補ふて肝木を治する。又、肝が腎水を受け虚邪となつた如き場合は、先づ肝經に對して井
 とである。又、肝が腎水を受け虚邪となつた如き場合は、先づ肝經に對して井
 經に所謂本にして標たるものは先づその本を治して後にその標を治すといふ
 藥が效果を導く作用をなすものであり、心を瀉する藥が、即ち主たるものであ
 る。瀉する。これは後にその標を治するのである。この場合藥を用ゐるには、肝に人
 要だ。これはその本を治するのである。然しして心經に對して心經に瀉する心火を
 れば、その場には先づ肝經に對して肝木を補ふ。たへば肝が心火を受けたことが實邪となつたものであ
 の場には、その母を補ふ。たへば肝が心火を受けたことが實邪となつたものであ
 實邪であり、後に起つて來るものは虚邪であつて、實の場合にはその子を生じた病は
 緩なればその本を治し、急なればその標を治するものである。又、初めから生じた病は

リツ陰谷ト云フ。
 ヲ膝關ノ曲ト云フ。
 (四)ノ合アリ。
 ノ穴又ハ敦ニ足心
 (三)ノ穴井ノ足心
 泉

(二) 榮穴、動脈部。

質にもあり、人の體や境にもあるのである。
 のや、生のものは升り熟したものは降るものがあつて、この升降は物そのものの性
 化の權に達するに非ざれば能はぬことである。一物のうちにも根は升り梢は降る性
 に酒を以てすれば反對に上頭に至るもの直に下焦にまである。天地の奥を窺ひ造
 導くに鹹寒を以てすれば反對に沈んで洗ひ、而して升るものはこれぞ
 熱は沈むてがな。その性の然らむところである。

六時
(三) 脾一十
臟入五臟
(二) 劑入四時ノ劑。

ものである。ただ中滿の者は甘だけには甘を用ゐることを禁ずる。
純熱の藥や寒、熱相雜のものを用ゐるには、いつれも甘草を用ゐてそれを調和すへ。
す。(三) 十臟は皆決を少陽に取つて發生の始と爲るものだからであつて、凡そ純寒、
古曰く、四時すへ、時を以て、脾を以て、胃を劑となし、柴胡を(二)時劑とな
は權宜に依るへ、もののであるから、一面の理にのみ拘泥すへ、泥すへ、ものではな
き明徹な智力でこれを詳にし、至妙なる微機に應じて手を下さねばならぬ。變通
も四時が、あり、春に秋の病を起すこととあり、夏に冬の病を起すこととあり、神の如
伏し冬月が、快を以て推せば判ることとあり、冬に夏に背くものも四時が、あり、日
ふて居るが、何ぞ知らん、それは素問の逆順の理に背くものであることとあり、夏月陰を
抑へ、秋は苦溫を用ゐて金を泄し、冬は辛熱を用ゐて水を通し、それれを時藥と思

四時藥例

財を困るゝト云ふ

[illegible]

に甘、苦を以てし、鹹を以て之を瀉する。○熱が反つて之に勝つとき、は、治するに
太陽の司天辰の年——寒の勝つ所である。平にするに辛を以てし、佐する

て之に勝つときは、治するに辛を以てし、佐するに苦、甘を以てする。

を以てするが、補ふには必ず酸を以てするが、瀉するには必ず辛を以てするが、○熱が反

るに酸、辛を以てし、苦を以て之を下す。燥を制する法は苦温を以てする。下すには必ず苦

陽明の司天卯酉の年——燥の勝つ所である。平にするに苦温を以てし、佐

を以てする。

ばよろしい。○寒が反つて之に勝つときは、治するに甘熱を以てし、佐するに苦、辛

發汗してまた熱が出、また發汗してまた熱の出るのは陽が虚がたのたのききから、酸を以て之を收める。已に

れは邪氣が盡きてあるが、發汗して猶ほ熱のあるのは邪が盡きたのたのききから、酸を以て之を收める。已に

くればそれだけ根を除ける。熱の現る處と寒を以て之を發汗してそれだけ涼になれれば助

熱の氣の已に退く時に發動するものは心虚であつて、散が收めらぬから、酸を以て之を收め、寒を無て助

るに苦、甘を以てし、酸を以て之を收め、苦を以て之を發し、酸を以て之を復する。

少陽の司天寅申の年——火の勝つ所である。平にするに酸冷を以てし、佐

○熱が反つて之に勝つときは、治するに苦寒を以てし、佐するに苦、酸を以てする。

五運六淫用藥式

正^スト^レ之^レヲ^ト下^レ苦^ル以^テ至^ス間^ニ素^ヲ以^テ苦^ニ溫^ニ至^ス以^テ大^ニ論^ス治^ス

以て寒を治するのには勝を折くのである（○熱が反つて之に勝つときは、治するに
辛^を以てして、鹹^を以て之を瀉し、辛^をを以て之を潤し、苦^をを以て之を堅^をする。^{（熱を）}
太^陽の在^在泉^{（年）}——寒^が内^に淫^{する}。治^{する}に甘^をを以てして、佐^{する}に苦^をを以てして、和^を
以て利^と爲^すのである。
は、治^{する}に辛^をを以てして、佐^{する}に苦^をを以てして、甘^をを以て之を平^にし、酸^をを以て之を勝^にとさ
之^を下^す。「○」温^は涼^をを利^{する}ものだから苦を以て之を下すのである（○熱が反つて之に勝つとさ
陽^明の在^在泉^{（年）}——燥^が内^に淫^{する}。治^{する}に甘^をを以てして、辛^をを以てして、鹹^をを以て
て、し、鹹^をを以て之を平^ににする。
す（○寒^が反つて之に勝つときは、治するに甘^をを以てして、佐^{する}に辛^をを以てして、苦^をを以
性の柔^をで之を制^し、酸^をを以て之を散^をを収^め、苦^をを以て之を發^{する}。○大^が氣^が大^に心^に行^はくとき佐
辛^をを以てして、少^陽の在^在泉^{（年）}——火^が内^に淫^{する}。治^{する}に鹹^をを以てして、佐^{する}に苦^をを以てして、
を以てして、鹹^をを以てして、少^陽の在^在泉^{（年）}——火^が内^に淫^{する}。治^{する}に鹹^をを以てして、佐^{する}に苦^をを以てして、
作^{する}に苦^をを以てして、治^{する}に苦^をを以てして、は、治^{する}に苦^をを以てして、

淡を以てして、苦を以て之を燥し、淡を以て之を泄す。濕と燥とは反するものだから、苦熱を以て酸、太陰の在泉（辰戌の年）——濕が内に淫する。治するに苦熱を以てして、佐するに酸、治するに甘熱を以てして、佐するに苦、辛を以てして、勝つとば、は已ましめられなければならない。間歇的に來るものも酸を以て之を收め、甚しきものには再び、方、微なるものには一方を用ゐて必ずしも、それはまた苦を以て之を發し、酸を以て之を收め、苦を以て之を發する。熱が表に甚しければ苦を以て之を發し、甚き熱を以て之を發する。酸を以てして、酸を以て之を收め、苦を以て之を發する。熱性は寒を以て之を制して、寒を以て之を制して、故に酸を以て甘、少陰の在泉（卯酉の年）——熱が内に淫する。治するに鹹寒を以てして、佐するに苦、甘を以てして、辛を以てして、辛を以て之を平にする。抑苦をむむは、辛を以て之を散する（○清が反つて之に勝つとば、は、治するに酸溫を以てして、から、辛を以て之を勝つとば、は、治するに酸溫を以てして、か、辛を以て之を利とす所に隨ふのである。木が急を苦を以て之を緩うし、木が以てして、甘を以て之を散する。風は溫を喜んて清を惡むものも、以て之を以てして、辛を以て之を治する。風が内に淫する。治するに辛涼を以てして、佐するに苦を以てして、辛を以てする。

ぜられ、あるが、長文になるから終には載せない。
 る。これ等の六氣勝復、主客證治の病機に就ては素問の至要大論に詳しく論ずる。
 は地が泥となり、寒が勝つときは地が裂け、火が勝つときは地が涸れ、水が勝つときは
 さは地が乾き、暑が勝つときは地が熱し、風が勝つときは地が動い、燥が勝つときは
 といふ。六氣が勝つといふことは何を以てその微證とするかといへば、燥甚しきと
 といふのである。その時に當つて反つて已に勝つのに氣を得るこがあるを『勝つて
 』内に淫するといふのであり、それは外に内が淫するこだとから之を治すとい
 いふのである。在泉は下年を主るので、それは外に内が淫するこだとから之を平にす
 』これに勝つ所』といふのであり、それが上は下が淫するこだとから之の平にす
 』李時珍曰く、司天は上平年を主るので、それは下が上は氣が之主のだから、六淫が
 鹹冷を以てして、佐するに甘、辛を以てして、苦を以てして之を平にする。

けるのである。涼、温、寒、熱は四氣の本來の性質であつて、これが五臟の補瀉と
 は補し或は瀉するの、五臟と四時とに對し互に相應するところ因つて效果を舉
 げてあり、淡は滲する。これは五味の本來の性質として一定不變のもの、これが或
 李時珍曰、甘は緩であり、酸は收であり、苦は燥であり、辛は散であり、鹹は
 入る。苦は能く濕する。酸は能く緩く收める。散は能く急を潤し、中、調
 を致し、氣を通ずる。酸は能く緩く收める。散は能く急を潤し、中、調
 入る。甘は緩く入る。辛は散く入る。酸は肝に、苦は心に、鹹は收を主り、
 入る。甘は脾に、辛は肺に、酸は胃に、苦は胆に、鹹は腎に、入る。辛は散を主り、
 あつて、その性に因つてその目的に調和するに過ぎない。酸は肝に、苦は心に、
 張元素曰く、凡そ藥の五味は入る所の五臟のそれぞれに隨つて補瀉を爲すもので
 ぞ堅くす。知母(母)苦を以て之を補ふ。黄蘗(蘗)酸を以て之を補ふ。(五味子)酸を以て之を補ふ。
 (澤瀉)實するに、辛は之を瀉す。(芍藥)酸を以て之を補ふ。五味子(子)酸を以て之を補ふ。
 腎 〇〇燥を苦むに、辛は之を瀉す。急に辛を以て之を瀉す。急に苦を以て之を瀉す。
 (五味子)酸を以て之を補ふ。

以下(七)母ハ心臓ヲ指ス。

(七) 母ハ心臓ヲ指ス。

(六) 子入肺ヲ指入。

(五) 母ハ肝臓ヲ指ス

(四) 子ハ臍ヲ指ス。

(三) 母ハ腎臓ヲ指ス。

(二) 子ハ心臟ヲ指ス。

○眞／＼對（二）

1

桑自(皮)實(子)はさくこころるすす
 瀝(海)〇〇收(つ)を欲(ほ)するに
 急(きん)に食(た)を以てして、
 酸(さん)を以てして

[illegible]

そを緩うす。(炙甘草)を以て之を補ふ。(人参)を添へて之を補ふ。(炒鹽)を添へて之を補ふ。

[illegible]

○蠶を以て食するは、(非)
蠶を以て衣する。

そを以て之を補ふ(澤瀉)
は母を補ふ(五生)

參(蔘)實(實)するは子(子)を養(養)つては、(○)愛(愛)を欲(欲)するに、は、(○)甘(甘)草(草)を食(食)して、以(以)て之(之)を

緩^{ゆる}き^きを^を異^{こと}に^には^は急^{いそ}ぎ^ぎに^に醒^さめ^めて^て以^もつ^つて^て食^くふ^ふに^に以^もつ^つて^て以^もつ^つて^て手^てを^を洗^{あら}ふ^ふ。

[illegible]

(赤馬)實(二)は子(三)を散らす。(草)○散らすに欲するは、急ぎに幸ひて以て

○〇 藥を以て食を以て之を緩す。酸(草)甘を以て之を潤す。

五五藏五味補瀉

本草綱目序例

五臟五味補瀉

なるもの、や、は互に相應するところ因つて効果を擧げるのである。これは特に張古の素問の飲食補の理を人説の眞意を丁解して充分に活用すべきであると思ふ。

つて君に代つて命を行ふのである。血を主り、言を主り、汗を主り、笑を主る。心——精神を藏するところ、體溫の本源たる火を生ずる。包絡は相火の本源とな

肌を解するに桂枝、麻黄。

和解には柴胡、半夏。

標は之を發す

裏を攻むるに大黃。

火を瀉するに龍胆、草黃、苦茶、猪膽。

木を瀉するに芍藥、烏梅、澤瀉。

本は之を寒す

氣を補入に天麻、柏子仁、白朮、菊花、細辛、密蒙花、決明、殺精草、生薑。

血を補入に當歸、生薑、續斷、白芍、芍藥、血竭、沒藥、羌活、羌活、羌活。

母を補入に桂枝、杜仲、狗脊、熟地、黃芩、參、重葯、阿膠、兔絲子。

不足は之を補ふ

ふてゐるは
大いにかき
おけん。

○
𐑖

無暗に出る、
標病は、
聚す、
れ、
飲物、
好む。

腹が満急まんきゅうして、疝瘕せんがいして、大便閉だいべんして、腰骨疼ようこつ、逆さか、諸寒しよかん、は、本病ほんびやうは、すき透すきとる清せい冷れいい、小便せうべんが少せう、

○王女

[illegible]

標寒は之を散す

肺を温むるに
は丁香、薝蔔香、
豆蔻香、冬花、
檀香、白豆蔻、
益智、縮砂、糯
米、胡椒、白豆

ヲ云。厥逆ハ冷却其數ヲ指ス力。名此天ノ極ノ靈魂神

トア
廉ニ書ハリ
字トハ
同ニ書
ハリ
トア
廉ニ書ハリ
字トハ
同ニ書
ハリ

すことをえ得ず、小便數に失して欠い。
標病は、酒漸、寒熱、傷風、白汗、肩背が冷そ痛み、(四)臍臂の前廉が痛む。

氣實は之を瀉す

瀉すに 枳殼、生薑、厚朴、杏仁、淡竹、桔梗、蘇合。
瀉すに 枳殼、生薑、厚朴、杏仁、淡竹、桔梗、蘇合。
瀉すに 枳殼、生薑、厚朴、杏仁、淡竹、桔梗、蘇合。

氣虚は之を補ふ

母を補ふに 甘草、人参、麥門冬、白朮、芍藥、山藥、升麻、黃芩、合、天花粉、天門冬。
肺を斂むに 烏梅、五味子、芍藥、麥門冬、白朮、芍藥、山藥、升麻、黃芩、合、天花粉、天門冬。

本熱は之を清す

金を清するに 石膏、麥門冬、芍藥、天門冬、白朮、芍藥、山藥、升麻、黃芩、合、天花粉、天門冬。

本寒は之を温む

金を清するに 石膏、麥門冬、芍藥、天門冬、白朮、芍藥、山藥、升麻、黃芩、合、天花粉、天門冬。

命門——相火の原、天地の始である。精を藏し、血を生ずる、降れば漏るなり、

熱を清するに は 玄参、連翘、甘草、猪膚。

標 熱は之を涼す

表を解するに は 麻黄、細辛、獨活、桂枝。

標 寒は之を解す

裏を温むるに は 附子、乾薑、官桂、白朮。

本 寒は之を温む

下するに は 傷寒少陰の病證あり口燥咽乾に大承氣湯。

本 熱は之を攻む

血に は 地黄、芍薬、肉苁蓉、阿膠、山茱萸、五味子。

氣に は 人参、補骨、砂仁、苦參。

母を補ふに は 人參、山藥。

水 弱は之を補ふ

標熱は之を散す

下^下に^には^は 黃^黄、知^知、母^母、生^生、石^石、香^香、丹^丹、地^地、骨^骨、皮^皮。

中^中に^には^は 黃^黄、連^連、生^生、石^石、香^香。

上^上に^には^は 黃^黄、連^連、生^生、石^石、香^香、地^地、骨^骨、皮^皮。

本熱は之を寒す

下^下に^には^は 附^附、子^子、桂^桂、心^心、黃^黄、人^人、參^参、沈^沈、香^香、藥^藥、故^故、紙^紙。

中^中に^には^は 人^人、參^参、黃^黄、丁^丁、香^香、木^木、香^香、草^草、果^果。

上^上に^には^は 人^人、參^参、天^天、雄^雄、桂^桂、心^心。

虛火は之を補ふ

下^下に^には^は 世^世、消^消。

吐^吐するに^には^は 瓜^瓜、常^常、汁^汁。

發^發汗^汗に^には^は 麻^麻、黃^黄、柴^柴、胡^胡、根^根、附^附、子^子、生^生、石^石、香^香。

實火は之を瀉す

痺^痺の諸^諸病^病に^には^は 附^附、腫^腫、酸^酸、疼^疼、驚^驚、駭^駭、手^手の小^小指^指と次^次の指^指が利^利かなくな^なく、

三三 附腫實標木用藥式

胃虚は之を補ふ

飲食に は 巴豆、神麴、山查、阿膠、砂、三陵、輕粉。

濕熱に は 大黃、芒消。

胃實は之を瀉す

語し、咽痺し、上齒が痛む。口眼喎斜、鼻痛、鼽、赤瘡。

標は、病は、發熱が蒸すやうに發つて身體の前部が熱し後部が寒する。物狂し、

たが、病は、消化せぬ。飲食の爲に傷み、胃管が心に當つて痛み兩脇を支へる。

本病は、反胃、膈、中滿、嘔吐、瀉痢、霍亂、腹痛、消中、食ひ

胃土に屬し受け容れることを主る。水穀を容るるの海である。(主)は脾に

同

標熱は之を和す

和解するに は 柴胡、芍藥、中夏、甘草。

驚悸鎮むるに は 黑鉛、水銀。

カキヲ消ノ中病ニ云フ

名指スモテ赤鼻ノ如シ。鼻血。和。

癰癤ノ刀馬一狀ノ降腫。
癰癤ノ刀馬一狀ノ降腫。

火を降すには 黄連、黄芩、芍薬、甘草。
本熱は之を平にす 連翹、甘草。
膽を温むには 人参、細辛、半夏、炒黄連、炒黄芩、炒地黄。
虚火は之を補ふ 地黄、黄連、黄芩、芍药、甘草。
實火は之を瀉す 龍胆、牛膝、猪膽、生薑、生地黄、酸棗仁、黄連、黄芩、芍药、甘草。
核、刀、馬、足、小指、次、の指が利かなくなる。
癰病は、寒熱往來し、口苦、目昏し、不眠になる。
とする状態は、口苦、目昏し、不眠になる。
本病は、口苦、目昏し、不眠になる。
主るものは肝と同じ。
膽——木に屬し少陽の相火であつて、萬物を發生し、決け斷の宮、十一臓の主である。
表を解するには 柴胡、細辛、黄芩、芍药、甘草、石膏。

小腸——水穀を分泌するところを主とする。受胎の官である。

肌を解するに 石膏、白芷、升麻、葛根。

標 熱は之を散す

裏を温むに 乾薑、附子、肉豆蔻。

本 寒は之を温す

熱を清するに 石膏、地骨皮、角、地黄、黄芩。

本 熱は之を寒す

脱に 龍骨、白朮、芍薬、炙甘草、枳実、黄芩、石膏、附子、茯苓、石脂、禹餘糧、石櫟皮。

陷に 升麻、葛根。

濕に 白朮、羌活、独活、防风、黄芩。

燥に 桃仁、麻仁、杏仁、地黃、乳香、没药、肉苁蓉。

氣に 人参、黄芩。

腸 虚は之を補ふ

表を發するに は 臍黃、桂枝、羌活、蒼朮、防己、黃芩、木賊。

標 寒は之を發す

火を降すに は 地黃、厚朴、肉桂、黃芩、牡丹皮、地骨皮。

本 熱は之を利す

寒に は 枯梗、升麻、烏藥、山茱萸。

熱に は 黃蘗、知母。

下 虛は之を補ふ

火を泄するに は 石膏、茯苓、茯苓。

實 熱は之を瀉す

標病は、發熱、惡寒、頭痛、腰脊が強い、臍が寒り、足の小指が利かなくなる。

遺失し、或は氣痛する。

本病は、小便が淋瀝し、或は短く數出て尿の色が黄赤、或は白くなり、或は

と號ける。あらゆる病はこの膀胱に影響するものである。

膀胱——津液を主る。胞の府である。氣が化して此處から出るのである。州都の官

肌を解するに 是 本 寒 活 防 風 葛 荆 。

標 熱 是 之 散 す

火を降すに 是 本 寒 連 翹 子 。

本 熱 是 之 寒 す

血に 桂 心 玄 胡 索 。

氣に 赤 朮 實 苗 香 砂 仁 神 麴 扁 豆 。

虛 寒 是 之 補 ふ

血に 地 黃 赤 朮 牡 丹 皮 。

氣に 木 通 猪 苓 石 龍 膽 。

實 熱 是 之 瀉 す

標 病 是 身 熱 惡 寒 陰 痛 。

通 じ 大 便 後 出 血 小 腸 氣 痛 。

本 病 是 大 便 水 澱 下 小 便 短 小 便 閉 。

本草綱目序例第二卷

引

經報使

藥古珍珠靈

手の少陽は三焦、連翹、柴胡、升麻、石膏、地骨皮、上、には骨皮、中、には青皮、下、には附子。
足の厥陰は肝、青皮、柴胡、升麻、石膏、根。
足の少陽は膽、柴胡、青皮、升麻、石膏、根。
手の厥陰は心主、柴胡、升麻、石膏、根。
足の陽明は胃、白芷、升麻、石膏、根。
足の太陰は脾、升麻、石膏、根。
手の陽明は大腸、白芷、升麻、石膏、根。
手の太陰は肺、桔梗、升麻、石膏、根。
足の太陽は膀胱、羌活、獨活、桂枝、知母、細辛。
足の少陰は腎、獨活、桂枝、知母、細辛。
手の太陽は小腸、麻黃、木通、黃連、辛。
手の少陰は心、黃連、辛。

本草綱目序目錄第二卷

序例下

- | | |
|----------|------------|
| 宋本草舊目錄 | 神農本草經目錄 |
| 藥對虞物藥品 | 病有八要六失六不治 |
| 張子和汗吐下三法 | 陳藏器諸虛用藥凡例 |
| 李東垣證用藥凡例 | 飲食禁忌 |
| 姪振禁忌 | 服藥食忌 |
| 相反諸藥 | 相須相使相畏相惡諸藥 |
| 藥名同異 | |



[illegible]

紫金牛	草根が巴に似て居る。射干。	通草	木通、通脱木。
亮草	白芷、茵陈。	女娄菜	蔓草、地苗。
鳳尾草	金星草、貫衆。	扁竹	扁竹、干。
地節	藜、枸橼。	芒	芒、草。
雞腸草	藥之類、不食草。	鹿葱	葱、草。
地椒	野胡椒、水楊梅。	斑杖	虎杖、倒。
血見愁	茜草、地錦。	山慈	慈、蘆。
石衣	烏非、陸叢。	鬼鐵	鬼鐵、馬。
羊婆奶	沙參、摩子。	大蓼	紅草、蓼。
石髮	烏非、陸叢。	蘭草	蘭草、蓮。
仙掌	草、射干。	早蓮	蓮、蓮。
香茅	鼠尾草、茅。	麗	麗、仙。
千藤	解之、陳思。	忍冬	忍冬、門。
露葵	葵、菜。	益母	益母、地。

[illegible]

野瓜	野甜瓜	野草	野園	野紅花	野薄荷	黃大戟	野雞冠	黃光花	天蔓青	甜蔓	柱生	山生	鬼油	比類隱名	土青木香	馬兜鈴	野天麻	甜栝	草斷	野脂麻	水乳	草甘遂	香葉沙參	山竟菜	胡蔓荷	青粉黛	竹園	野胡羅蔔	野茴香	野萱花	野射干
くわ	かん	そう	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ	くわ
瓜	瓜	草	園	花	荷	戟	冠	花	蔓	蔓	蔓	生	油	比類隱名	土青木香	馬兜鈴	天麻	栝	斷	脂麻	乳	甘遂	葉沙參	竟菜	蔓荷	粉黛	園	胡羅蔔	茴香	萱花	射干
く	かん	そう	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く
瓜	瓜	草	園	花	荷	戟	冠	花	蔓	蔓	蔓	生	油	比類隱名	土青木香	馬兜鈴	天麻	栝	斷	脂麻	乳	甘遂	葉沙參	竟菜	蔓荷	粉黛	園	胡羅蔔	茴香	萱花	射干

朝あさ開ひらく泉いづみ扶たす水みづ狗いぬ魚うしほ白しろ魚うしほ黃き魚うしほ負お魚うしほ飛と魚うしほ鯉こい魚うしほ鳩はと魚うしほ地ち雞けい魚うしほ田で魚うしほ小こ鳥とり魚うしほ魚うしほ木き人ひと口くち中ちゅう津つ臺たい

草くさ 硫りゅう 黃わう 木もく 甘かん 草くさ 山さん 甘かん 草くさ 紫し 苑えん 藤とう 紫し 金きん 藤とう 赤せき 地ち 利り 赤せき 地ち 利り 土ど 疾しやく 者しや 羊やう 蹄てい 天てん 南なん 星しやう 赤せき 地ち 利り 山さん 薔せう 葵き 土ど 附ふ 子し 草くさ 天てん 雄ゆう 獐しやう 耳みみ 細さい 水すい 巴ぱ 戟きやく 黑くわく 狗こう 香かう 貴き 衆しゆ

黄連、黄芩、龙骨、白石、白鮮、羌活、独活、牛膝、熟地、冷水、菊花。

右草の一

白及 紫石英が使となる。石を惡む。杏仁、李核仁を畏る。
 白頭翁 鱗を畏る。酒を得て良し。
 紫參 辛夷を畏る。
 丹參 鹹水を畏る。
 地榆 髮を得て良し。麥門冬を惡む。丹砂、雄黄、硫黄を伏す。
 玄參 黃芪、乾薑、紫骨、冬麥子を得て良し。眞珠、飛廉、秦龜、瘡を畏る。
 淫羊藿 茯苓、龍骨、杜仲、雷丸、丹參、朝生を惡む。
 巴戟天 覆盆子、杜仲、小豆、使となる。石鍾乳を伏す。
 貫衆 薺、茵陳、赤芍、使となる。敗醬、惡む。
 狗脊 草薺、薺、惡む。

相須相使相畏相惡諸藥

徐之才の藥對所載のものに更に今にその後諸家の本草に増益

市	防風、地榆が使となる。	桃李、杏仁、松葉、青魚を忌む。
知母	黃蘗、及酒を得て良し。	蓬砂、鹽を伏す。
葳蕤	鹵鹹を畏る。	
黃精	梅實を忌む。	
桔梗	節皮が使となる。	白及、龍膽、龍眼を惡む。猪肉を忌む。砒す。
沙參	防己を惡む。	
人參	茯苓、馬薊が使となる。	鹵鹹、搜風を惡む。五靈脂を畏る。
黃芪	茯苓が使となる。	龜甲、龍齒を惡む。
甘草	北薤、苦參、乾漆が使となる。	遠志、猪肉を忌む。

されたるものに加へたるものである。

[illegible]

右草の二

白薇、大黃、山茱萸、大戟、乾漆、惡む。
石、消石を畏る。
細辛、骨蒸根が使となる。生薬、狸肉を忌む。黃芪、黄芪、惡む。
龍膽、貫衆、赤小豆が使となる。地黃、防葵を惡む。
貝母、厚朴、白薇が使となる。桃花を惡む。秦艽、莽草、礬石を惡む。
白鮮、結硬、茯苓、薔薇、蟪蛄を惡む。
苦參、女參が使となる。貝母、漏蘆、兔絲子を惡む。汞、雌黃、焰消を伏す。
羌活、蠶矢が使となる。
防風、草薢が畏る。乾薑、藜蘆、白欝花を惡む。
前胡、半夏が使となる。兒荑を惡む。藜蘆を畏る。
柴胡、半夏が使となる。兒荑を惡む。女宛、藜蘆を畏る。
秦艽、菖蒲が使となる。牛乳を畏る。
黃芩、龍骨、山茱萸が使となる。慈實を惡む。牡丹、牡丹、藜蘆を畏る。
胡黃連、猪肉を忌む。菊花、玄參、白鮮を惡む。

零陵香 三黄、黄、砂を伏す。

澤蘭 防己、使となる。

積雪草 硫黄を伏す。

香薷 山桃を忌む。

右の草

菊花 朮、枸根、桑根、皮、青箱葉が使となる。

薔薇 荆子、薏苡が使となる。

艾葉 苦酒、香附が使となる。

茺蔚 三黄、砒石を制す。

薇衛 秦皮を得て良し。

夏枯草 土瓜が使となる。汞砂を伏す。

紅藍花 酒を得てよし。

續斷 地黃が使となる。雷丸を惡む。

漏蘆 連翹が使となる。

烏頭 遠志、莽草が使となる。藜蘆、敗汁を惡む。飴、糖、黑豆、冷水を畏る。丹

白附子 火を得て良し。

天雄 遠志、人參、黄芩、綠豆、烏非、敗汁を惡む。

附子 地膽、人參、黄芩、綠豆、蜀椒、食鹽を得て下命門に達す。蜈蚣、敗汁を惡む。防風、

常山 王乳を畏る。葱、菴菜を忌む。砒石を伏す。

薤白を畏る。

葱、菴菜を忌む。

砒石を伏す。

炒豆を忌む。丹砂、粉霜を伏す。

蟹、犀角、甘草、升麻、綠豆を畏る。

瓜蒂が使となる。薯蕷を惡む。

小豆が使となる。桑葉を得て良し。薯蕷根を惡む。

大戟 甘草が使となる。麥門冬を惡む。

藟 甘草が使となる。地榆、桑肌を惡む。

藟藟、青蒲、鼠屎を畏る。

防已 般 孽 姑 雄 黃 細 辛 惡 牡 女 龜 雄 黃 消 石 毒 を

茜 根 鼠 姑 雄 黃 雄 黃 制 す。

威 靈 仙 茶 湯 忌 む。

白 欬 代 猪 が 使 とな 。

土 茯 苓 茶 忌 む。

尊 薤 白 意 以 が 使 とな 。

何 首 烏 茯 苓 が 使 とな 。

砂 を 制 。

天 門 冬 地 黃 貝 母 垣 衣 使 とな 。

黃 環 意 尾 が 使 とな 。

括 樓 根 枸 杞 乾 薑 防 己 乾 薑 魚 忌 。

紫 葳 鹵 鹹 を 畏 。

牽 牛 子 乾 薑 青 木 香 得 良 。

五 味 子 從 養 が 使 とな 。

烏 頭 勝 。

浮 萍 生 。

雄 黃 。

兔絲子、薯蕷、松脂が使となる。酒を得て良し。建蘭を惡む。

右の草六

鉤吻、半夏が使となる。黄芩を惡む。

薯蕷、人尿を畏る。

石龍芮、巴戟が使となる。蛇脫皮、吳茱萸を畏る。

華草、黑豆、紫河車を畏る。

荒花、決明が使となる。醋を得て良し。

羊躑躅、石及麴を惡む。丹砂、雌黄を伏す。

鬼垣、衣を畏る。

薑皮、秦龜甲、雄黄を畏る。

半夏、附子、射干、柴胡が使となる。皂莢、海藻、飴、糖、羊血を惡む。生薑、乾薑

生薑を畏る。薑を伏す。

天南星、蜀漆が使となる。火、牛膽を得て良し。莽草を惡む。附子、乾薑、防風、

砂、砒石を伏す。

巴豆 光花（花）が使となる。火を得て良し、養草、牽牛を惡む。大黃、藜蘆、黃連、蘆

砂（砂）を伏す。

黃芩 相實（實）が使となる。麥門冬を惡む。人參、苦參、空青を畏る。丹砂、粉霜、硫

良姜 苦瓠（瓠）が防（防）、大戟（戟）が使となる。吳茱萸を惡む。

秦皮 景天（天）が使となる。

槐實 茴香（香）が使となる。

煉油 酒を畏る。烟を忌む。

乾漆 生夏（夏）が使となる。雞子、紫蘇、杉木、漆姑、草蟹を畏る。猪脂を忌む。

杜仲 女參（參）が脱皮（皮）を惡む。

厚朴 乾薑（薑）が使となる。澤瀉、消石、寒水石、豆を惡む。

黃蘗 乾漆（漆）を惡む。硫黃（黃）を伏す。

右の木の一

丁香 鬱金（金）を畏る。火を忌む。

其驢鳴 密陀僧（僧）を得て良し。

殺す。

石 鐵 杜仲、牡丹、鐵落を惡む。貝母、豈蒲を畏る。麋毒を殺す。

右の草

澤 海蛤、文蛤を畏る。
石 薑 秦皮、秦丸が使となる。
石 斛 陸英、秦丸が使となる。
石 韋 滑石、杏仁、射干が使となる。
石 脂 丹、砂、礬石を制す。
烏 垣が使となる。

右の草

栢 藥 實 瓜、子、桂心、牡蠣が使となる。
桂 人參、甘草、麥門冬、大黃、黃芩を得て中へ調へ氣を益す。柴胡、紫石英、乾地黃を得て吐逆を療す。
辛 夷 芍薬が使となる。
五 石 脂 石脂を惡む。
豈 蒲、黃連、石膏、黃芩を畏る。
沈 香、檀 香 火を見をこしとを畏る。

食藥畏紫石英を畏る。

吳萊畏參實が使となる。白聖を惡む。紫石英を畏る。

麻仁、漿を畏る。

蜀椒杏仁が使となる。鹽を得て良し。款冬花、防風、附子、雄黃、橐吾、冷水、

秦椒樓、防葵を惡む。雌黃を畏る。

樗實綠豆と反して人を殺す。

桃仁香附が使となる。

杏仁火を得て良し。黃芩、黃芪、葛根を惡む。藜蘆を畏る。

右の木 四

占斯萊黃が使となる。

竹瀝薑汁が使となる。

桑寄生火を忌む。

雷丸黃朴、芫花、蓄根、荔實が使となる。葛根を惡む。

す。白欬、米酢、酸物、地榆、秦九、牡蒙、龜甲、雄黃を畏る。

茯苓、茯神、馬蘭（馬蘭）が使となる。甘草、防風、芍薬、麥門冬、紫石英、石炭を得て五臟を療

右の木

石南（石南）五加皮（五加皮）が使となる。小薊（小薊）を惡む。

蔓荊子（蔓荊子）決明（決明）が使となる。石膏（石膏）を惡む。

蔓荊子（蔓荊子）烏頭（烏頭）石膏（石膏）を惡む。

牡荊實（牡荊實）防己（防己）が使となる。石膏（石膏）を惡む。

瘦瘡（瘦瘡）漏蘆（漏蘆）が使となる。

五加皮（五加皮）遠志（遠志）が使となる。女參（女參）、蛇皮（蛇皮）を畏る。

山茱萸（山茱萸）麥實（麥實）が使となる。桔梗（桔梗）、防風（防風）、防己（防己）を惡む。

酸棗（酸棗）防己（防己）を惡む。

桑根白皮（桑根白皮）桂心（桂心）、續斷（續斷）、麻子（麻子）が使となる。

右の木

藥花（藥花）決明（決明）が使となる。

第一（第一）將敗（將敗）、豆汁（豆汁）、冷水（冷水）を畏る。

赤銅 煮北豆、乳香、胡椒、慈姑、牛脂を畏る。

鼠尾 龜甲、生薑、地黃、羊脂、蘇子油、馬目毒公馬毒を惡む。

生銀 錫を惡む。石亭脂、慈石、鐵を畏る。諸血を忌む。

朱砂 銀、石、亭脂、慈石、鐵を畏る。諸血を忌む。

金 錫を惡む。水銀、翡翠、翠石、餘甘子、驢馬脂を畏る。

右 榮 部

益母 扁青、茵陳蒿を畏る。

六 づれも葶藶が使となる。髮を得て良し。麻子仁、牡桂、白瓜子を得て人に

蘿蔔 酒を得て良し。雞子を畏る。

薯蕷 紫芝が使となる。甘遂を惡む。

芥子 荊實、細辛を得て良し。乾薑、苦參を惡む。

檀香 酒を得て良し。

乾薑 同上。

生薑 秦椒が使となる。黃芩、黃連、天鼠糞を惡む。半夏、南星、黃芩の毒を殺す。

右 穀部

諸豆粉 杏仁を畏る。

惡む。

大豆黃卷 前胡、杏仁、牡蠣、天雄、烏雞、鼠屎、石蜜を得て良し。海藻、龍膽を

惡む。猪肉、龍膽、五參、

罌粟殼 醋、烏梅、橘皮を得て良し。

大麥 石蜜が使となる。

小麥 漢椒、蘿蔔を畏る。

麻仁 茯苓、牡蠣、白微を畏る。

麻花 麝香、使となる。

右 果部

荷葉 桐油を畏る。

蓮華 地黃、慈蘇を忌む。

石蓮子 茯苓、山藥、白朮、枸杞子を得て良し。

石膏 雞子が使となる。鐵を畏る。莽草、巴豆、馬目毒公を惡む。

瓜汁を畏る。

雌黃 黑鉛、胡粉、芍藥、地黃、獨活、益母、羊食草、地榆、瓦松、五加皮、冬

五葉藤、雞腸草、雞腹草、薤草、不食草、圓桑葉、蠅脂を畏る。

雄黃 南星、地黃、高良、地榆、黃芩、白芷、當歸、地錦、苦參、五加皮、紫河車、

右の石

粉霜 硫黄、養髮灰を畏る。

汞粉 磁石、石黄、黑鉛、鐵漿、陳腐、黃連、十灰、芥を畏る。一切の血を忌む。

を畏る。

金星草 萱草、夏枯草、葦若子、雁來紅、馬蹄香、獨脚蓮、水慈姑、瓦松、忍冬

水銀 磁石、磁石、黑鉛、硫黄、大棗、蜀椒、紫河車、松脂、松葉、荷葉、穀精草、

樗 槿、紫河車、地丁、馬鞭草、地骨皮、陰決、白附子、子畏る。諸血を忌む。

丹砂 破石を惡む。鹹水、車前、石草、皂莢、決明、瞿麥、南星、烏頭、地榆、桑

茅屋の漏水を畏る。汞を制し丹砂を伏す。

雲母 澤瀉が使となる。徐長卿、羊血を惡む。鼈甲、蔡石、東流水、百草上の露、を待て霍亂を主る。鼈甲、黃連、麥句薑を惡む。烏骨、附子及酒を畏る。蒼石、英、長石が使となる。茯苓、人參、芍藥を得て心中の結氣を主る。天雄、豈蒲、白石英、馬目毒公を惡む。茯苓、人參、芍藥を得て心中の結氣を主る。天雄、豈蒲、青瑣、汗、水銀を得て良し。錫の毒を殺す。雞骨を畏る。玉泉、款冬、花、青竹を畏る。玉屑、鹿角を惡む。蟾肪を畏る。右金石の一

諸鐵 石亭脂を制す。慈石、皂莢、乳香、灰、炭、朴消、硝砂、鹽、滴、猪大脂、錫 五靈脂、伏龍肝、殺羊角、馬鞭草、地黃、巴豆、莖、薑汁、砒石、礞砂を畏る。胡粉 雌黃を惡む。紫背天葵を畏る。黑

礬石 煇消を得て良し。

波濤、

石 礬、

冷、

水、

綠豆、

醋、

青鹽、

酸、

三、

角、

礬、

食、

草、

煇消を得る。

律、

虎掌、

獨、

常、

山、

參、

水、

消、

石、

礬、

青、

鹽、

醋、

綠、

豆、

煇消を得る。

石 礬、

尿、

煇消、

惡、

辛、

血、

忌む。

辛、

細、

虎、

掌、

目、

毒、

公、

水、

使、

鐵、

丹、

鉛、

火、

得、

て、

良し。

馬、

目、

毒、

公、

水、

使、

鐵、

丹、

鉛、

火、

得、

て、

良し。

石 礬、

水、

英、

使、

子、

絲、

鬼、

母、

三、

黃、

膏、

落、

鐵、

子、

附、

天、

雄、

附、

子、

附、

水、

使、

鐵、

丹、

鉛、

火、

得、

て、

良し。

水、

使、

鐵、

丹、

鉛、

火、

得、

て、

良し。

水、

使、

鐵、

丹、

鉛、

火、

得、

て、

良し。

石 礬、

松、

脂、

實、

桂、

石、

煇消、

得、

て、

良し。

石 礬、

砂、

水、

銀、

養、

伏、

得、

て、

良し。

石 礬、

柴、

胡、

使、

子、

丹、

附、

天、

雄、

附、

子、

附、

天、

雄、

附、

子、

附、

子、

附、

子、

附、

子、

附、

陽起石 桑螵蛸 雷丸 菌桂 石麥 蛇脫皮 兔絲子 畏

右の石

殷孽 防己を惡む。赤を畏る。

英、養、蛇、非、實、獨、胡、慈、麥、冬、猫、眼、草、を畏る。

石鍾乳 蛇、牀、が、使となる。牡、玄、石、人、參、赤、を惡む。羊、血、を忌む。紫石

孔公孽 木、蘭、が、使となる。赤、細、辛、を惡む。羊、血、を忌む。

萬石脂 曾、青、が、使となる。細、辛、を惡む。蜚、黃、連、甘、草、を畏る。卯、末、を忌む。

白石脂 燕、屎、が、使となる。松、脂、を惡む。黃、芩、黃、連、甘、草、飛、廉、毒、公、畏る。

赤石脂 大、黃、松、脂、を惡む。荒、花、敗、汁、を畏る。

五色石脂 黃、芩、大、黃、桂、を畏る。

不灰木 三、黃、水、銀、を制す。

滑石 石、韋、が、使となる。骨、節、を惡む。雄、黃、を制す。

方解石 巴、豆、を惡む。

理石 滑、石、が、使となる。麻、黃、を惡む。

五靈脂 人參を惡む。

夜明沙 白欬を惡む。

伏翼 真、雲實が使となる。

右 介 部

海蛤 蜀漆が使となる。狗膽、甘遂、羌花を畏る。

馬刀 火を得て良し。

蚌粉 石亭脂、硫黄を制す。

夷 毒を惡む。礪砂を伏す。

牡蠣 貝母が使となる。甘草、牛膝、遠志、蛇床子を得て良し。

鼈甲 禁石、理石を惡む。

龜甲 沙參、蜚蠊を惡む。狗膽を畏る。

右 鱗 部

河豚魚 橄欖、甘蔗、蘆根、發汗、魚若木、烏蘆草根を畏る。

烏賊魚骨 白、及、白、欬、附子を惡む。

辛 吳茱萸、麻黃、

鯉魚膽	蜀漆 <small>しやくし</small> が使となる。
白花蛇	烏蛇 <small>くさへ</small> 酒を得て良し。
蛇	火 <small>くわ</small> を得て良く。慈石 <small>じせき</small> 及び酒を畏る。
蜥蜴	硫黄 <small>りゅうわう</small> 斑 <small>はん</small> を畏む。無美 <small>むび</small> を惡む。
鼈	蜀漆 <small>しやくし</small> が使となる。甘遂 <small>かんすい</small> 、狗膽 <small>くうたん</small> を畏る。
龍角	蜀椒 <small>しやくしやう</small> 、理石 <small>りせき</small> 、乾漆 <small>かんしやく</small> を畏る。
龍骨	人參 <small>じんじん</small> 、牛黃 <small>ぎゅうわう</small> 、黑豆 <small>くわんまい</small> を待て良し。石膏 <small>せうこう</small> 、鐵器 <small>てつき</small> を畏る。魚 <small>ぎょ</small> を忌む。
右 蟲 部	
牛、蛭、蛇、蜈蚣	鹽 <small>えん</small> を畏る。
蛇、蜈蚣	葱 <small>そう</small> 、鹽 <small>えん</small> を畏る。
蜈蚣	蛇 <small>さ</small> 、蜘蛛 <small>くわしや</small> 、白鹽 <small>はくえん</small> 、雞屎 <small>けいし</small> 、桑皮 <small>そうひ</small> を畏る。
蜚蠊	麻黃 <small>まわう</small> を惡む。
麝香	兒茶 <small>じや</small> 、菴蒲 <small>あうぼ</small> 、屋遊 <small>おくゆう</small> を畏る。
衣魚	芸草 <small>げんそう</small> 、莽草 <small>まうそう</small> 、蒿 <small>こう</small> を畏る。

右獸部

麝脂 五金、酒を制す。八右を制す。雄黄を伏す。
獬皮 酒を得て良し。梗、麥門冬を畏る。
麝香 大忌を忌む。
麝脂 大忌を忌む。
桃李 大忌を忌む。
麝脂 大忌を忌む。

右禽部

羝羊角 兔絲子（子）が使となる。

羊脛骨 礶砂（砂）を伏す。

羝羊屎 粉霜（霜）を制す。

牛乳 秦朮（朮）不灰木（木）を制す。

馬脂 駝脂 五金（金）を柔（柔）ぶ。

阿膠 火を得て良し。薯蕷（薯）が使となる。大黃（大）を畏る。

牛黃 人參（參）が使となる。牡蠣（牡）蒲（蒲）を得て耳（耳）を利す。

蜚蠊（蠊） 蟻（蟻）を惡む。牛膝（膝）、乾漆（漆）を畏る。

犀角 松脂（脂）が使となる。雷丸（丸）、菴菌（菌）、烏頭（頭）、烏喙（喙）を惡む。

熊膽 防己（己）、地黃（地）を惡む。

鹿茸 麻勃（勃）が使となる。

鹿角 杜仲（仲）が使となる。

鹿角膠 火を得て良し。大黃（大）を畏る。

龍骨（骨） 龍膽（膽） 地黃（地） 常山（山）

吳茱萸、猪心、猪肉を忌む。

丹砂、空青、輕粉、いづれも一切の血を忌む。

商陸、犬肉を忌む。

陽起石、雲母、鍾乳、礪砂、礬石、いづれも血を忌む。

牛膝、牛肉を忌む。

半夏、薑、猪肉、羊血、飴糖を忌む。

仙茅、牛肉、牛乳を忌む。

桔梗、烏梅、猪肉を忌む。

蒼耳、猪肉、馬肉、米泔を忌む。

黃連、胡連、猪肉、冷水を忌む。

甘草、猪肉、松菜、海藻を忌む。

服藥食忌

相反諸藥

藥凡二十三種

柿 蜜 河 豚 葵 蘆 頭 烏 大 戟 甘 草

に 葱 ニ、ニ、ニ 煤 ニ、ニ、ニ 人 ニ、ニ、ニ 母 ニ、ニ、ニ 大 ニ、ニ、ニ

荆け 沙さ 海かい 荒わづ
芥かい 參さん 樗く 藻そう 花はな

防風ふうふう 丹たん 參さん 生せい 夏げ 反はん 遂すい

菊キク花ハナ 参マツ 白ハク 歛セン 海カイ藻ソ

枯き 梗や 参ん 白く 反す

甘草 細辛 反す

鳥頭藥

附：狸子肉

21	15	6
21	15	6

凡そ藥を服する場合には死骸、産婦、見苦、穢、いやなものを見てはならぬ。

食つてはならぬ。

凡そ藥を服する場合には生蟲、胡荽、生葱、種物の果物、種の滑溜の物を多く

ものを食してはならぬ。

凡そ藥を服する場合は肥猪、大肉、油膩、鱈、鯢、腥臊のもの、古い臭い種の

丹參、茯苓、茯神、醋及一切の酸を忌む。

當歸、濕麴を忌む。

威靈仙、土茯苓、麴、湯、茶を忌む。

本草綱目序例

牛乳 生魚、酸物を忌む。

牛肉 黍、米、非難、生薑、猪肉、犬肉、栗子、忌む。

猪肉 身、苳、荊芥、茶、猪肉を忌む。

大肉 菱角、蒜、牛腸、鯉魚、鱒魚を忌む。

白狗血 羊、雞を忌む。

羊心肝 梅、小豆、生椒、苦笋を忌む。

羊肉 梅子、小豆、豆醬、蕪麥、魚鱸、猪肉、醋、酪、鮮を忌む。

猪心肝 白、花、菜、吳菜、黄、魚、腸と子を忌む。

猪肉 鱸、肉を忌む。

猪肉 生薑、蕎麥、葵菜、胡、萎、梅子、炒豆、牛肉、馬肉、羊肉、鹿、麋、

飲食禁忌

妊 娠 禁 忌

[illegible]

六經の頭痛には 川芎を用ゐて引經の藥を用ゐるがよい。太陽には蔓荊。陽明に傷寒惡寒には 麻黃を君となし、防風、甘草を佐とする。傷風惡風には 防風を君となし、麻黃、甘草を佐とする。痛むには柴胡、防風を用ゐ。右が吊つて痛むには白芷をそれに加へる。背が吊つて痛むには羌活、防風、前が吊つて痛むには升麻、白芷を、兩脇の吊破傷中風には 脈が浮して表に在れば發汗せ、脈が沈して裏に在れば下させ、湯を用ゐ。然る後に經を行すには獨活、防風、柴胡、白芷、川芎を經に隨つて用ゐる。風が五臟に中つて 耳が聾し、視力が鈍くなれるには、先づ裏を疏する爲に三化風活類に隨つて用ゐる。風活類に隨つて藥を加へ、然る後に經を行し血を養ふに 當歸、秦龜、獨活を君となし、病證に隨つて藥を加へ、遂になれるには、先づその表を發する爲に羌活、防風が六腑に中つて 手足が不遂になれるには、先づその表を發する爲に羌活、防風

李東垣隨證用藥凡例

梅子、薑、生薑、芥末、乾芋、芋、野砂、鴨、酒、雞、魚、羊心、肝、木耳。

此身此

氣短喘には人參、黃芪、五味、防風。
熱喘燥喘には阿膠、五味、麥門冬。
水飲喘には白礬、皂莢、葶藶。
熱喘の暖嗽には桑皮、白礬、黃芩、訶子。
寒喘の痰急なるには麻黃、杏仁、半夏、白朮、貝母、生薑、防風。
聲があり痰があるには五味、杏仁、貝母、生薑、防風。
諸嗽の痰なきには五味、杏仁、貝母、生薑、防風。
諸嗽の痰あるには半夏、白朮、五味、防風、枳殼、甘草。
を加へ、秋は防風を加へ、冬は麻黃、桂枝の類を加へる。
する。熱の有無に拘らず少し黄芩を加へ、春は生薑、芍薬を加へ、夏は芎藭、知母を加へ、熱には黄芩を加へ、風には南星を加へ、熱には黄芩を加へ、
一切の痰飲には半夏を用うるがよい。風には南星を加へ、熱には黄芩を加へ、
濕には白朮、陳皮を加へ、寒には乾薑を加へる。
風熱の諸病には荆芥、薄荷を用うるがよい。
諸嗽の病には五味を君とし、痰には生薑を用ゐ、喘には阿膠を加へて佐と

風冷の諸病には川鳥（うぐいす）を用うるがよい。
風濕の諸病には羌活（きやうかつ）白朮（びやくじく）を用うるがよい。
腎虛（じんじょ）て牙の疼くには桔梗（きやうきやう）升麻（しやうま）細辛（さいしん）吳茱萸（ぶしゆ）。
防風（ぼうふう）。
風熱（ふうねつ）て牙の疼くには冷を喜（き）ひ熱（ねつ）を惡（にく）むには生（せい）下（げ）當歸（たうき）升麻（しやうま）黃連（わうれん）牡丹皮（ぼたんぴ）。
菊（きく）の類を佐とする。
眼が久しく昏（くら）するには熱下（ねつげ）當歸（たうき）を君（きん）となし、羌（きやう）防（ぼう）を臣（しん）となし、甘草（かんさ）甘（かん）。
て服する。
眼が暴か、腫（は）れたるには防風（ぼうふう）、升（しやう）連（れん）で火（ひ）を瀉（げ）し、當歸（たうき）を佐とし酒で煎じ。
眼が腫痛には羌活（きやうかつ）。
肢節の腫痛には羌活（きやうかつ）。
喉痛（こう）頸腫（けいしゆ）には黃芩（わうじん）、鼠粘子（しゆぢし）、甘草（かんさ）、桔梗（きやうきやう）。
風濕身痛（ふうしきん）には羌活（きやうかつ）。
眉稜骨痛（めいりやうこつ）には羌活（きやうかつ）。
は白芷（びやくし）。太陰（たいいん）には半夏（はんげ）、少陰（せういん）には細辛（さいしん）、厥陰（けついん）には吳茱萸（ぶしゆ）、顛頂（てんてい）には藁本（かうほん）。

諸痢、腹痛には下して後には白芍、甘草を君となし、當歸、白朮を佐とする。

臍腹の疼痛には熟艾、烏藥を加へる。

少腹の疝痛には青皮、川楝子を加へるがよし。

胃脘の寒痛には草豆蔻、吳茱萸を加へるがよし。

脇痛熱には柴胡を用ゐるがよし。

なりを滴當に用ゐる。

諸血の刺痛には當歸を加へるがよし、

諸氣の刺痛には枳殼、香附に引經の藥を加へる。

子加へ、諸痛には神麴を加へ、血に桃仁を加へる。

六鬱の痞滿には香附、撫芎、濕には蒼朮を加へ、痰には陳皮を加へ、熱は后

痰熱に黄連、半夏を用ゐ、寒には附子、乾薑を用ゐる。

胸中の痞塞には實の場は厚朴、枳實を川、陳皮を用ゐ、

胸中の煩熱には枳實、茯苓を用ゐるがよし。

宿食の不消化には積實を用ゐるがよし。

て用ゐる。

飲食の熱物に過傷せるには大黃を君となし、冷物の過傷には巴豆を丸、散とし

腹中實熱には大黃、芒消。

腹中堅狹には蒼朮を用ゐるがよし。

腹中脹滿には薑制厚朴、木香を用ゐるがよし。

下焦の濕熱には酒洗の黃防己、龍膽草を君となし、甘草、黃藥を佐とする。

下焦の濕熱には酒洗の黃、知母、防己。

中焦の濕熱には黃連で火心を瀉す。

上焦の濕熱には黃芩で肺火を瀉す。

防風。

脾胃の濕あるには臥してわたり痰があらば白朮、蒼朮、茯苓、猪苓、半夏、

食思の進まぬには木香、藿香。

脾胃の困憊には參、芪、蒼朮。

諸瘧の寒熱には柴胡を君となす。

下部血を見るには地榆（地榆）を使として用ゐるがよし。

中部血を見るには黄連（黄連）、芍薬（芍薬）を使として用ゐるがよし。

上部血を見るには防風（防風）、牡丹皮（牡丹皮）、天、麥門冬（麥門冬）を使として用ゐるがよし。

は髪（髪）、灰（灰）、棕（棕）、灰（灰）。

は生地黃（生地黃）、血を破るには桃仁（桃仁）、紅花（紅花）、蘇木（蘇木）、背根（背根）、玄胡索（玄胡索）、郁李仁（郁李仁）、血を止むるに

一切の血痛には血を活し血を補ふには當歸（當歸）、阿膠（阿膠）、川芎（川芎）、甘草（甘草）、血を涼するに

冷氣には草薢（草薢）、丁香（丁香）。

泄すには、牽牛（牽牛）、蘿蔔子（蘿蔔子）、氣を助くるには木香（木香）、藿香（藿香）、氣を補ふには人參（人參）、黃芪（黃芪）、氣を

一切の氣痛には胃を調へるには香附（香附）、木香（木香）、滯氣（滯氣）を破るには青皮（青皮）、枳殼（枳殼）、氣を

驚悸恍惚には茯神（茯神）を用ゐるがよし。

自汗、盜汗には黃芪（黃芪）、麻黃根（麻黃根）を用ゐるがよし。

歸（歸）を加へる。

申の刻には柴胡（柴胡）を加へ、酉の刻には黃芩（黃芩）、午の刻には黃連（黃連）を加へ、辰の刻には羌活（羌活）を加へ、夜は當

時を切つて潮熱するには

虚熱の汗無きには
牡丹皮（ほたんぱ）、地骨皮（ちこくぱ）を用ゐる。

虚熱に汗あるには
黄芩、地黄、知母を用ゐるがよし。

肌熱く痰あるには黄芩わうこんを用ゐるがよし。

藥中の刺痛には

小便の餘歴には黄蘗、杜仲、

心煩口渴は、乾薑、茯苓、天花粉、烏梅を用ゐる。
半夏、夏、高根は、禁物である。

小便の不利には、黄蘗わうばく、知母ちもを君となし、茯苓ふくろう、澤瀉たくさを使すとす。

小便の萬應に
萬應藥、
蠶矢、
蠶矢の

穀^この不^ふ消^{しょう}化^かには防^{ぼう}風^{ふう}を加^く入^いる。

水瀉止まざるには
白朮びやくじゆつ茯苓ふくけいを君きみとなし、
芍薬しやくやくを佐さとして用もちゐるが、よく、

惡熱にハ黄芩ワウジンを加へ、痛まなければ芍薬シャクヤクを生薑シヤウキヤウ減ずる。

香、檀、香、檳榔を加へて之を和する。○腹痛には芍薬を用ゐ、惡寒には桂枝を加へ

○先^{まづ}に下^{くだ}し後^{のち}に便^{べん}するに黄^{わう}丹^{たん}を君^{きみ}となし常^{じょう}歸^きるに黄^{わう}丹^{たん}を佐^さとす。○裏^{うり}急^{きふ}には消^{しょう}黄^{わう}ににて之^{これ}を下^{くだ}し、後^{のち}重^{じゆう}に木^きに痢^りする。

針灸を用ゐる。

下部の痔漏には蒼朮、防風を君となし、甘草、芍薬を佐となし、病證をよく確め

上で加減する。

婦人胎前には發熱、及肌病あるに、黄芩、白朮を以てして胎を安し、然る後に病を治する藥を用ゐる。柴胡、黄連、芍薬を忌む。渴に生夏を去りて白茯苓を加へ、喘

嗽は人參を去り、腹に脹に甘草を去り、血痛に芍薬歸、桃仁を加へる。小兒の驚搐には破傷風と同じ。破傷風に牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

心熱には目眩、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

肝熱には鼻上、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

脾熱には鼻上、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

肺熱には右腮、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

腎熱には額上、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

胃熱には額上、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

肝熱には目眩、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

脾熱には鼻上、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

肺熱には右腮、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

腎熱には額上、目赤、牙を咬み、額の黄色ならば黄連、甘草、薄荷散

(一) 呼吸動ノ貌。

虚して氣息が多く微欬を兼るものには五味子、大棗を加へる。
虚して(一)呼吸するには胡麻、覆盆子、柏子仁を加へる。
虚して口乾くには麥門冬、知母を加へる。
虚して屢物を忘れるには茯神、遠志を加へる。
虚して甚だ熱するには黄芩、天門冬を加へる。
虚して搏するには鍾乳、棘刺、從蓉、巴戟天を加へる。
虚して冷るには當歸、芍藥、乾薑を加へる。
虚して多く熱するには地黄、牡蠣、地膚子、甘草を加へる。
虚して夢を多く見意識の混亂するには龍骨を加へる。
虚して不安なるにもまた人參を加へる。
虚して吐せんと欲するには人參を加へる。
虚勞の爲に頭に痛しまた熱するには枸杞、葳蕤を加へる。
外はない。こ復病の治熱に對する藥の増減を詳記して置く。
下に效を擧げるといふことはないのである。それでは實にあやふやな仕事といふの

陳藏器諸虛用藥凡例

行ふことはただ病を治療するといふ名ばかりで、到底必ず治療するといふ確信の
 に現れる病勢や、それに應ずべき薬の分量の多少に就ての智識もない。
 人自身探薬に従事しないから、勢ひその薬の節、氣の早晩も判らず、又冷熱
 が最も盛な時を過ぎて已に退ける期に入つて了んである。然るに現今の醫術を行
 へば探収が適當の時より早ければ薬の勢力がまだ完全に充ぜず、晩ければ勢力
 が作用を作すかを審に研究して、その探収の時、季節の早晩を擇んだものである。
 皆自ら薬の探収を行ひ、病の種種なる現象に對し藥物の本質なり性能なりが如何な
 それにその病に隨つて適當の増減を加へる必要がある。古の善く醫術を行ふ者は
 し勞するものもそれ因つて種種の惡向、惡結果を將來するものであつて、
 るものであつて、積聚の疾は多くは舊方そのまゝ増減を施すまでもない。しかし虚
 である。積と云ふ病は五臟に於て現れるものであり、聚と云ふ病は六腑に於て現れ
 多くの病の積聚はいつれも虚に原因するもので、虚はあらゆる病を誘發するもの

神昏不足は	硃砂、	預知子、	茯神を加へる。
膽氣不足は	細辛、	酸仁、	地榆を加へる。
腎氣不足は	熟地、	遠志、	牡丹皮を加へる。
脾氣不足は	白朮、	白芍藥、	益智を加へる。
肝氣不足は	天麻、	川芎、	羌活を加へる。
心氣不足は	上黨、	參、	茯神、
			菖蒲を加へる。

肺氣不足には天門冬、麥門冬、五味子を加へる。
 髓竭きて不足なるには生地黃、當歸を加へる。
 虚して損し尿自きに厚朴を加へる。
 虚して小腸利せざるは茯苓、澤瀉を加へる。
 虚して小腸の利するに桑螵蛸、龍骨、雞胓を加へる。
 虚して疲ありたり氣息が劇しいは生薑、半夏、枳實を加へる。
 虚して冷えるは鹽西の黄芩を加へる。
 虚して客熱するに地骨皮、白朮の水の黄芩を加へる。白水とは地名である。
 虚して多し冷えるに桂心、吳茱萸、附子、烏頭を加へる。
 虚して身軀が強り腰中利せざるには磁石、牡仲を加へる。
 れも用ゐる。

紫石英、小草を用ゐ、若し客熱せば沙參、龍齒を用ゐ、冷えず熱せぬにも、いづきは

臣、佐使となり、いつれも膝理を發するなり、津液を順調にするなり、氣血を通ずるを補ひ、甘んは腎を補ひ、酸は脾を補ひ、苦は肺を補ふのそれであつて、更に互に君、更に補といふことに就ては言及されなないが、所謂補とは、辛は肝を補ひ、鹹は心、更に補と表を解するのだから汗と同様、洩は小便を利するのだから下と同様である。殊するは陰であるところある。發散は汗に包攝し、滲泄は吐に包攝し、泄は下に包攝する。素問經の「一書に、辛、甘、酸、苦、酸、苦、泄の滲泄、方法を用ゐてその邪氣を驅除し、それで元氣が自回復するのである。ふてこを始めて講ぜらるゝものである。右の容體以外の病には、必ず先づ三つ入る。補の手當はただだ脈が脱し下虚して居るといふだけで、邪もなく積もないといふ。堪へるに至らぬうちに、邪氣がますますその發展を擡にするところになるのである。平氣で室内の物の整頓を試みて居るやうなものである。純眞な正氣がまだ凡らずして先づ補劑を施すものあらば、これは恰も盜賊がまだ門の内に居るにも拘らずなものであるならば、その人は俄ち死するところを免れない。若しその邪を除き去るだ重大なものであれば、久しきに亘つて決して自滅せざるのみならず、更に重大

張子和汗吐下三法

るに、輕微なものであれば、いに自ら盡きて了んであらうが、それが甚
 て、これを取集めて留めて置くといふことは可なる所以を認められな。若し留め
 有。故に邪氣が人中つて禍福した場合、これを去るべきは當然のことであつ
 は外から受入れ、或は内部から發生する、邪氣に原因するこのもので
 一 體疾病なるものは決して先に間天天的に固有なるものでないであつて、或
 氣が付かぬ。余がここに特に三法を記述する所以である。
 の實を治することと敢てしない。それを世間の一般人は誤れるものとといふこととに
 しめ、虚を却つて虚せしめる。凡庸の醫師になれば虚を補ふことのみに熱中してそ
 ものは定見なく、或は實を治し、或は虚を治する。術の謬れるものは實を却つて實せ
 であつて、良醫は先づその實を治して後にその虚を治するのであるが、醫術の麤なる
 人の間、體體は表と裏との外に出ない。氣と血との有様は虚と實との外に出ないの

よのである。

補の作用がある。經に、その要を知る者は一に言にして終るといふのもこの機微をい
てこれを除くところが出来る。同じ吐のうちに汗の作用があり、下のうちにも泄し
寒、固、冷、火熱が下焦に客し留つて、それが種の病の原因となつたものは泄し
痰、臥、宿、食、胃、膈に在つて種の病となるのは皆涌して驅除することが出来る。
注、麻、痺、腫、痒、拘、攣、風、寒、邪、が結んで皮膚の間を搏ち、經の内に滯り、留つて去らず、或は痛
る。於てする。病の原因たるものも三ツであら、鹹、淡、が病を發するの多くは中の部分に
於てし、人の六味即ち酸、甘、辛、水、泥、が病を發するの多くは下の部分に
於てし、地の六氣即ち霧、露、雨、雪、水、火、が病を發するの多くは上の部分に
あつて、天の六氣即ち風、寒、暑、濕、燥、火、に行ふものは皆下法に屬するもので
じ、水を遂ひ、經水を破り、氣を洩す等凡て下催し、乳を促し、食物の滯を減
等て凡て表を解するものは皆吐法に屬し、蒸、洗、熨、烙、針、刺、砭、射、導、引、按摩

カ
ト。
注。痛ノツツ

に遺憾千萬とてある。そもも涎を引き、涎を瀉り、唾を取、涙を追ふ等凡そ誠に余の法に對し着實なる理解のない醫家は、却つて反對し罪戾するのであるが、而るに按あり、蹠あり、導あり、増減あり、續止あること勿論である。これに併用して居る。それ余は常に主としてこの法を用ゐ、他の種種の方法をこれに併用して居る。平無事の世を治めるには徳を用ゐるやうなものである。亂賊を治めるには刑を用ゐ、太く、善き穀物や肉などは徳教の如きものであつて、へば汗、吐、下、三法は刑罰の如く、況や大毒、有毒の薬品をやである。この故にたとへば汗、吐、下、三法は刑罰の如く、品を以て補を試むるならば、氣の増大して天死するのやうなものでも、久しく服すれば必ず偏勝の象を生じ、氣の増大して天死するのやうなものでも、久しく服す品を配し、均衡を失はぬやうにすればよいのである。然らずして強ひて藥づれども皆補として資料なのである。故にこれに對しそれぞれ五臟に適當するやうのものであつて、病が除去されなければならぬやうな野菜なり肉なりの食物がいし氣な補の法などは全然趣を異にする。蓋し草木はそれぞれ治病の效を擧げる怪なるなりする。それが補そのものに當るのである。現今の人の濫用する溫、燥の怪

瀉血(四) 誤作瀉血、誤然金、誤木。

吐血、咯血、衄血、嗽血、崩血、前血、瀉血、患者自身が生血に醫書な
瀕し老弱で氣の衰へた者、自ら吐いて止まざるもの、陽が破れて血虚したものの、
八種ある。非常に強情で強暴で好んで怒り喜んで病勢が危篤に
法が悪いといふやうなことをいふものである。吐かすへにかざるもの
すことは藥物である。さうした場合、患者は自制が出来なくて、多くは吐
は、心火が既に降つて陰道が必ず強大になるが、その場合合房室や悲嘆憂愁を
硬いもの、乾いたもの、油強いものを飽食することと忌む。既に吐いた後に
再び吐かせる。吐いた後は別に禁ずるものはないが、ただ酸いもの、鹹いもの、
悪くするものもある。悪くするのは引き方があるが、底ぬのだから数日後に
は三回位に吐かせるがよい。吐いた翌日は順に快くなくなるものもあり、ます
り解するものであつて、強壯なものならば一回吐いて平気になるが、弱いもの
てそれに驚き感ふことはない。そこで氷水を飲ませるとそれですつつか
はないのである。いよいよ吐き初めると腹脹するまで吐くところがあるが、洗
濯を服させる。なほ吐かぬときは再び投じ且つ探つて見れば吐かぬといふと

[illegible]

醫者は妄に藥を投じて寒すへきもの反つて熱し、熱すへきもの反つて寒す。この點からいへば、下すことが直に補の作用と同一結果になるのである。凡庸なつて腸胃が清潔になれば、積がなくなつて營衛が順調に通ずるのであるから、去下法は積聚が中陳寒熱を内に留結するに必ず下法を用ゐる。陳寒熱が去

とらばこれを發するといふことができる。

驚風、瀉して止むぬもの、酒病、火病には皆發汗がい。所謂火鬱するはそれでは止る。必ずしも多くの藥を試むる必要はない。凡そ破傷風、小兒はこれを反して却つて病に變を生ずることがある。發汗が病的の中した場合、これを達し寒すへきは完全には寒の變を達するが、その選擇が適當を得ない目的を有する屬であつて、これを適當に擇むれば熱すへき完全に熱の目的を有する。浮萍は辛酸にして平なるものであらう。芍藥は酸にして微寒なるものであらう。苦實、苦參、地骨皮、柴胡、胡は苦にして寒なるものであらう。羌活、獨活は苦辛にして微溫なるものであらう。黃芩、知母、枳實、苦參、地骨皮、柴胡、胡は苦にして溫なるものであらう。

7. 消ノ體下痢ハ食物ヲ不

ト之ヲ謂而注府者汗液也、汗空ト所謂玄、府者聚於玄、故也。

温なるものであらう。官桂枝は甘辛にして大熱なるものであらう。厚朴、桔梗、
 のであらう。桑白皮は甘にして寒なるものであらう。防風、當歸は甘辛にして
 入參、大棗は甘にして温なるものであらう。赤茯苓は甘にして平なるもの
 して熱なるもの、青皮、防己、秦艽などは辛にして平なるものであらう。麻黄、
 天麻、生薑、葱白は皆辛にして温なるもの、蜀椒、胡椒、茱萸、大蓟は皆辛に
 る。これを本草の薬に割つれば、荆芥、薄荷、白芷、陳皮、半夏、細辛、蒼朮、
 汗、導引、汗などの方で、やはいつれも玄府を開いて邪氣を逐ふ方法であ
 となのである。然してそれには數種の方法がある。それは玄府を開いて邪氣を逐ふ
 うとすると汗には發汗が最も善き方法である。それには玄府を開いて邪氣を逐ふ
 汗法 風寒、暑、濕の邪が皮膚の間に入つて来た深からず、これを逐に驅除しよ
 たとひ強ひて懇に求められなくても必ずそれに従はぬがい。
 ぬ。吐かせれば更にそれ以外な病を發生して反對の端緒がある。
 添ふ周囲の者が兎角多言を吐き騷しき場合、これ等は吐かせてはなら
 どとを以て實は確實な智識のない者、患者が意識不明且不定な者、患者に附

なる。胸背二十四節を主る。

なる。四股二十節を主る。○立秋の日は白芷、防風、先づ生ず。細辛、蜀漆の使と

を主り、神を保し中を守る。○夏至の日は豕首、茺蔚、先づ生ず。牡蠣、烏喙の使と

痛四十五節を主る。○立夏の日は黃蘗、先づ生ず。人參、茯苓、使とな。腹中七節

百草を主り之が長となる。○立春の日は木蘭、射干、柴胡、半夏の使となる。頭

立冬の日は菊、卷柏、先づ生ず。陽起石、桑螵蛸の使となる。凡て十物の使は二

藥對歲物藥品

注は神農名例に在る。

病有八要六失六不治

藥を殘して差支ない。

い。ただ下法を用いて寒、熱、積氣の病に的中すればそれまで止めねばならぬ。

その餘では大積、大聚、大痞、大秘、大堅、いづれも下す以外の良法はな
 るもの、小兒の病後慢驚するもの、四種は下せざるを要すの腹がある。
 が四種ある。洞泄寒中、更に他病を發生させるもの、表裏俱に虚するもの、厥して唇青く手足冷
 らず、胸熱し口燥き、妄に下せばだ患者をして津液を竭せしめただけで留毒は去
 るてはならぬ。ただ巴豆は性の熱なるもの、から寒積以外には輕く用
 皆下藥である。ただ巴豆は平なるものは郁李仁の酸、桃花の苦である、いづれも
 羊血の鹹であり、下劑の平なるものは巴豆の辛であり、下劑の涼なるものは猪
 角の辛鹹であり、下劑の熱なるものは檳榔の辛、芒花の苦、辛、石蜜の甘、皂
 莢の消、牛、瓜蒂、苦瓠、牛膽、藍汁、羊蹄根、大戟、甘遂の苦、甘、朴消、
 牽牛、微寒なるものは猪膽の苦であり、下劑の大寒なるものは牙消の甘、大黃、
 劑の微寒なるものは猪膽の苦であり、下劑の辛、辛、杏仁の苦、甘などであり、下
 澤瀉の甘鹹、枳實の苦酸、膩粉の辛、澤漆の苦、辛、杏仁の苦、甘などであり、下
 草の藥に割當つれば、下劑として寒なるものは戎鹽の鹹、犀角の酸、猪鹽、
 故に下すことが害になるかやうに謂はれるのである。この下法に就て本

月を建て正月とした時に書かれたものであらうと思はれる。
 いと思ふ。この文が立冬の日を以て始としてあるところを見るに、上古の子
 は如何にも素問經の文章の振に近しい。決して後世の醫の真似し能ふ所ではな
 るに、『腸鳴幽、勞極酒、髮仍自還』と云々といふ文字やこの五條の文
 に、白字本草に相傳ふ、神農より出づとあるが、今その中に引用されたものを見
 るのであるが、その意義の解釋は傳らなかつたのである。按ずるに楊慎の「
 時珍曰、これも素問の處物の意味であると思ふ。上古の雷公藥對に出て居
 ることとしたのである。
 は到底その真意を解し難いものであるが、藥學上の傳統の源流であるから裁す
 馬。錫曰、この五條は藥對の中に居る文であつて、意義甚だ深淵で俗に

石草	馬先蒿	積雪草	女苑	王孫	蜀羊泉
地榆	海藻	澤蘭	防己	牡丹	款冬花
營實	白薇	薇	狗脊	水萍	王瓜
酸漿	紫參	臺本	黃根	草薺	白朮
茅根	紫苑	紫草	淫羊藿	敗醬	白鮮皮
知母	貝母	白芷	玄參	黃芩	石龍內
芍藥	蠶實	瞿麥	當歸	秦艽	百合
苦參	此胡	乾薑	羌活	麻黃	通草
扁青	陽起石	理石	長石	葛根	楮樓
凝水石	雌黃	石硫黃	水銀	石膏	白青
雄黃					礞石
石蜜	蜂子	蜜腹香	牡蠣脂	白膠	阿膠
苦菜	龍骨				

中藥品一百二十種

雞頭實 女貞實 酸棗 槐實 石龍芻 地膚子 丹參 蒲黃 黃連 白芷 蒼朮 辛香 細辛 木香 女萎

胡蘆 薤白 乾漆 枸櫞 雲實 景天 飛廉 香蒲 石葶 黃芩 薺麥 石解 薯蕷 女萎

麻黃 藹藹實 蔓荊實 橘柚 王不留行 茵陳蒿 五味子 續斷 紫石英 薔薇實 巴戟天 薏苡仁 防葵

冬葵子 大棗 辛夷 栢實 牡桂 杜若 旋花 漏蘆 黃蘗 卷柏 赤芝 白英 澤瀉 麥門冬

苧實 菰薊 杜仲 茯苓 茵桂 沙參 蘭草 天名精 肉蓯蓉 天從實 黑芝 白蒿 遠志 獨活

白冬子 蓬蘽 桑上寄生 榆皮 松脂 徐長卿 蛇床子 蛇子 決明子 防風 蔓蕪 青芝 赤箭 龍膽 車前子

大附子^{だいぶし}
黃連^{わうれん}
白朮^{びやくじく}
烏賊骨^{いさつこつ}
雞雄^{けいゆう}
牡蠣^{そがい}
水蘊^{すいゆん}
杏仁^{あんご}
五加皮^{ごかひ}
山茱萸^{さんしゆよ}
桑根白皮^{そうこんぱくひ}

四八八種陳藏器の餘、二種唐本の餘。

一七種新定(已上は宋の舊本草にて定めたものゝあつてある)

一八九種有未用、八十種新補。

一三十三種今附せるもの。(開寶本草に附せるものゝあつてある)

一四十四種唐本先に附せるもの。

一八十二種名醫別錄(墨字)

二百六十六種神農本草(白字)

新舊藥合はせて一千八十二種

要なきことを知らしめんが爲である。

存する所以でもあり、又三品の混亂した状態を示して、必ずしも古の泥ぬの

李時珍しは目録する必要もないのであるが、特に録したの古の蹟あとを

宋本草舊目錄

石馬陸

張地雀

張望樗

魔衣斑

貝鼠姑

水蛭

本草綱目第二卷終

圖經外類一百種

有名未用 一 九百九十四種

菜部 上品三十三種 中品三十一種 下品二十二種

米穀部 上品七種 中品三十三種 下品十八種

果部 三十三種

鱈魚部 上品五十七種 中品五十六種 下品八十一種

禽部 三十五種

獸部 上品二十種 中品一十七種 下品二十二種

人部 三十二種

木部 上品七十三種 中品九十九種 下品九十九種

十種 二種 一百五十五種 下品

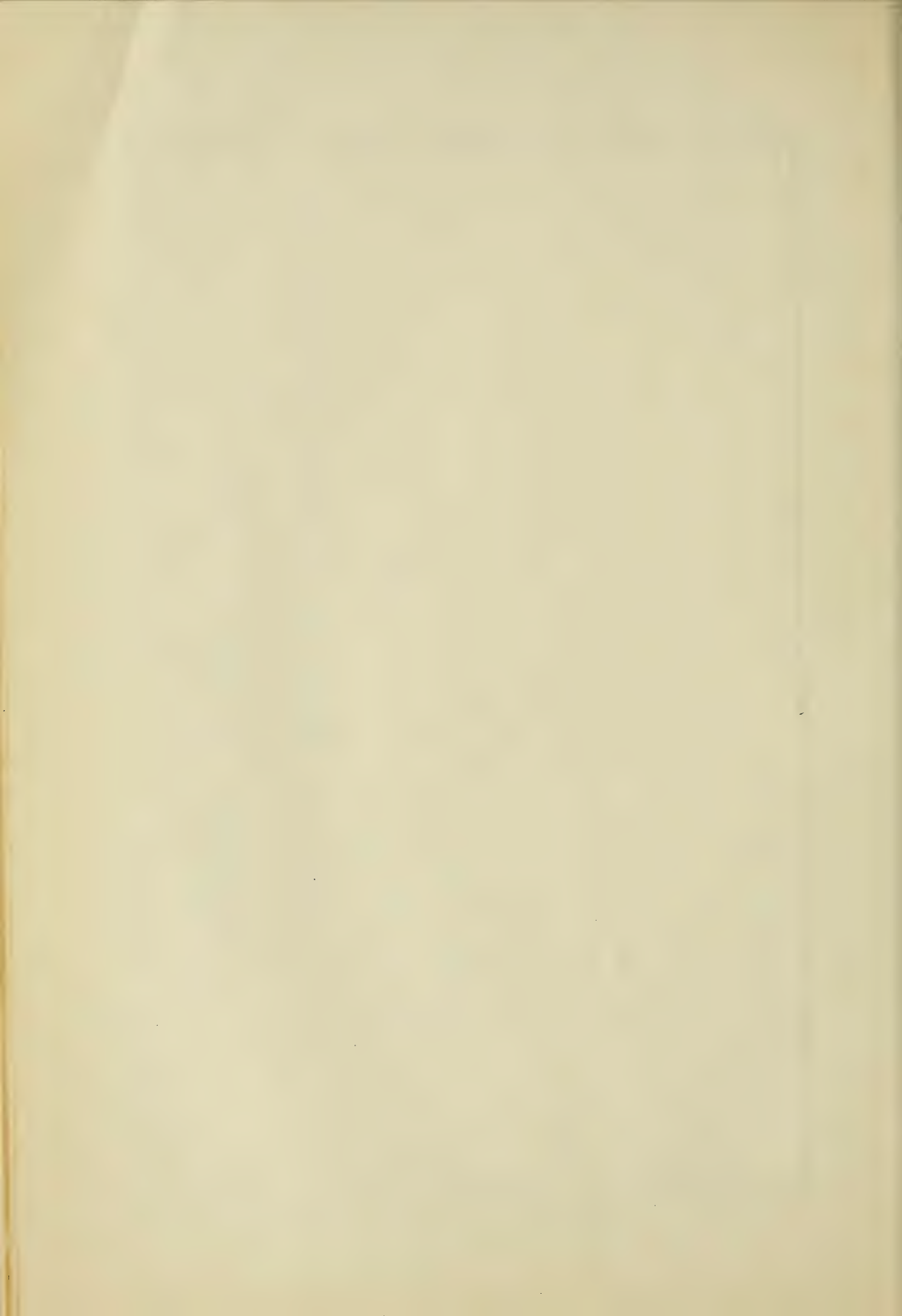
草部 上品八十七種 中品三十三種 上六十三種 中六十七種 下六十三種

玉石部 上品三十三種 中品八十七種 下品九十九種

一 白種^{白種}圖^{白種}類^{白種}外^{白種}類^{白種} (已上)は皆唐懷微が收補したものである

一 十三種海藥の餘、入種食療の餘。

本草綱目序例原文



引經報使

五臟五味補瀉

五臟虛實標本用藥式

五運六淫用藥式

五臟六腑用藥氣味補瀉

升降浮沉

四時藥例

五味宜忌

標本陰陽

十劑

氣味陰陽

宋藥六氣歲物

七方

神農本草經名例

陶氏別錄合藥分劑法則

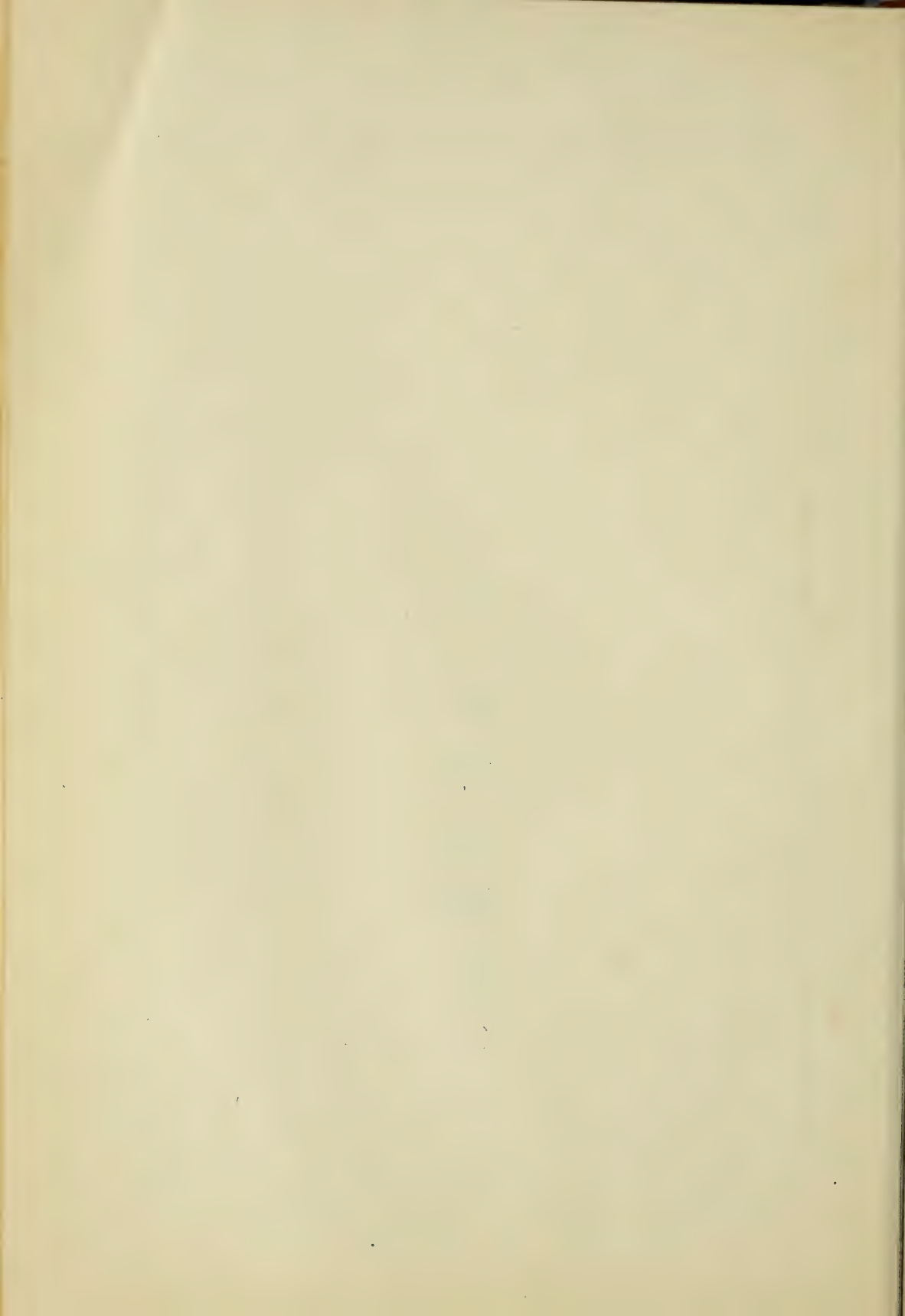
宋集諸家本草藥品總數

引據古今經史百家書目

歷代諸家本草

引據古今醫家書目

本草綱目序例目錄第一卷上



藥三百六十六時珍曰五神農本草謂之藥分三品錄凡七卷百石草木性種之應周天論病之數次分玉石復增草一藥品一藥品所用

賢疾乃知本草而和之又增其品焉韓保昇曰藥有知石草木性種之應周天論病之數次分玉石復增草一藥品一藥品所用

衆作益衆南張華云世雖言華神農等以梁百七錄之滋神農本草者經三卷傳神農所託京師而見經見漢書藝文志亦錄方爲漢平帝紀云萬始以然

也于按此唐李時珍曰本草神農本草者經三卷傳神農所託京師而見經見漢書藝文志亦錄方爲漢平帝紀云萬始以然

神農本草經下通錫曰舊本草神農本草者經三卷傳神農所託京師而見經見漢書藝文志亦錄方爲漢平帝紀云萬始以然

歷代諸家本草

序例上

日本理學博士白井光太郎閣
明新陽李時珍東璧父編輯

本草綱目序例第一卷上

李氏藥錄

少行保昇

曰其書散見吳氏陶氏農本草中頗有發明
劉李當之華佗弟子修神農本草三卷而世

吳氏本草

農黃帝岐
保昇曰

相桐君雷公扁鵲佗李氏所一卷時珍曰其書分傳

雷公炮炙論

述藥凡

三劉種爲上雷戲中下三卷其黃帝性

炮臺公署內之守國古文亦占實別是一家多本土重加定

晏先生名其封

序制論述

右論六卷蓋丹石家書也
理亦甚幽玄錄于後乾寧

唐本草

中廣日庫

右監門長史蘇恭加李勣等

陶鑄修定帝所
復命註神農大
尉趙經國長孫
七卷世謂之英
二公與本唐詳
定有

卷七 經一 增

三十五種分

卷九
爲世謂之毒木新人獸蟲魚所果

雖明亦多誤禮部郎中
穀有名未用十一部凡

志約專曰錄一卷別爲藥圖二十五

幸陽以播物

所冀之保

曰養命之宜中以外盡年熱穴棲

飲食物之情蓋範金採木

欲之道方滋而五味或爽時味甘

救止漸固

月期於天

折臂炎腫紀物識藥石之功

瑞名官窮診候之術草木

得其性鬼神無所遁情剝

李華張吳振

美聲於後

量秦政煨燔茲經不預永嘉

我亂斯道尙存梁弘景雅好

攝生研藥術以爲本草經者神

思

十

神功萬世傳

蘇軾

醫子來不來狂狂了可多一可事

今不傳
中藥物

海藥本草
即海藥本草也凡藥譜二卷唐人李珣撰所入名氏雜記南方藥物所產藥郡亦頗詳明又鄰度有胡本本草七卷時珍曰胡此

何從敗用幽羅亦花
從敗用幽羅亦花

搜羅幽羅亦花
何從敗用幽羅亦花

必效方之義補此書有誤

食療本草
梁人唐武后時舉進士果撰張鳳閣又補其出入不足者八種并舊二卷宗史用固辭凡三卷九十四時珍曰

食錄千金方枕中書攝生

千金食治
時珍曰

[illegible]

嘉祐補註本草

藥合九記而八十種又并目錄二義按今定刊卷廣願天詳下明傳以行焉攷文記之者爲今義亦詳明以行新舊

印突英玉骨之陶又之而乃白說以類收下其改誤彼功用則爲之然註之而水哉亦命歷爲年七卷又內國傳刊爲定本字平唐有別加參得舊藥註其餘註其百味互缺註爲二十一卷大本經渭水功則置

本草綱目序例上
蒙我大明劉純能宗立傳滋授胡可卿取及藥性賦以授初學記便重

食者分爲八門凡卷八海寧吳瑞取元文宗時人切

補遺各卷一氏

湯液本草
張仲景曰無已張二卷元李東垣之書間附已好古撰爲此集而爲此字著湯液大藏東垣高弟元戎卷十者取證略例及

書及試方皆知其難推明爲此書世經人惑于脈訣及病論著醫治乃發明其脈元氣陰火飲食勞倦經絡不足辨惑三卷脾

綱論三要卷三推明爲此書世經人惑于脈訣及病論著醫治乃發明其脈元氣陰火飲食勞倦經絡不足辨惑三卷脾

胃論三要卷三推明爲此書世經人惑于脈訣及病論著醫治乃發明其脈元氣陰火飲食勞倦經絡不足辨惑三卷脾

古諸書多足于後人依首以附故難不他

垣證用藥之法立爲主治百品心法要旨謂之珍珠囊大宜保命集四卷一活法而後人翻誤作河間以謂素所著東

潔古珍珠囊天入幽微曰時珍方新病不相能自成家法辨藥性之氣味陰陽厚薄升降浮沈補瀉六氣岐黃秘奧參悟

之下分各藥

東垣丹溪多時珍曰宋濂政中尊信之通官醫直郎憲宗蘭花為蘭草卷丹註及百經是誤也書及序凡例三卷平引辨證發明良

本藥衍義時珍曰宋

日華諸家本草性味華實史國初實中言明功甚悉凡氏但云日華子大序集諸家姓出東萊日華子蓋姓大溫

本草別說謂之別說時珍曰宋

故又謂之政和正刊政和正刊

廷收未盡附名收大觀者附草孟詵曰宋徽宗大觀二年遺蜀醫唐慎微取種附嘉祐補註本草及增五種圖經本草合為一灸及書唐食療本草陳藏器

證類本草

而唐慎微曰時珍居多時珍景弘引唐除舊本草外凡二百七十八家四家

引據古今醫家書目

千四百六十八種

本草綱目序例上卷一

本草綱目序例上卷一

本草綱目序例上卷一

本草綱目序例上卷一

本草綱目序例上卷一

本草綱目序例上卷一

斗門方

孟詵必効方

姚僧垣集驗方

崔元亮海上集驗方

孫兆訣

謝士泰刪纂方

葛洪肘後百一方

乘開集効方

崔行功纂要方

李絳兵部手集方

延年秘錄

劉禹錫傳信方

許孝宗篋中方

平堯卿傷寒類要

孫氏集驗方

深師腳氣論師即梅

梅師集驗方

胡洽居士百病方

服氣精義方

陳延之小品方

劉涓子遺方

御藥院方

柳州救三死方

王紹顏續傳信方

錢氏篋中方

篋中秘寶方

孫眞人千金髓方
孫眞人枕中記
孫眞人食忌
孫眞人東陽方
華佗中藏經
秦承祖方
徐文伯方
支大醫方
華佗方卷十
扁鵲方卷三
太倉公方
天寶單方圖
黃帝素問註王冰

葉天師枕中記
席延賞方
孫眞人千金翼方
孫眞人千金備急方
姚和衆延齡至寶方
王壽外臺祕要方
初虞世古錄驗方
張仲卿隨身備急方
張仲卿寒傷論已成註無
張仲景金匱玉函方
宋太宗太平聖惠方
唐德宗貞元廣利方
唐玄宗開元廣濟方

宋俠經心錄

魏武帝食制

神農食忌

神仙服食經

彭祖服食經

巢元方病原論

王叔和脈經

張仲景金匱要略

宋徽宗聖濟經

劉克用藥性賦

劉氏病機賦

皇甫謐甲乙經

秦越人難經

聖濟總錄

褚氏遺書

李瀛醫史

張杲醫說

黃帝書

靈樞經

王冰玄密

賈相公牛經

賈誠馬經係已舊上本八所十四家

嵩陽子威靈仙傳

曹救方

神仙服食方

太清草木方	李翱何首烏傳
小兒宮氣方	萬全方
咎殷產寶	譚小兒方
張傑子母祕錄	楊氏產乳集驗方
咎殷食醫心鏡	必用方
蘇沈良方 <small>存東坡</small>	十全博救方
陳抃經方	陳氏經後方
崔知梯勞瘵方	近効方
救急方	張路大効方
王荃博濟方	沈存中靈苑方
周應簡要濟衆方	塞上方
勝金方	文潞公藥準
章甫獨行方	王珉傷寒身驗方

楊子建萬全護命方

嚴用和濟生方

陳言三因方

滑伯仁櫻寧心要

丹溪活套

楊珣丹溪心法

盧和丹溪纂要

丹溪格致餘論

海藏陰證發明

海藏醫壘元戎

東垣試効方

東垣脾胃論

李東垣醫學發明

繼洪濟寧方

王易簡方
碩王

孫真人千金月令方

惠民和劑局方

程充丹溪心法

方廣丹溪心法附餘

丹溪醫案

丹溪局方發揮

羅天益衛生寶鑑

海藏此事難知

王海藏醫家大法

東垣蘭室秘藏

東垣辨惑論

楊天惠附子傳

醫鑑信豐

張潔古醫學啟源

月池艾葉傳

胡演升錄丹藥祕訣

醫餘錄

陸氏證治本草

許洪本草指南

戴起宗脈訣刊誤

玄明粉方

劉河間病式

婁居中食治通說

李氏食經

潔古家珍

活法機要

葛蒲傳

張子和儒事觀

名醫錄

月池人參傳聞李言

土宿真君造化指南

黃氏本草權度

吳猛服訣

劉河間宣明方

太清靈寶方

飲膳正要

王執中資生經

吳球活人心統

醫方大成

陳日華經方

饒玄子法天生意

周良采醫方選要

法生堂經方

臚仙乾秘鑑

王璽醫林集要

陸氏積德堂經方

劉純玉機微義

醫學指南

孫氏仁存堂經方

戴原禮證治要訣

方賢奇効良方

王仲勉經方

梁氏總要

楊拱方摘聖要

劉松石保壽堂經方

臚仙乾坤生意

饒氏醫林正宗

德生堂經方

劉純醫小學

醫學切問

楊氏順真堂經方

戴原禮金匱鉤玄

醫學綱目

葉氏醫學統旨

蔣謙齋瑞竹堂經驗方

周憲王袖珍方

虞樞醫學正傳

初虞世養生必用方

王方慶嶺南方

真西山衛生壽

孫用和傳家祕寶方

許學士本事方微許叔

胡淡衛生易簡方

楊氏家藏方淡楊

余居士選奇方

是齋迷指方脫王

葛表積善堂經驗方

王履澗集

傅滋醫學集成

李仲南永類方

周憲王普濟方卷七

嶺南衛生方

趙士衍九箴衛生方

王隱居養生主論

雞峰備急方銳張

朱端章衛生家寶方

濟生拔萃方敬杜思

黎居士易簡方

楊士瀛仁齋直指方

摘玄方

邵真人青囊雜纂

李樓怪證奇方

孟氏誚誚方

何子元群書續抄

海上名方

談野翁試驗方

王氏奇方

溫隱居海上方

徐氏家傳方

白飛霞韓氏醫通

急救良方

張氏經驗方

夏子益奇疾方

生編

張氏灣江切要

十便良方

包會應驗方

丘瓊山群書日抄

海上仙方

鄭氏家傳方

張三丰仙傳方

白飛霞方外奇方

龔氏經驗方

王英杏林摘要

救急易方

唐瑤經驗方
居家必用驗方
朱端亨集驗方
趙氏經驗方
坦仙皆効方
孫一松試驗方
蘭氏經驗方
瀕湖集簡方
試効錄驗方
戴古渝經驗方
趙氏儒醫集要
閻孝忠集効方
劉長春經驗方

鄧肇衛生雜興
經驗良方
楊氏經驗方
危氏得効方
董炳集驗方
阮氏經驗方
楊起簡便方
經驗濟世方
龔氏經驗方
瀕湖醫案
孫天仁集効方
禹誨師經驗方
吳球諸證辨疑

胡氏濟陰方

熊氏婦人良方補遺

郭稽中婦人方

陳自明婦人良方

李知先活人書括

陶華傷寒六書

劉河間傷寒直格

成無己傷寒明理論

趙嗣真傷寒論

吳綬傷寒經要

龐安時傷寒總病論

韓祇和傷寒書

朱肱南陽活人書

上清紫庭追勞方

蘇適玄感傳尸論

葛可久十藥神書

三十二黃方

通妙真人方

芝隱方

鄧師甫方

嚴月軒方

金匱名方

楊堯輔方

唐仲舉方

錦囊秘覽

蕭靜觀方

濟生祕覽
 攝生妙用方
 王氏究源方
 彭用光體仁彙編
 神醫普救方
 保慶集
 何大英發明證治
 吳曼扶壽精方
 陳直奉親養老書
 王璆百選方
 奚囊備急方
 端効方
 趙宜真濟急仙方

王氏集
 艾元英如宜方
 王節齋明方
 傳信適用方
 楊炎南行方
 保生餘錄
 王氏醫方捷徑
 李延飛三元延壽書
 世醫通變要法
 臞仙壽域神方
 史堪指南方
 王永輔惠濟方
 纂要奇方

喉口齒方家珍時上已所引十七者六

宣明眼科

倪惟德原機啓微集

眼科龍木論

李迅癰疽方論

薛己外科經方驗方

齊德之外科精義

薛己外科心法

張清川痘疹便覽

李實痘疹淵源

李言聞痘疹證治

魏壹博愛心鑑

眼科針鉤方

明目經方

飛鴻集

周良宋外科集驗方

楊清叟外科秘傳

薛己外科發揮

外科通玄論

陳自明外科精要

聞人規痘疹論十八

痘疹要訣

高武痘疹管見正宗名

王日新小兒方

姚和衆子祕訣

鮑氏小兒方

湯衡嬰孩寶鑑

活幼全書

阮氏小兒方

寇衡全幼心鑑

徐宣袖珍小兒方

陳文中小兒方

劉防幼新書

婦人經方

便產須知

婦人明理論

小兒宮氣集

全嬰方

湯衡嬰孩妙訣

衛生總論
大即全保幼

鄭氏小兒方

魯伯嗣嬰童百問

濱山活幼口議

張煥小兒方

曾世榮活幼心書

幼科類萃

錢乙小兒直訣

一難實鑑

婦人千金家藏方

干寶搜神記

紫靈元君傳

三茅真君傳

葛洪神仙傳

唐武后別傳

南岳魏夫人傳

柳宗元傳

梁四公子記

李孝伯傳

李司封傳

李實臣傳

何君謨傳

壺居士傳

崔魏公傳

漢武故事

漢武內傳

蜀王本紀

魯定公傳

穆天子傳

秦穆公傳

歐陽修唐書

王瓘軒轅本紀

李延壽北史

魏徵隋書

沈約宋書

蕭顯明梁史

陳壽三國志

班固漢書

戰國策

呂氏春秋

楊倞注荀子

張湛注列子

禮記注疏鄭玄

春秋左傳注疏杜預

爾雅注疏李璣郭熙

易經注疏王弼

十一時
家珍
時曰

除本外凡四百四十一家
凡用景唐宋已下凡四百四十一家

王隱晉書

范曄後漢書

司馬遷史記

葛洪抱朴子

淮南子鴻烈子解

郭象注莊子

周禮注疏

孔家語

尚書注疏孔安

詩經注疏孔穎達

引據古今經史百家書目

異魚圖

太清草木記

東華真人養石法

斗門經

軒轅述寶藏論

王氏番禺記

南城志

朱應扶南記

孟瑄嶺南異物志

太原地志

楊孚異物志

萬震南州異物志

嵩山記

太清石壁記

神仙芝草經

房室圖

獨孤酒丹房鑑源

青霞子丹臺錄

白澤圖

五溪記

張氏燕吳行紀

永嘉記

劉惔嶺表錄

房千里南方異物志

南蠻記

裴淵廣州記

顧微廣州記
宗懷荆楚歲時記
郭璞注山海經
東方朔神異經
張華博物志
異類
王建平典術
段成式酉陽雜俎
太平廣記
劉敬叔異苑
郭憲洞冥記
玄中記
劉向列仙傳

徐表南州記
華山記
何晏九州記
盛弘之荊州記
魏略
何承天纂文
杜祐通典
異術
吳均齊諧記
王子年拾遺記
樂史廣異記
洞微志
徐鉉神錄

- | | |
|---------|--------|
| 陳子昂集 | 陸龜蒙詩 |
| 宋王微讚 | 庾肩吾集 |
| 本事詩 | 江淹集 |
| 李善注文選 | 張協賦 |
| 宋齊丘化書 | 楚辭 |
| 顏氏家訓 | 范子計然 |
| 黃休復荂亭客話 | 金光明經 |
| 韓終采藥詩 | 王充論衡 |
| 龍魚河圖 | 景煥野人閑話 |
| 沈括夢溪筆談 | 耳珠先生訣 |
| 陶隱居登真隱訣 | 遁甲書 |
| 廣五行記 | 歐陽公歸田錄 |
| 孫光憲北夢瑣言 | 左慈祕訣 |

頤陽子修眞秘訣

宣政錄

開元實遺事

神仙秘旨

李昉該聞錄

陸羽茶經

八帝玄變經

崔豹古今注

汜勝之種植書

三洞要錄

四時纂要

魏王花木志

靈芝瑞草經

五行書

鄭氏明皇雜錄

修真秘旨

楊億談苑

張鷟朝野僉載

神仙感應篇

陸機詩義疏

丁謂天香傳

八帝聖化經

郭義恭廣志

賈思勰齊民要術

夏禹神仙經

狐剛子鍊粉圖

范成大梅譜

范成大菊譜

劉貢父芍藥譜

饒寧物類相感志

張華感應類從志

歐陽修牡丹譜

蔡襄荔枝譜

蔡宗顏茶對

毛文錫茶譜

唐蒙博物志

李石續博物志

韓彥直橘譜

馬經

傅肱蟹譜

張世南質龜論

鍾毓果然賦

朱仲相貝經

龜經

黃省曾獸經

王元之蜂記

袁達禽蟲述

淮南公相鶴經

陸機鳥獸草木蟲魚疏

劉熙釋名

司馬光名苑

陸仰墀雅	包氏續韻府群玉	陰氏韻府群玉	卑雅廣義
羅願爾雅翼	洪武正韻	倉頡解詁	楊雄方言
孔鮒小爾雅	丁度集韻	黃公武古韻會	曹憲博雅
張揖廣雅	魏子才六書精蘊	孫頤唐韻	孫炎爾雅正義
	王安石字說	趙古則六書本義	
	周欽說文解字	周弼說文原	
	許慎說文解字	呂忱字林	

梁簡文帝勸醫文已家上舊本一百五十五引者一

環氏吳紀

薛氏荆揚異物志

法盛晉中興書

三輔故事

陳祈暢異物志

左氏國語

陸禮續水經

沈鑒臨海水土記

逸周書

祝穆方輿要覽

寶貨辨疑

大明一統志

昇玄子伏汞圖

萬震涼州異物志

後魏書

張勃吳錄

曹叔雅異物志

謝承續漢書

三輔黃圖

臨海異物志

汲冢竹書

酈道元注水經

稽含南方草木狀

太平寰宇記

章述兩京記

桓譚鹽鐵論

張泉玉洞要訣	李德裕黃治論
杜李陽雲林石譜	九鼎神丹祕訣
蘇氏墨譜	張杲丹砂祕訣
洛陽名園記	蘇氏硯譜
蘇易簡紙譜	蘇氏筆譜
洪駒父香譜	周敘陽花木記
李德裕平泉草木記	僧贊寧竹譜
戴凱之竹譜	葉庭珪香譜
王西樓野菜譜	穆修靖靈芝記
天玄物簿	陳仁玉菌譜
陳翥桐譜	沈立海棠譜
史正志菊譜	王佐格古論
楊泉物理論	劉蒙泉菊譜

永州記

鄭樵通志

歐陽詢藝文類聚

周密浩然齋日鈔

周密癸辛雜志

荆南記

西涼記

祝穆事文類聚

古今事類彙

周密齊東野語

葛洪西京雜記

太和山志

茅山記

白孔六帖

馬端臨文獻通攷

楚國先賢傳

李肇國史補

華陽國志

蜀地志

集事淵海

冊府元龜

江南異聞錄

陳彭年江南別錄

永昌志

袁滋雲南記

太平御覽

大明會典	朱輔山溪蠻叢笑
顧璣海槎錄	劉郁出使西域記
周達觀真臘記	吾學編
元史	費信星槎勝覽
野史	宋祁劍南方物贊
任豫益州記	遼史
宋史	逸史
類編	東方朔十洲記
東方朔林邑記	南唐書
五代史	世本
劉義慶世說	范成大桂海虞衡志
劉欣期交州記	唐會要
南齊書	東觀祕記

河圖括地象

孫柔之瑞應圖記

葉夢得水雲錄

洪邁松漠紀聞

荀伯子臨川記

河圖玉版

杜臺卿玉燭寶典

劉績霏雪錄

楊慎丹鉛錄

方國志

鄧顯明南康記

顏師古刊謬正俗

服虔通俗文

方鎮年錄

方勺泊宅編

襄沔記

嵩高記

班固白虎通

應劭風俗通

蘇鶚杜陽編

杜寶大業拾遺錄

周處風土記

金門記

伏候中華古今注

高氏事物紀原

松窓雜記

鮮于樞鉤玄
廉州記
洪邁夷堅志
毛直方詩學大成
郡國志
文苑英華
徐氏總龜對類
南郡記
賈似道悅生隨錄
陶九成輟耕錄
空法眞羅浮山疏
陶九成說郭
周密志雅堂雜鈔

辛氏三秦記
淮南萬畢術
蘇子仇池筆記
鄴中記
錦繡花谷
邵桂子甕天語
伏深齊地記
徐堅初學記
葉盛水東日記
田汝成西湖志
虞世南北堂書鈔
羅大經鶴林玉露
南裔記

開闢事	宜	錄異	記
李元獨異志	程氏遺書	林洪山家清供	朱子大全
陳朝卓異記	洞天保生錄	神異記	通鑑綱目
五經大全	起居雜記	薛用弱集異記	性理大全
俞宗本種樹書	祖冲之述異記	任昉述異記	南宮從晦樓神書
皇極經世書	臚仙神隱書	劉伯溫多能鄙事	玉策記

劉向洪範五行傳

居必用

胡嶠陷虜記

周易通卦驗

王旻山居錄

張師正游錄

禮斗威儀

月令通纂

張氏業行程記

春秋元命包

夏小正

王安貧武陵記

春秋題辭

隋煬帝開河記

京房易占

山居四要

段公路北戶錄

孝經援神契

王楨農書

金幼孜北征錄

春秋考異郵

崔寔四時月令

趙蔡行營雜記

春秋運斗樞

許善心符瑞記

河

魏伯陽參同契	洪邁容齋隨筆
章俊卿山堂考索	彭乘墨客揮犀
愛竹談藪	謝道人天空經
吐納經	王浚川雅述
蔡邕獨斷	麗元英談藪
孫升談圃	演禽書
列星圖	梁元帝金樓子
葉世傑草木子	韋航細談
陳霆兩山墨談	乾象占
雷書	王叔炎穀子
盧誕祭法	景煥牧豎閑談
王清明揮麈餘話	五雷經
地鏡圖	杜恕篤論

劉向說苑	姚福庚巳編
琅邪漫鈔	魯至剛俊靈機要
太清外術	韓詩外傳
賈誼新書	西樵野記
陶隱居雜錄	太上玄科
楊氏洛陽伽藍記	董子
晏子春秋	三洞珠囊
奚囊雜纂	陶氏續搜神記
祖台之志怪	墨子
管子	萬寶事山
事文山	異聞記
戴祚甄異傳	鶻冠子
老子	陳元觀事林廣記

造化權輿

翰苑叢記

楞嚴經

儲詠杖疑說

李氏什學類鈔

涅槃經

嵇康養生論

熊太古翼越集

劉根別傳

魯褒錢神論

俞琰席上腐談

修真指南

左思三都賦

解頤新語

變化論

文指歸

周必大陰德錄

圓覺經

王綱通微集

王濟日詢手記

法華經

蔡母錢神論

胡仔漁隱叢話

周顒仙碑

葛洪遐觀賦

姚亮西溪叢話

劉禹錫嘉話錄

鶴頂新書

類說

趙與時賓退錄

李峯太白經注

何孟春餘冬錄

陸文量菽園雜記

朱真人靈驗篇

文系

遜齋閑覽

許真君書

百川學海

蔡條鐵圍山叢話

造化指南

吳淑事類賦

葉石林避暑錄

八草靈變篇

黃震溪日鈔

王性之揮塵錄

太玄變經

朱子離騷辨證

顧文薦負喧錄

陶弘景真誥

翰墨全書

侯延賞退齋閑覽

蕭了真金丹大成

白樂天長慶集

王荊公臨川集

梅堯臣詩集

方孝孺志齋集

宋景濂潛溪集

錢起詩集

岑參詩集

王元之集

宋徽宗詩

楊維禎圭集

吳萊淵集

王維詩集

杜子美集

黃山谷集

東坡詩集

吳澄草廬集

畢氏幕府燕閑錄

李太白集

山谷刀筆

何遠春渚紀聞

張世南游宦紀聞

高氏蓼花閑錄

宛委錄

蘇黃手簡

邢坦齋筆衡

異說

白	獺	三蘇文集
歐陽公文集	靈仙錄	康譽之昨夢錄
劉跂暇日記	柳子厚文集	晁以道客語
龍江錄	治聞說	曹子建集
韓文公集	唐小	海錄碎事
林氏小說	魏文帝集	魏武帝集
瑣碎錄	江隣幾雜志	劉義慶幽明錄
魏文帝集	潘墳格記室	
張耒明道雜志		
百感錄		
仇遠碑史		
趙潛養河漫筆		
自然論		

蘇恭唐本草一百一十種
雷敫炮炙論一種
獸部
介部二種
蟲部一種
介部二種
木部二種
鱗部一種
服部一種

吳普本草一種
草部

李當之藥錄一種
草部

陶弘景名醫別錄二百三十六種
除併入部五種
鱗部十種
木部九種
外種二種
草部三十種
三服部三十三種
器部十種
三殺部三十三種
蟲部二種
介部二種
金部七種
果部一種

神農本草經三百四十七種
除併入部五種
鱗部十種
蟲部七種
介部一種
禽部一種
獸部八種
獸部一種
鱗部一種
蟲部一種
介部一種
金部一種
果部一種

錦囊詩對家珍引考十

宋集諸家本草藥品總數

古今詩話

葛氏韻語陽秋

張宛丘集

焦希程集

左貴嬪集

陸放翁集

楊升菴集

李紳文集

楊萬里誠齋集

何仲默集

劉禹錫集

邵堯夫集

吳玉崑山小稿

蔡氏詩話

方虛谷集

王梅溪集

陳正齋集

唐荆川集

李義山集

范成大石湖集

張東海集

張籍詩集

周必大集

陳白沙集

元稹長慶集

陳士良食性本草二種	果部一種	陳士良食性本草二種	果部一種
蕭炳四聲本草二種	服器部一種	蕭炳四聲本草二種	服器部一種
李珣海藥本草一十四種	木部四種	李珣海藥本草一十四種	木部四種
十金藏器本草一十一種	八部一種	十金藏器本草一十一種	八部一種
孟詵食療本草一十七種	果部二種	孟詵食療本草一十七種	果部二種
孫思邈千金食治二種	菜部一種	孫思邈千金食治二種	菜部一種
甄權藥性本草四種	服器部一種	甄權藥性本草四種	服器部一種
八傷部一種	八部一種	八傷部一種	八部一種
八獸部一種	獸部一種	八獸部一種	獸部一種
金石部一種	金部一種	金石部一種	金部一種
鱗部八種	鱗部八種	鱗部八種	鱗部八種
火部一種	火部一種	火部一種	火部一種
水部三十一種	水部三十一種	水部三十一種	水部三十一種
果部六十二種	果部六十二種	果部六十二種	果部六十二種
土部二十二種	土部二十二種	土部二十二種	土部二十二種
木部三十八種	木部三十八種	木部三十八種	木部三十八種

[illegible]

不減同生精粗之不安凡諸生動下地黃生骨精至元吳黃水藥凡去枝以蛇心除之必藥水類須其擇物至微其宜用者至則不慮其分屬當並好惡建三錢歸當
扶發昏元黃地生骨精至元吳黃水藥凡去枝以蛇心除之必藥水類須其擇物至微其宜用者至則不慮其分屬當並好惡建三錢歸當
時發昏元黃地生骨精至元吳黃水藥凡去枝以蛇心除之必藥水類須其擇物至微其宜用者至則不慮其分屬當並好惡建三錢歸當
要夏精至元吳黃水藥凡去枝以蛇心除之必藥水類須其擇物至微其宜用者至則不慮其分屬當並好惡建三錢歸當
生夏精至元吳黃水藥凡去枝以蛇心除之必藥水類須其擇物至微其宜用者至則不慮其分屬當並好惡建三錢歸當
熱曰湯凡藥水類須其擇物至微其宜用者至則不慮其分屬當並好惡建三錢歸當
一膠于桑枝以蛇心除之必藥水類須其擇物至微其宜用者至則不慮其分屬當並好惡建三錢歸當
習歸錢塘三錢歸當並好惡建三錢歸當
江東以來小諸藥所生多皆近有境界力性理已前當言及本邦國不益不通名則後人所增補
土地所出傷陳新並各有法

常不可不慎也

乃大關非比尋

魚香枇杷葉難養生夏為冬飲腳索臘作虎骨為肉脂混草仁充竭豆和龍腦香代巧詐百般廣受其害致殺人膠養雞子及藥

五

各千之乘同之惟其心之同不勝亦異以欲戒慎一藥通治衆人之病貴少可得乎別論有士久虛實下地高不同物性剛柔食居之反求奇益不益以藥爲用則愈非率主對矣近野光祿亦道藥乃服食蛇之下細人碎經用者田試驗之非元微者胡良承其割時未端緒以收之類例大曰弘景藥之其始終以止本病爲性根假名配中風證不可亦有一有十餘以瘳瘳于求其有隱有勝七傷虛乏疲瘦女子帶下崩中血閉陰蝕蟲蛇毒所傷此大略宗兆其間變動枝葉各宜依

二六

四六

熬黃搗合如膏指撚切莫結視泚乃稍入散中研散以輕疎篩度之再合搗勻

凡篩丸散用重密絹各篩畢更合于臼中搗數百遍色理和同乃佳也巴豆杏仁胡椒諸膏膩藥皆先

須治用青石亦佳磨石礪者銅器其並宜如法丸散

修金性刀金刀金性銅刀銅刀金性鐵刀鐵刀金性惟宜惟宜傷受傷受肝腎肝腎氣木氣木藥及藥及凡發凡發生之生之木木時珍曰

之之既燥停冷搗之

凡丸散藥亦先切細燥乃搗之有各搗者合搗者並隨方其潤藥如天門冬地黃輩皆先增分

凡方云蜜一斤者有七合豬膏一斤者有一升二合也

二兩為正

凡方用桂一尺者削去皮重半兩為正甘草一尺者二兩為正云某某草一一束者三兩為正云把者

可秤准者取平升為正

為正菴闔子一升四兩為正蛇牀子一升三兩半為正地膚子一升四兩為正其子各有虛實輕重不

凡方云夏一升者洗畢杵五兩為正蜀椒一升三兩為正吳茱萸一升五兩為正鬼絲子一升九兩

兩准一為正

以一枚兩枳實若干枚者去穰畢以一分准二枚橘皮一分准三枚棗大小三枚准一兩乾薑一升累者

凡方云巴豆若干枚者粒有小當去心皮粹之以一分准十六枚附子烏頭若干枚者去皮畢以半

須治中湯入參朮乾薑甘草四物共一丸如楊梅許服兩水八升既不去乃曰每服一升日三服非藥之用以知景仲人

子者以二大豆准之如彈丸及雞子黃者以四十梃子准之宗義曰今人仲景方多不效者何也梃者逆也知梃

即今青斑豆也以二大麻准之如小豆者今赤小豆也三大麻准之如大麻子然云如大麻子准三細細也如胡豆者

凡丸藥云如細細者即胡麻也必扁扁略相稱爾黍粟亦然云如大麻子准三細細也如胡豆者

也多言咬咀咬咀此義也宗義曰咬咀之也宗義曰咬咀古制也咬咀有鐵刃含吹之細如末藥有易碎難碎多末少末今皆細切如咀

凡湯酒膏藥咬咀者謂咀之如大豆又吹去末藥有易碎難碎多末少末今皆細切如咀

方作上徑一寸下徑六分深八分內散藥勿按抑之正爾微動令平爾時珍曰古之圭為二升十

藥以升合升合分者謂藥有虛實輕重不得用斤兩則以升平之十撮為一十勺為一合時珍曰古之圭為二升十

化濕毒不生太陽司天為寒化在泉為鹹化熱毒不生治病者必明六化分五味所生五臟所宜乃為濕化在泉為甘化燥毒不生少陽司天為苦化寒毒不生陽明司天為燥化在泉為辛岐伯曰厥陰司天為風化在泉為酸化少陰不生少陰司天為熱化在泉為苦化寒毒不生太陰司天

宋藥分六氣歲物

勿用蜜只瀉入糖也

凡用蜜皆先大煎掠去其沫令微黃則丸藥經久不壞少火過並不得用也修合丸止得十二蜜用二兩足蜜用數火

意之本也

凡丸中用蠟皆炸投少蜜中攪調以和藥投以蜜下咽藥亦易散化如何得得到之藥中味若有力以毒藥反關又告之非用也若

香中拔等料數百遍沒藥等料數百遍並待膏成時投之黃丹胡粉密不須飛瓦炒雄雞黃龍須鍊數遍乃乳

令消散

雄黃朱砂麝香輩皆別擣如麝粉或時粉凡貼上癰風下疳濕諸病成珠不散以藥油中三日浸水浸三日去毒枯以細濾淨煎者煎成絲傾入胡

小方 易散其迅而下行也。王氏所謂肺近心者，宜有上方及在下方。正曰：「從上走下也。」徐心氣急，脾五肝能升，腎發一必位遠，則多其味治緩者不宜速分兩少，必大劑之數方。

分也中脘之分也
身半以下其氣三

[illegible]

小緩急者四制之法也故曰治有緩急方有大小緩急者乃七分七方之制也故奇偶複三方也夫

[illegible]

[illegible]

所能收也

[illegible]

蓋辛能潤能走氣能化液也或以爲燥物膠矣濕去則土燥非一物性燥也

[illegible]

七

氣味陰陽

見直錄炮炙炙列藥制方分爲上中下三卷有三百件名具陳于後
略陳藥餌之功能豈溺仙人之要術其制藥炮炙炙不能記年月哉欲審元由須看海集某某不量短
心痛欲死速覓延延胡以酒服之立愈散如斯百種是藥之功某某遇明時謬看醫理雖尋聖法難可窮微
肌浮甘皮酒服產後服甘皮酒服愈口瘡舌拆以根黃連含之立瘥腦痛欲亡鼻投末頭以鼻中消石
立
黃精以自然汁蜜丸服細細服神效如於柳木中蒸七知膠膠所起直至氣壅中乾黃汁中記精延年精蒸神
須煎蘆朴不食者并飲厚朴酒少味湯煎逆強筋健骨須是從膠丸服之可力倍二常味也末以黃汁中記精延年精蒸神
草等熟搗水五倍下之立止也久渴心煩宜投竹瀝除塊全仗消中研即作粉同砂消作末子側附陽虛瀉痢須假
服之飲調咳逆數數酒服熟雄天一錢炮過以酒定也遍體瘳風冷調生側附作末子側附陽虛瀉痢須假
夜煎竹木多服之小便者夜煎草一也血泛經過飲調瓜子仁搗瓜內

花而自正須加五葉者作未酒浸飲之共目騰者正脚生肉核根繫若根根有帶上繫之者取永不應永痛囊皺多

鼠之骨未骨作未折處生齒生者取如雄鼠故髮眉墮落塗生夏而立之髮墮者以髮生處立生眼五

雄齒生牙賴長齒生牙賴生齒生牙賴收下水中

草砂砂即用素火留金鼎水中生火非猾隨而莫能海生中不可救之用酒噴入立便成庚火立便成庚遇赤今呼為虎鬚其草名赤鬚

拒火須仗修天補呼石為如要形堅忘祇是背紫有紫背紫背紫背紫背紫背紫背

作塵飛欬見橘花似髓斷絃折劍遇鸞血而如初以折鸞血煉作膠不粘海竭江枯投游波是也而立是也泛令是也

子熟生足睡不眠立草常淡肉草常據弊算草常淡肉草常酒霑草常交草常鐵遇神砂如泥似粉石經是也化

石仰灰面止楚截指而似去甲聖石開盲明而如雲離日當歸止血破尾血同尾血

之毒象象又膽揮膽揮黏乃知藥有情異魚大膽之也却當榮無名無無名似異似異

五味真忌

則養形以生，生以精順，先食以氣，禁靈以形，受五味以藥，成以食，氣相反，則氣傷，溫補以食，味不精，則形不調。

和以之興

明色真曰王

補之以味明色聲也五藏者脾爲水之故肝氣和入以五味入鼻藏於心肺上使五色修明吾聲能影五味入口藏于腸胃味有所藏入以五氣地食入以五氣入氣入氣相神乃自生又曰形不足者溫之以氣精不足者以氣補之穀氣不足者以甘補之五臟者主色故氣精不足者入以味而補之

輕用爲哉

[illegible]

好古

可上階昇可

金木水火土生長化收藏下應之也氣味薄者輕清成象本乎天者地之陽溫者天之陽寒者天之陰

[illegible]

標本陰陽

寒熱之藥當從權用氣平而止有泄寒中陽之謂陰以藥久則陰具陽味不備陰火微不平而天之由故大寒竭而不舉陰劑五味無勝必有助勝若水曰絕必有陰一暴有陽之謂陰以藥久則陰具陽味不備陰火微不平而天之由故大

已則不舉氣勝必有助勝若水曰絕必有陰一暴有陽之謂陰以藥久則陰具陽味不備陰火微不平而天之由故大寒竭而不舉陰劑五味無勝必有助勝若水曰絕必有陰一暴有陽之謂陰以藥久則陰具陽味不備陰火微不平而天之由故大

五味偏勝

岐伯曰五味入胃各歸所喜酸入肝苦入心甘入脾辛入肺鹹入腎久而增氣物化之常

宮傷在五味也五過五走五傷本味伐其勝也即傷陰之勝也

五過 滿色變時曰五走五傷本味伐其勝也即傷陰之勝也
五傷 酸傷筋辛傷肝氣不傷骨痛脾氣絕乃傷肌肉過勝酸

苦食

升熟降是升降在物亦在人也

引之以酒則浮而上至顛頂此非窺天地之奧而達造化之權者不能至此物之中有根升梢降生李時珍曰酸鹹無升甘辛無降寒無浮熱無沈其性然也而升者引之以鹹寒則沈而直達下焦沈者味平者兼四氣四味甘平溫甘涼甘辛平微苦平之藥是也

味厚者沈苦寒鹹寒之藥是也

氣厚者浮甘熱辛熱之藥是也

氣薄者降甘寒甘涼淡寒酸溫酸平鹹平之藥是也

味薄者升甘平辛平微溫微苦平之藥是也

輕用哉本草不言淡味涼氣亦缺文也

鹹栗也其性舒其不同此鼓同如鼓成聲沃火成沸二物相合象在其間矣五味相制四氣相和其變可沈而使之浮須知載也辛散也而行之也橫甘發也而行之也上苦泄也而行之也下酸收也其性縮也佐使諸藥者也用藥者循此則生逆此則死縱令不死亦危困矣○王好古曰升使之降須知抑也厚者即助秋冬之降沉便是瀉春夏生長之藥也在人之身肺腎是矣淡味之藥滲即升泄即為降

厥陰在泉年寅風淫于內治以辛涼佐以苦以甘緩之以辛散之利也木溫而急惡以甘故以辛涼佐以苦隨之

太陽司天年戌寒淫所勝平以辛熱佐以甘以苦鹹瀉之○熱反勝之治以鹹冷佐以苦辛

辛寒佐以甘

陽明司天年酉燥淫所勝平以苦溫佐以辛酸以苦下宜補之以法以苦溫宜渴下必以辛○熱反勝之治以

○寒反勝之治以甘熱佐以苦辛

少陽司天年申火淫所勝平以酸冷佐以苦甘以酸收之以苦發之以酸復之心虛氣已散不時發動是為酸者

辛以汗為故身○熱反勝之治以苦寒佐以苦酸

太陰司天年未濕淫所勝平以苦熱佐以酸辛以苦燥之以淡泄之以濕上甚而熱治以苦溫佐以甘

少陰司天年午熱淫所勝平以鹹寒佐以苦甘以酸收之以○寒反勝之治以甘溫佐以苦酸辛

以酸溫佐以甘苦

厥陰司天年亥風淫所勝平以辛涼佐以苦甘以甘緩之以酸瀉之王注以厥陰氣未為平○清反勝之治

五運六淫用藥式

之始也凡純寒純熱之藥及寒熱相雜並宜用甘草以調和之惟中滿者禁用甘爾
泥也○王好古曰四時總以芍藥為劑尤為胃劑柴胡為劑十臟皆取決于少陽為發生
推之可知矣雖然月有四時日有四時或春得秋病夏得冬病神而明之機而行之變權宜又不可
寒以抑秋用火秋用苦溫以泄金冬用辛熱以潤水謂之時藥殊背素問逆順之理以夏月伏陰冬月伏陽
氣此則既不伐天和又防其太過所以體天地之大德也味者捨本從標春用辛涼以伐木夏用鹹
養脾氣夏省苦增辛以養肺氣冬省鹹增甘以養腎氣秋省辛增酸以養肝氣冬省酸增甘以
冬月宜加苦寒之藥黃芩知母之類以順冬沈之氣所謂順時氣而養天和也經又云春省酸增甘以
溫藥人參白朮蒼朮黃芩之類以順化之氣秋宜加酸溫之藥芍藥烏梅之類以順秋降之氣辛
薄荷荆芥之類以順春升之氣夏宜加辛熱之藥香薷薑之類以順夏浮之氣長夏宜加甘苦辛
李時珍曰經云必先歲氣母伐天和又曰升降浮沈則順之寒熱溫涼則逆之故春月宜加辛溫之藥

四時用藥例

五味補瀉

無所居故血不可不養衛不可不溫血溫氣和營衛乃常有天命

張元素曰五臟更相平也一臟不平所勝平之故云安穀則昌絕穀則亡水去則營散穀消則衛亡神

三焦命門

脾 胃 宜 甘 補 苦 瀉 從

肺 大腸 涼 酸 補 溫 瀉 勝 眈 寒 鹹 補 瀉 苦 補 熱 瀉

肝 膽 溫 酸 補 涼 瀉 小腸 熱 鹹 補 寒 瀉

六腑用藥氣味補瀉

主客證治病機甚詳見素問至真要大論文多不載

微之燥甚則地乾暑勝則地熱風勝則地動濕勝則地泥寒勝則地裂火勝則地涸是也其六氣勝復之故六淫謂之淫于外淫于內也故曰治之當其時而反得勝已之氣者謂之反勝六氣之勝何以李時珍曰司天主上半年天氣司之故六淫謂之所勝上淫于下也故曰平之在泉主下半年地氣司

勝之治以鹹冷以辛以甘以苦平之

太陽在泉年丑

○熱反摧勝折其氣也

之以和為利

陽明在泉年午

以苦下溫苦下性故

○熱反勝之治以辛寒佐以苦甘以酸平

少陽在泉年巳

以辛以苦以酸收之收其散行大氣于心腹須汗者以辛佐之以

以苦冷佐以鹹甘以苦平之

太陰在泉年辰

○熱反勝之治佐以酸淡利故以鹹與濕

使酸之時已收甚方止亦以酸收之可

○寒反勝之治以甘熱佐以苦以辛以鹹平之

少陰在泉年卯

以苦以酸收之不性惡寒故以鹹寒熱其于表復以苦發之

○清反勝之治以酸溫佐以苦甘以辛以平之

瀉子甘草

有餘瀉之

標病寒熱瘧頭痛吐涎目赤面青多怒耳閉頰腫筋攣卵縮丈夫癰疽女少腹腫痛陰病本病諸風眩運僵仆強直驚悸兩脇腫痛胸痛滿痛嘔血小腹痛疝瘕女經病肝藏血屬木膽火寄于主血主目主筋主怒

臟腑虛實標本用藥式

瀉亦送相施用也此特潔古張氏因素問飲食補瀉之義舉數藥以爲例耳學者宜因意而充之
定而不變者也其或補或瀉或則因五臟四時而送相施用者也溫涼熱四氣之本性也其于五臟補調中苦能燥濕堅更堅更鹹能更堅更利竅○李時珍曰甘緩收苦燥辛散酸收淡滲五味之本性一入腎辛主散酸主收甘主緩苦主堅更主更辛能散結潤燥致津液通氣酸能收緩散甘能緩急張元素曰凡藥之五味隨五臟所入而爲補瀉亦不過因其性而調之酸入肝苦入心甘入脾辛入肺

補母于五味

腎○苦燥急食辛以潤之知藥母黃以鹹瀉之瀉澤實則瀉子藥芍○欲堅急食苦以堅之母知以苦補之藥黃則

子
虛則補母子五

肺○苦氣逆急食苦以泄之子詞以辛瀉之皮桑實則瀉子瀉澤○欲收急食酸以收之藥芍以酸補之味五

則補母鹽炒

脾○苦濕急食苦以燥之尤白以苦瀉之連黃實則瀉子皮桑○欲緩急食甘以緩之草炙以甘補之參人

則補母薑生

心○苦緩急食酸以收之子五以甘瀉之參草實則瀉子草甘○欲栗急食鹹以栗之消芒以鹹補之瀉澤

補母黃地

肝○苦急急食甘以緩之草甘以酸瀉之藥芍實則瀉子草甘○欲散急食辛以散之芍川以辛補之辛細則

氣 桂心 澤瀉 白茯苓 伏神 遠志 石膏 瀰

補母 細辛 烏梅 酸棗仁 生薑 陳皮

神虛補之

鎮驚 硃砂 牛黃 紫石英

血 丹參 牡丹 生地黃 玄參

氣 甘草 人參 赤茯苓 木通 黃藥

瀉子 黃連 大黃

火實瀉之

標病肌熱畏寒戰慄舌不能言面赤目黃手心煩熱胸滿引腰背肩肘肘臂

本病諸熱瞋目驚惑譫妄煩亂啼笑罵詈怔忡健忘自汗諸痒瘡瘍

心藏神爲火君火包絡爲相火代君火行令主言主汗主笑

解肌 桂枝 麻黃
柴胡 半夏

標熱發之

攻裏

瀉火

瀉木

本熱寒之

補氣

補血

補母

不足補之

搜風

鎮驚

行血

行氣

大黃

黃連

芍藥

天麻

當歸

杜仲

狗脊

羌活

雄黃

紅花

香附

芍藥

龍膽草

烏梅

白朮

柏子仁

牛膝

杜仲

狗脊

荊芥

金箔

蠶甲

瞿麥

黃芩

澤瀉

白朮

菊花

芍藥

白芍

熟地

槐子

真珠

桃仁

麥冬

苦茶

澤瀉

白朮

菊花

芍藥

白芍

熟地

槐子

真珠

桃仁

麥冬

豬膽

澤瀉

白朮

菊花

芍藥

白芍

熟地

槐子

真珠

桃仁

麥冬

密蒙花

沒藥

草薢

阿膠

白蛇

夜明砂

穿山甲

青橘皮

決明

芍藥

阿膠

兔絲子

獨活

胡粉

大黃

青橘皮

穀精草

沒藥

草薢

阿膠

防風

銀箔

水蛭

青橘皮

生薑

沒藥

草薢

阿膠

皂莢

鉅丹

蜜虫

青橘皮

烏頭

龍骨

蘇木

石決明

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

白附子

氣實瀉之

標病酒寒熱傷風自汗背痛冷膈臂前廉痛
本病諸氣膈鬱諸痿喘嘔短氣咳嗽上逆唾膿血不得臥小便數而欠遺失不禁

肺藏魄屬金總攝一身元氣主聞主哭主皮毛

開鬼門 葛根 蒼朮 麻黃 獨活

標濕滲之

潔淨府 木通 赤茯苓 豬苓 藿香

燥中宮 白朮 蒼朮 橘皮 半夏 吳茱萸 南星 草豆蔻 白芥子

本濕除之

血 白朮 蒼朮 白芍 膠飴 大棗 乾薑 木瓜 烏梅 蜂蜜
氣 人參 黃芪 升麻 葛根 甘草 陳皮 藿香 威靈 縮砂 木香
補母 桂心 茯苓

土虛補之

下

大黃

芒消

青礬石

大戟

甘遂

續隨子

羌花

吐

豆豉

芎藭

子常

瓜蒂

鬱金

薤汁

藜蘆

苦參

赤小豆

鹽湯

苦茶

瀉子

訶子

防風

桑白皮

葶藶

士實瀉之

標

病身體

腫重

困嗜臥

四肢

不舉

舌本

強痛

足大趾

不用

九竅

不通

本

病諸濕

腫脹

痞滿

噎氣

大便

閉黃

瘰癧

飲吐

瀉霍亂

食不化

脾

藏智

屬土

為萬物

之母

主營衛

主味

主肌

主肉

主四肢

散

甘草

獨活

麻黃

柴胡

龍腦

標熱發之

涼

血

地黃

芎藭

子天

麻黃

瀉

火

黃芩

竹葉

麥門冬

芒消

炒鹽

本熱寒之

血

當歸

乳香

熟地黃

沒藥

本熱攻之

血 黃蘗 枳 熟地 黃 鎖陽 肉蓯蓉 山茱萸 阿膠 五味子

氣 知母 玄參 補骨脂 砂仁 苦參

補母 參 山藥

水弱補之

渴 肺 澤 瀉 豬苓 車前子 防已 茯苓

渴 子 大戟 牽牛

水強渴之

標病發熱不惡熱頭眩頭痛咽痛舌燥脊股後廉痛

禁消渴引飲

本病諸寒厥逆骨疼腰痛腰冷如水足跗腫寒少腹滿急疝瘕大便秘泄吐利脰穢水液澄澈清冷不

解表 麻黃 葱白 紫蘇

標寒散之

溫肺 丁香 養香 欬冬 花 檀香 白豆蔻 益智 縮砂 糯米 百部

本寒溫之

清金 黃芩 知母 麥門冬 廬子 沙參 紫苑 天門冬

本熱清之

斂肺 烏梅 穀殼 五味子 芍藥 五倍子

潤燥 蛤蚧 阿膠 麥門冬 貝母 百合 天花粉 天門冬

補母 甘草 人參 升麻 黃芪 山藥

氣虛補之

通滯 枳殼 薄荷 乾薑 木香 厚朴 杏仁 皂莢 桔梗 紫蘇梗

瀉火 粳米 石膏 寒水石 知母 訶子

除濕 半夏 白礬 白茯苓 薏苡仁 木瓜 橘皮

瀉子 澤瀉 牽藤 桑白皮 地骨皮

實火瀉之

標病惡寒戰慄如喪神守耳鳴耳聾腫喉痺諸病附腫疼酸驚駭手小指次指不用

下寒則二便不寒腹冷疝痛

中寒則飲食不化寒脹反胃吐水瀉渴不渴

上寒則吐飲食痰水胸痺前後引痛食已還出

下熱則暴注下迫水液渾濁下部腫滿小便淋瀝或不通大便閉結下痢

中熱則善饑而瘦解吐酸胸痞脇痛腹大諸病有聲鼓之如鼓上下關格不通霍亂吐利

上熱則喘滿諸嘔吐酸胸痞脇痛飲食不消頭上汗

本病諸熱發熱暴病暴死暴瘡躁擾狂越驚妄驚駭諸血溢血逆氣逆衝上諸瘡瘍痘疹瘡核

右之氣號中清之府上納主化下主出

三焦爲相火之用分布命門元氣主升降出入游行天地之間總領五臟六腑營衛經絡內外上下左

精脫固之

澀滑 牡蠣 芡實 金櫻子 五味子 遠志 山茱萸 蛤粉

益陽 巴戟天 附子 丹桂 肉桂 益智子 蛤蚧 破故紙 覆盆 川烏頭 硫黃 天雄 烏藥 陽起石 舶茴香 胡桃

火弱補之

燭相火

黃蘗

狂

牡丹皮

地骨皮

生地黃

扶脊

卷五

寒水石

火強燭之

本病前後癰閉氣逆裏急疝痛奔豚消渴膏淋精溺精寒赤白濁血崩中帶漏
命門爲相火之原天地之始藏精生血降爲溺升則爲鈇三焦元氣

澤皇

學不

連翹

真丹

猪膚

標海堂

解表

麻黃

去時

呈鑑

桂枝

標寒解之

澠

附子

稟諫

官桂

蜀椒

白朮

本寒燄之

下傷寒少陰證口燥咽乾大承氣湯

胃屬土容受爲水穀之海

脾主同

和解 柴胡 芍藥 黃芩 半夏 甘草

標熱和之

鎮驚 黑鉛 水銀

降火 黃芩 黃連 芍藥 連翹 甘草

本熱平之

溫膽 人參 細辛 半夏 炒薤仁 炒酸棗仁 當歸 地黃

虛火補之

瀉膽 龍膽 牛膽 豬膽 生薤仁 生酸棗仁 黃連 苦茶

實火瀉之

標病寒熱往來痞瘧胸脇痛頭額耳痛鳴鼻塞癰結核馬刀足小指次指不用

本病口苦嘔苦汁善太息澹如人將捕狀目昏不眠

膽屬木爲少陽相火發生萬物爲決斷之官十一臟之主肝主同

解表 柴胡 細辛 荆芥 羌活 葛根 石膏 石膏

標熱散之

下 黃蘗 知母 生犀 石膏 牡丹 地骨皮

中 黃連 連翹 生犀 石膏

上 黃芩 連翹 局子 知母 玄參 石膏 生地黃

本熱寒之

下 附子 桂心 硫黃 人參 沈香 烏藥 破故紙

中 人參 黃芪 丁香 木香 草果

上 人參 天雄 桂心

虛火補之

下 黃芩 芒消

吐 瓜蒂 鹽蘗汁

汗 麻黃 柴胡 葛根 荆芥 升麻 薄荷 羌活 石膏

清熱 秦芎 槐角 地黃 黃芩

本熱寒之

脫 龍骨 白朮 訶子 栗殼 烏梅 白礬 赤石脂 禹餘糧 石榴皮

陷 升麻 葛根

濕 白朮 蒼朮 半夏 硫黃

燥 桃仁 麻仁 杏仁 地黃 乳香 松子 當歸 肉蓯蓉

氣 皂莢

腸虛補之

氣 枳殼 木香 橘皮 檳榔

熱 大黃 芒消 桃花 牽牛 巴豆 郁李仁 石膏

腸實瀉之

標病齒痛喉痺頸腫口乾咽中如核飢目黃手大指次指痛宿食發熱寒慄

本病大便閉結泄痢下血裏急後重疰脫肛腸鳴而痛

大腸屬金主變化爲傳送之官

解肌 升麻 葛根 豆豉

標熱解之

降火 石膏 犀角 黃連

本熱寒之

寒濕 乾薑 附子 草果 官桂 丁香 肉豆蔻 人參 黃芪

濕熱 蒼朮 白朮 半夏 茯苓 橘皮 生薑

胃虛補之

飲食 巴豆 神麴 山楂 阿魏 礞砂 鬱金 三稜 輕粉

濕熱 大黃 芒消

胃實瀉之

標病發熱蒸身熱身前後寒發狂譫語咽痺上齒痛口眼喎斜鼻痛飢食胃管當心痛支兩脇

本熱利之

寒 桔梗 升麻 益智 烏藥 山茱萸

熱 黃蘗 知母

下虛補之

泄火 滑石 猪苓 澤瀉 茯苓

實熱瀉之

標病發熱惡寒頭痛腰脊強竅足小指不用

本病小便淋瀝或短數或黃赤或白或遺失或氣痛

勝胱主津液爲胞之府氣化乃能出號州都之官諸病皆干之

解肌 薑本 羌活 防風 蔓荊

標熱散之

降火 黃蘗 黃芩 黃連 連翹 梔子

本熱寒之

血桂心胡索

氣白朮棟實茴香砂仁神麴扁豆

虛寒補之

血 地黃 蒲黃 赤茯苓 牡丹皮 芎藭

氣 木 通 猪 苓 滑 石 瞿 麥 澤 瀉 葶 藶

實得真傳

標病身熱惡寒噤口腫痛頭眩耳聾

本病大便水穀利小便短小便閉小便血小便自利大便後血小腸氣痛宿食夜熱且止

小腸主分泌水穀爲受盛之官

解肌 石膏 白芷 升麻 葛根

標識之

溫 糞 乾 糞 附 子 肉 豆 蔻

本寒溫之

宋本草舊目錄

藥對歲物藥品

張子和汗吐下三法

陳藏器諸虛用藥凡例

李東垣隨證用藥凡例

姪禁忌

相反諸藥

藥名同異

序例下

神農本草經目錄

病有八要六失六不治

飲食禁忌

服藥食忌

相須相使相畏相惡諸藥

本草綱目序例目錄第二卷

龍衛	蛇含	黃精	龍	金釵股	釵子股	忍交藤	薺	桔梗	杏葉沙參
黑三稜	三稜	烏桕	知母	蠅母	沙參	黃芩	地精	人參	何首烏
<div>二物同名</div>									
木蜜	大棗	蜜香	檀	仙靈脾	冬門天	黃芩	蜂窠	絡石	天南星
酸漿	米漿水	燈籠草	三葉酸草	羊躑躅	虎骨	虎骨	虎骨	虎骨	虎骨
牛舌	牛之舌	車前	羊躑躅	羊躑躅	虎骨	虎骨	虎骨	虎骨	虎骨
石花	瑤枝葉	烏韭	鐘乳石汁	淡竹葉	淡竹葉	淡竹葉	淡竹葉	淡竹葉	淡竹葉
芭	地黃	黃芩	白黍	黃牙	黃牙	黃牙	黃牙	黃牙	黃牙
守田	半夏	蘭草	狼尾草	水玉	水玉	水玉	水玉	水玉	水玉
白幕	天雄	白英	白薇	立制石	立制石	立制石	立制石	立制石	立制石
仙人杖	枸杞	仙入草	立死竹	木蓮	木蓮	木蓮	木蓮	木蓮	木蓮
狗骨	大骨	鬼箭	貓兒刺	苦讓	苦讓	苦讓	苦讓	苦讓	苦讓
豕首	豬頭	蠶實	天門冬	山石榴	山石榴	山石榴	山石榴	山石榴	山石榴

更生雀翹

白草 白歛 白蕒

桃之未開

臘脂菜 藜落葵

重疊休不

天豆 雲實 石龍芮

通草
木通
通脫木

藥金生草根似巴戟射干

妖女臺地層出

茵 芷 草

士射墨竹

金真草書

草茅草

地節威蕤枸杞

鹿 卓 盧

難陽草 藥之類 食不草

斑杖 虎杖 攀倒甌

地 野 小 水 楊 梅

山經

血見愁 蕪草 地錦

鬼鍼 鬼釵草 馬齒蘭 竹

石衣非陳惠

大紅馬

羊婆奶沙參子

蘭華蘭

石髮
鳥非
陟屺

陣軍 細書 軍吉

仙入黨草名射士

麗春 罌粟 仙女喜

香茅 鼠麴草 紫葳

金銀藤 文

千金解毒之草

益尉地膚

蕹菜 葵菜 蕹菜

火欬
光尉
猶養

馬肝石 何昇島 烏鬚石

黃花嵩
鼠麴
黃嵩

士
事
事

伏兔 飛廉 伏菟

烏龍珠	石髮	麥門冬	地葵	蒼耳	地膚子	紫河車	蚤休	人胞
龍珠	赤珠	石龍劍	不死草	卷柏	麥門冬	苦薏	野菊	蓮子心
甘露子	地蠶	甘蔗子	雷丸	竹荪	兔葵	馬薊	薊	大薊
黃昏	合歡	王孫	夜合	合歡	何首烏	戴椹	黃芪	旋覆花
蘭根	藥實	貝母	藥方	飛廉	水蘇	夏枯草	連及	黃精
地血	紫草	茜草	木蘭	漏蘆	蘇蘇	白根	蘭草	白茅
孩兒	蘭草	澤蘭	香蘇	蘇蘇	蘇蘇	風姑	壯丹	鼠婦
香菜	香露	羅勒	地筋	白茅根	莖茅根	都梁香	蘭草	澤蘭
逐馬	女參	丹參	百兩金	金蛇	牡丹	杜蒙	參	王孫
千兩金	淫羊	羊藿	麟	蛇床	營實	香草	蘭草	零陵草
仙茅	長松	婆羅門	水香	蘭草	澤蘭	兒草	知母	荒花
神草	人參	赤箭	芫草	黃芪	麥	長生草	羌活	紅茂草

石鹽	石礬	石膏	光明鹽	屋車礬	屋蛟	石蠶	沙虱	甘露子
寒水石	石胡粉	石膏	凝水石	石綠	綠青	石英	紫石英	水晶
鋇華	胡粉	黃丹		石處	慈石	石腦	石芝	大餘糧
冬青	凍青	女貞		石芝	芝草	櫟	梧桐	木槿
將軍	大黃	硫黃		柳	鼠李	石鱖	絡石	穿山甲
榛	榛子	厚朴		果蠟	蠟	風藥	石南	澤蘭
文蛤	海蛤	五倍子		樺木	樺皮	絡石	草石	
侵木	桂	又木名		大青	大青草	茆	女堯	
日及	木槿	扶桑		莢	烏頭	烏犀	犀角	皂莢
桑上寄生	桑耳			鼠矢	鼠糞	苦心	知母	沙參
獐頭	獐首	土菌		獨搖	白楊	祈蒙	大薺	白棘
水栗	麥實	萍蓬草	根	陽桃	獼猴桃	胡王使者	羌活	白頭翁
枕子	山查	楊梅		金銀臺	水仙花	木綿	古貝	杜仲
				金銀臺	水仙花	王不留行		

本草綱目序例下
卷二

土草薺	土茯苓	刺猪苓	土茯苓	白薺	薺	薺
鬼薺	天南星	山薺	山薺	牛舌大黃	羊蹄	羊蹄
木薺	鹿薺	山薺	山薺	金薺	羊蹄	羊蹄
草薺	草薺	草薺	草薺	土附子	草薺	草薺
土薺	土薺	土薺	土薺	草薺	草薺	草薺
黑狗脊	黑狗脊	黑狗脊	黑狗脊	水巴戟	香附	香附
野甜瓜	野甜瓜	野甜瓜	野甜瓜	野天門冬	馬芹	馬芹
野胡蘿蔔	野胡蘿蔔	野胡蘿蔔	野胡蘿蔔	野園萎	野園萎	野園萎
野紅花	野紅花	野紅花	野紅花	青蛤粉	青蛤粉	青蛤粉
胡薄荷	胡薄荷	胡薄荷	胡薄荷	黃大戟	黃大戟	黃大戟
野雞冠	野雞冠	野雞冠	野雞冠	杏葉沙參	杏葉沙參	杏葉沙參
草甘遂	草甘遂	草甘遂	草甘遂	天蔓菁	天蔓菁	天蔓菁
甜寧麝	甜寧麝	甜寧麝	甜寧麝	水羊乳	丹參	丹參

草續斷石龍蜈

鬼油麻漏蘆

比類隱名

朝開暮落花木樨狗密臺

鬼鳥姑獲鳥鬼車鳥

水狗獼猴魚鯢魚

人魚鱗魚鯢魚

白魚鱗魚衣魚

貧盤蜚蠊魚夜行

飛生飛生蟲鼠

青蛭蚺蟬錢

地雞土菌鼠婦

占斯樟寄生雀龜蟲

牡牛膝天名精

甜桔梗薺危

土青木香馬兜鈴

體泉瑞水名入口中津

山雞翟雉鸞雉

鯨魚吹沙魚鯨魚

魚師有毒之魚狗魚

黃頰魚鰕魚黃類魚

蝸蠃蝸牛螺

蟪蛄蟬螻蛄

沙虱水蟲石蠶

鵲田間小鳥魚狗鳥

野脂麻玄參

山牛蒡大薺

野天麻莨菪

無心薇薺鼠麴草

扶老禿鶯靈壽木

天狗獾魚狗鳥

魚虎土奴魚狗鳥

上龍蛇蛻龍

貧鑿鼠負鼠鼯

蟪蛄螻蛄鼠

蟪蛄伯勞杜鵑

地蠶鱗鱗甘露子

白頭翁
良得酒為之使

丹參
水畏

玄參
大惡黃芪乾薑
畏黃芪龍骨

遠志
得石鍾乳
畏茯苓龍骨

貫衆
伏菌赤豆為之使
得石鍾乳

尤
桃風雀榆為之使
防風肉為之使

威蕤
鹹畏

桔梗
膽龍皮為之使
畏肉白及

人參
鹹苦馬兜為之使
畏五靈脂惡

白及
畏杏仁核之使
紫石英為之使

紫參
夷畏

地榆
伏得髮良
雄黃硫門冬

淫藺藹
得酒黃芝為之使
善紫芝為之使

巴戟天
覆雷盆子為朝使
惡雷盆子為朝使

狗脊
惡草敗之使
淫藺藹

知母
伏得蓬砂及酒良
伏得蓬砂及酒良

黃精
實忌

沙參
已惡防

惡芥爲中
使

黃民

相須相使相畏相惡諸藥以諸家本草續增今者益

惡遠志忌豬肉使

甘草	夏半	硬石膏	野槐	木芙蓉	茅質汗	羞天草	草鍾乳	木甘草	便牽牛	赤辟荔
龍鱗荔	生薑	白靈砂	草麝香	水蓮蓬	野蘭	羞天花	草驚甲	草雲母	山甘草	紫金藤
黃精	粉霜	鬱金香	木饅頭	鬼白	乾茄	雲貴	草雲母	山甘草	紫金藤	龍鱗荔
野茄	石菴蘭	胡韭子	木天蓼	土質汗	山地栗	草硫黃	水甘草	夜牽牛	紫苑	
補骨脂	補骨脂	補骨脂	補骨脂	補骨脂	補骨脂	補骨脂	補骨脂	補骨脂	補骨脂	

大黃 乾漆 忌冷 水 惡
陸 伏得 硃砂 砒石 雌黃 肉

右草之五

疾 藜 之鳥 使爲
女 青 之蛇 使爲
亭 麝 良榆 惡之 白蠶 蠶石 得酒 龍肉
決 明 子 惡大 實爲 麻子 使
欬 冬 花 石杏 畏貝 母使 麻得 辛黃 柴宛 良
冬 葵 子 之黃 芽爲 使
柴 苑 雷冬 款爲 志瞿 麥 畏肉 雄臺 本
女 苑 鹹 畏 齒
麥 門 冬 畏苦 參車 爲木 耳使
伏 惡 石 款冬 苦乳 瓠

牛膝 畏白 忌前 忌火 忌陸 忌肉 忌英

地黃 畏酒 忌麥 忌門 忌薑 忌汁 忌縮 忌砂 忌諸 忌血 忌貝 忌母

右草之四

麻黃 厚辛 畏朴 畏石 為微 為使 忌厚 忌白 忌使

蘆筍 忌巴 忌豆 忌肉 忌猪 忌甘 忌肉 忌馬

天名 精為 為地 為衣 為黃 忌垣 忌地 忌黃

菜耳 忌肉 忌猪 忌甘 忌肉 忌馬

飛廉 忌得 忌烏 忌丸 忌雷 忌黃 忌地 忌使

漏蘆 忌連 忌翹 忌為 忌酒 忌得 忌皮 忌秦 忌得

續斷 忌雷 忌丸 忌黃 忌地 忌使 忌使 忌使

紅藍花 忌酒 忌得 忌皮 忌秦 忌得

夏枯 草伏 忌瓜 忌為 忌砂 忌使 忌使 忌使

薇蘅 忌得 忌皮 忌秦 忌得

芫蔚 石制 忌三 忌黃 忌石 忌使 忌使 忌使

艾葉 忌苦 忌酒 忌香 忌使 忌附 忌使 忌使 忌使

菴蘭 忌荆 忌子 忌薏 忌苡 忌使 忌使 忌使

菊花 忌青 忌精 忌杞 忌桑 忌根 忌白 忌皮 忌皮

變華
之明
使爲

皁莢
苦參爲之
伏惡
粉冬
霜黃
惛人
砂參

槐實
之景
使天
爲景

桐油
忌畏
烟酒

杜仲
蛇交
蛇皮
參

黃蘗木
伏惡
硫漆
黃漆

右木之一

麒麟竭
僧得
良蜜
陀

辛夷
黃芩爲之
蒲石使
膏環
惡五
脂

丁香
忌畏
鬱金
火

沈香檀香
忌見
火

厚朴
瀉薑爲之
寒使
石惡
豆澤
忌
豆
雞
忌
紫
脂

棟實
之香
使爲

秦皮
使苦
防大
寒爲
之

巴豆
黃花爲之
連使
得火
煎良
汁惡
草率
水
畏大

桂
胡人得
紫石參
乾麥門
地黃冬
癆吐逆
黃芩黃
生調中
忍石益
脂氣得
柴

柏葉柏實
畏菊花
羊心桂
牡蠣為
石之使
麴及

右草之八

烏非
之使為
垣衣為
石斛
石陸
畏海蛤
文蛤
澤瀉
石豆
畏雷丸
惡凝水
石草
得滑
喜石蒲
膽秦
地充為
忌羊使
鐵惡
器麻黃

右草之七

絡石
畏杜仲
貝母
喜丹為
殺孽惡
毒落
黃根
制畏雄
鼠姑黃
白斂
之代使
蘇為
威靈仙
劉忌湯
女苑國
為使
殺雄
惡細辛
石消
黃雄
毒石
畏草
辟

麻花
之使爲
麝蟲爲

右果部

蓮蓬鬚
葱蒜忌
葱地黃

食菜黃
石畏
英紫

蜀椒
防杏仁爲
雄使
黃案得
冷水麻仁漿
漿冬

檳實殼
殺反綠
豆

杏仁
庚葛良
畏惡黃
黃

右木之四

竹瀝
之使爲
薑汁爲

麻仁
白微
使茯苓牡蠣

荷葉
油畏
桐

石蓮子
枸杞子山藥
得茯苓白朮

吳茱黃
消實白朮
畏惡石參
紫丹英

秦椒
畏惡樓防
黃

桃仁
之使爲
附香

占斯
之使爲
萊黃

紫石英 畏石 主為之 亂使 惡得 蛇甲 黃連 麥句 薑中 畏扁氣 附子 及酒

青琅玕 得毒 水銀 畏雞 殺錫 白石英 毒馬 目

玉屑 畏惡 蟾角 玉泉 畏款 冬花

右金石之一

諸鐵 朴消 石 亨 脂 鹽 犬 脂 熬 枝 炭

胡粉 黃雌 畏 制 消 石 亨 脂 鹽 犬 脂 熬 枝 炭 錫 地黃 巴豆 麻龍 薑汁 羶石 角 馬 鞭 草

赤銅 桃蒼 尤 巴 豆 乳 香 胡 畏 慈 姑 牛 脂 黑鉛 畏紫 背

生銀 飛廉 鼠尾 中 生 脂 慈 石 角 惡 烏 賊 羊 骨 血 馬 連 甘 公

金 餘 錫 子 畏 馬 鱸 水 銀 翠 石 朱砂 銀 諸 脂 慈 石 鐵

禹餘糧 制丹 五金 三黃 黃使

太 餘糧 杜 貝母 爲之 蒲 鐵 落

玄石 實松脂 實松 桂

代 赭石 天 雄 爲 附 子 使

陽起石 桑 蛇 蛻 爲 之 使 畏 兔 絲 子 忌 羊 血 桂

慈石 殺 胡 鐵 毒 爲 之 使 伏 金 丹 砂 牡 養 水 莽 畏 黃石 脂

右石之三

殷孽 畏 龍 已 畏 防 龍

石鍾乳 畏 紫 石 英 爲 之 使 非 草 實 獨 玄 胡 葱 牡 蒙 人 參 門 冬 貓 兒 羊 忌 血

孔公孽 水 蘭 爲 之 使 忌 羊 血 惡

白石脂 畏 屎 爲 之 使 連 草 惡 飛 松 脂 廉 毒 公

五色石脂 畏 官 桂 大 黃 黃 孝

赤石脂 畏 大 黃 花 松 汁 惡

黃石脂 畏 青 蠶 爲 之 使 連 草 忌 卯 未

滑石 青草 制雄黃 不灰木 銀三黃

理石 惡滑石 惡麻黃 方解石 豆惡巴

雌黃 不食草 地胡 瓦松 五加皮 冬益 桑葉 雞子 巴豆 馬使 畏鐵公

雄黃 藥河南 五地 藥高 黃白 薤苳 不食 圓桑 葉 蠟 脂 皮

右石之二

禾粉 藥黃 連石 黃黑 莖 忌 切 漿 粉 霜 畏硫黃 麥稈 灰 蓄

水銀 星慈石 喜石 草 乾 草 子 大 蜀 來 紅 馬 蹄 香 蓮 水 慈 姑 瓦 忍 冬 金

丹砂 桑 樗 石 河 畏 車 地 鹹 馬 車 鞭 前 草 阜 皮 決 明 瞿 白 附 子 星 烏 頭 諸 血

雲母 東 瀉 水 為 百 使 畏 為 上 草 茅 徐 長 羊 腳 羊 血 制 未 蛇 甲 礬 石

廣蟲 尾蟲 羊膏 羊角

蠅 食鹽 食灰

水 蛙 食灰

斑並 斑 青地 膽葛 上亭 長

晚 蠶 沙 粉 砂 霜 燭

桑 蟬 得 旋 花 戴 楫

蜂 子 蘇 生 瓜 白 藥 苦 仕 實

綠 蟻 醋 畏

衣 魚 草 萬 草 泰

鱗 子 惡 鱗 之 使

蜘蛛 雄 黃 青

斑 蝥 甘 刀 草 畏 巴 豆 參 精 米 青 小 麻 子 黑 豆 惡 汁 青 豆 醋 花

白 蠟 蠶 桑 梗 芥 蟬 茯 神

露 蜂 房 琴 乾 薑 丹 參 黃

蜜 蠟 齊 荒 花

右石之五

礬 石 畏 麻 黃 紅 心 使 灰 礬 懼

石硫黃 前黃石 藥石 膏脂 爲之 使 獨使 帶 骨地 皮幸 榆蛇 牀醋 鹿馬 筋錫 兔絲 鱸沙 紫荷 波子 稜桑 灰益 皮馬 鞭草

蓬砂 帶何 母云 烏驚 不食 蘇草

腦砂 羊制 蹄金 陸入 瓜耳 蒼忌 蠶血 海螺 一畏 切酸 羊骨 烏醋 躑躅 魚壯 腥草 河柏 豚魚 膠

凝水石 榆地 畏 使 爲 女爲 范杏 葉竹 葉青 參苦 榮

大鹽 之漏 使爲 稜 三京 薺句 爲之 使 爲 石

右石之四

礞石 消得 良

礬石 得馬 目火 毒良 公鉛 寧細 幸爲 養之 屎使 忌水 畏 血

空青 曾青 絲兔 畏

石膽 茵桂 莫爲 幸夷 白微 羌花 畏 桂

砒石 畏蒲 冷水 綠波 陵高 豈鹽 鶴頂 消石 水參 角酸 山礬 不益 食母 獨草

牛乳
不制
灰秦
木荒

羊脰
骨
砂伏
礪

殺羊屎
霜制
粉

殺羊角
爲鬼
之絲
使子

右禽部

五靈脂
參人
惡

伏翼
爲覓
之實
雲實

夜明沙
白微
白歛

右介部

馬刀
良得
火

牡蠣
子貝
良爲
惡使

龜甲
畏惡
狗參
膽螻

砂礪
伏蛇
遠志
夷辛
庚草
吳甘
黃得

海蛤
畏狗
漆爲
甘使
遂光
花

蚌粉
硫制
黃石
亭脂

鱉甲
理惡
石
禁石

右
舞
部

河豚魚
汁畏魚鱗木烏藍草根
魚橄欖甘蔗盧根養

鯉魚膽

蛇 蛇
畏慈石及酒
得火良

鼉中
畏荒漆爲之使
遂狗膽

得參牛黃豆
每料壹斤

保嬰

師師

黃惡 黃麻

蝸牛蛤蜊

蜈蚣 雞屎 桑白皮 畏 蜘蛛 白鹽

蜥 蜥
無美
惡硫黃斑
整

龍角 乾漆畏蜀椒理石

白蛇烏蛇
良得酒

烏賊魚骨 附子白及白欬

丹砂空青輕粉

陸肉忌

陽起石雲母鍾乳砂礪石

牛膝牛乳牛忌

生夏膏蒲

仙茅牛乳牛忌

桔梗烏梅

蒼耳米忌

黃連黃連

甘草海菜肉忌

服藥食忌

柿蟹反

河豚桔梗甘草烏頭附風子

藜蘆

烏頭白貝白母梧樓半夏

反苦人參

細參沙參藥丹參肉參

蜜葱反生

甘草
反大
海薺
薺花

相反諸藥凡三十六種

右獸部

猓皮
畏得
桔梗
良麥
門冬

麝脂
畏桃
忌李
黃

鹿角
之杜
使仲
爲

熊膽
地惡
防黃
已

牛黃
龍入
膽爲
黃地
常使
山蜚
得丹
畏菩
利耳
漆目

馬脂
脂駝
金柔
五

惡龍骨

大戟
反薺
薺花
海薺

猓脂
伏雄
金五
八石
黃

麝香
蒜大
忌

鹿角膠
畏火
得良
黃

鹿茸
之麻
使勃
爲

犀角
惡松
雷脂
升薺
爲頭
鳥使
啄

阿膠
之得
火良
薺黃
爲

蜈	蟻	衣	魚	蛇	蛻	蜥	飛	生	麋	蟲	雞
蠟	砂	光	青	斑	蝮	地	蜘蛛	蠶	雙	站	樗
蘇	木	砒	石	芒	子	硫	石	蠶	雄	黃	上
蘭	茹	麥	孽	葵	稜	代	常	山	水	銀	錫
桃	仁	赤	箭	草	二	崗	鬼	箭	通	草	紅
薤	仁	牡	丹	欒	根	茜	茅	根	乾	漆	瞿
桂	仁	薇	衛	牛	膝	皂	率	牛	厚	朴	槐
烏	頭	附	星	半	夏	巴	大	戟	野	花	葵
		忌	子	天	雄	鳥	側	子		葛	羊
		妊				喙					躑

妊忌

凡服藥不可見死產婦淹穢等事

凡服藥不可多食生菜胡荽生葱諸果滑滯之物

凡服藥不可雜食肥猪肉膩羹鱸陳臭物

當歸 麪忌 藥忌 濕
 鼈 菜忌 蔥
 牡丹 胡忌 葵
 常山 生忌 葱
 薄荷 肉忌 蠶
 巴豆 醬忌 野猪肉 蕪荳 荳
 荊芥 切忌 驢肉 反 豚一
 補骨脂 芸忌 猪血
 吳茱萸 肉忌 猪心

丹參 茯苓 神 一忌 酸及
 威靈仙 茯苓 湯忌 茶
 厚朴 苧麻 豆忌 炒
 附子 烏頭 天雄 米 稷 豉 汁
 麥門冬 魚 鯽 魚 忌
 蒼朮 白朮 桃 雀 肉 魚 荰
 紫菀 天門冬 砂 龍 骨 魚 鯉 忌
 細辛 藜蘆 生 狸 肉 菜
 地黃 何首烏 蕪 切 血 葱

牛肝忌

鱸肉忌

白狗血忌

羊肉忌

猪肉忌

猪肉忌

飲食禁忌

蟹爪蟬

大鱗

肉蟬

馬蛭

生驢牛

薑肉黃

小羊麝

蒜肝香

雀鯉雌

肉魚黃

馬蝦兔

刀臺肉

牛乳忌

牛肉忌

大肉忌

羊心肝忌

猪心肺忌

生驢炒肉豆

鷄梅子

鷄胡

鹿菜

羊肝

馬生

鮮蕎麥

醋醬豆

猪肉豆

魚梅子

子鷄

魚鱸

鮎魚

茶鷄

雞羊

猪肉芥

子鷄

羊肝

飲食禁忌

李東垣隨證用藥凡例

胡桃忌	雄鴨	酒	栗子忌	牛	肉
乾笋忌	羊心	羊肝	木耳忌	鷓鴣	野鴨
生薑忌	砂鱸	馬肉	芥末忌	雞	鰱魚
梅子忌	猪肉	兔肉	鳧此忌	鱸	肉
寬菜忌	猪	羊	白菜忌	猪心	肺
胡荽忌	肉	猪	胡蒜忌	鯽魚	大魚
生葱忌	大蜜	楊棗	韭薤忌	牛	蜜
綠豆忌	鯉魚	鯽	炒豆忌	猪	肉
					雞

蕎麥忌	雄豬肉	黃羊肉	魚肉
諸瓜忌	油餅		
銀杏忌	鱷		
枇杷忌	熱麪		
桃子忌	醬肉		
李子忌	雀蜜	雞水	漳鴨
螃蟹忌	荊芥	軟柿	菓子
鯪魚忌	桑犬	柴肉	黃
	野豬	野雞	

黍米忌	牛葵菜	蜜
沙鰱忌	葵魚	笋
慈姑忌	菜黃	
楊梅忌	生葱	
棗子忌	魚葱	
燈橘忌	獼猴肉	
蝦子忌	雞肉	
鱸肉忌	雞菜	鴨薄荷
鮎魚忌	野牛肝	鹿肉

兔桃子
肉菜
肉

不思飲食

香木

諸瘧寒熱

爲君柴胡

麥問冬 阿膠五味 熟地 煨 喘

阿明冬五味

熱喘欬嗽
桑白皮黃

葵訶子
桑白皮黃

有聲有痰
五味防風
半夏白朮

五味防風
半夏白朮

諸嗽有痰

防風枳白朮

諸欬嗽病

春加味爲川芎

一切痰飲

茶瀝加半夏

風濕諸病
白朮用羌活

白朮
須用羌活

脾胃有痰

伏苓豬苓半夏防風
嗜臥有痰白朮蒼朮

脾胃困倦

氣短虛喘

水飲濕喘

寒喘痰急

欬嗽無痰

肺黃桂枝之黃

風熱諸病

風冷諸病

風熱牙疼
麻黃連牡丹皮防風升

眼暴赤腫
當歸風佐連瀉火
眼久昏暗
熟地甘芩歸君羌防

噤痛領腫
甘草鼠粘
肢節腫痛
羌活

肩凌骨痛
羌活
風濕身痛
羌活

六經頭痛
陰生川芎加引
太
巖頂芷
本

傷風惡風
防風甘君
傷陰惡寒
麻黃甘君

破傷中風
前瘡升麻白芷兩瘡胡風背加防芷
傷中風
瘡瘡在汗之脉沈在川芎化湯然行經

風中五臟
獨活明目腎先養血當歸羌活風為類隨證加藥

風中六腑
然手足不遂先發其羌活風為類隨證加藥

一切血痛	仁紅花補血木當歸阿膠玄胡索郁李仁止血生髮灰破血	桃
一切氣痛	子助胃氣附木香檀香破氣補氣青皮參黃枳殼泄氣牽牛	葛
自汗盜汗	須麻黃根	驚悸恍惚
虛熱無汗	地骨丹皮	潮熱有時
肌熱有痰	須黃芩	骨須皮知母
小便餘瀝	杜仲	莖中刺痛
小便不利	茯苓澤瀉母為使	心煩口渴
水瀉不止	須甘草用白芍急消芍黃甘下	小便便黃瀉
諸痢腹痛	○下	澤瀉藥
	○後白芍急消芍黃甘下	乾薑茯苓天夏葛花根粉
	○後白芍急消芍黃甘下	烏梅生夏天夏葛花根粉
	○後白芍急消芍黃甘下	草甘
	○後白芍急消芍黃甘下	草生
	○後白芍急消芍黃甘下	骨須皮知母
	○後白芍急消芍黃甘下	西加午麻辰戌加未羌活夜加申加酉加
	○後白芍急消芍黃甘下	胡
	○後白芍急消芍黃甘下	歸
	○後白芍急消芍黃甘下	柴
	○後白芍急消芍黃甘下	藥
	○後白芍急消芍黃甘下	當
	○後白芍急消芍黃甘下	歸
	○後白芍急消芍黃甘下	佐
	○後白芍急消芍黃甘下	之
	○後白芍急消芍黃甘下	牛
	○後白芍急消芍黃甘下	之

小腹痛 痢痛 柴胡須川棟子皮

脇痛 寒熱 須胡柴

諸氣刺痛 加枳香經附藥

胸中痞塞 實熱用厚朴枳實生夏實附子乾薑痰

宿食不消 連用實黃

腹中實熱 芒消大黃

腹中脹滿 厚朴薑制香

下焦濕熱 知洗酒已藥

上焦濕熱 肺火瀉

臍腹疼痛 烏藥加藥

胃脘寒痛 須吳茱黃豆

諸血刺痛 上須下當根詳

六鬱痞滿 香附子芍藥加神血加陳皮

胸中煩熱 須用子

過傷飲食熱 大黃為丸君冷物

腹中窄狹 蒼用

下焦濕腫 為洗君甘草防已藥龍膽佐草

中焦濕熱 心火瀉

虛而冷加乾薑
當歸
芍藥

虛而多熱加甘草
牡蠣
地黃

虛而多夢紛紜加龍骨

虛而不安加人參

虛而欲吐加人參

虛勞頭痛復熱加葳蕤
栝子

病之名永無必愈之效此實浮惑復審其冷熱記增損之主爾

藥勢未成晚則盛勢已敗今爲醫不自探藥且委節早晚又不知冷熱消息分兩多少徒有療損虛而勞者其弊萬端宜隨病增減古之善醫者皆自探藥審其體性所主其時節早晚則增夫衆病積聚皆起於虛也虛生百病積者六腑之所聚聚如斯等疾病從多從舊方不假增

陳藏器諸虛用藥凡例

腎熱黃甘草
額上紅知母

脾熱瀉黃上
散紅

肺熱瀉白
肥紅

苦鹹涌泄爲陰發散歸于汗涌歸于吐泄歸于下滲爲解表同于汗洩爲利小便同于下殊不言補所
之人始可議補而他病惟先用三法攻去邪氣而元氣自復也素問一書言辛甘發散下淡滲虛無邪陽酸
矣若不去邪氣也邪氣中氣人可去之可也攪而留之可乎留之輕則久病非人素之物或自外入或自
內生皆邪氣也邪氣不敗治其氣中實舉世不省其誤此余所以著三法也夫病非人素之物或自外入或自
工能補其虛不敗治其氣中實舉世不省其誤此余所以著三法也夫病非人素之物或自外入或自
入身不過表裏氣血不過虛實良工先治其實後治其虛鹽工或治實或治虛謬工則實實虛虛惟庸

張子和汗吐下三法

神昏不足加
子硃砂知
神預皮
志地黃
腎氣不足加
志地黃
志地黃
肝氣不足加
天麻川
天麻川
肺氣不足加
冬五味子
冬五味子

膽氣不足加
仁地酸棗
仁地酸棗
脾氣不足加
藥益白芍
藥益白芍
心氣不足加
神葛蒲
神葛蒲

虛而損溺白加

厚朴
骨雞
陸蛇
桑龍

虛而小腸利加

虛而冷加黃連
黃西

虛而勞小便赤加

黃芩

虛而身強腰中不利加

杜仲
磁石

虛而驚悸不安加

草龍
若齒
客沙
參熱
即用
沙英
小龍
草若
齒不
冷則
不用
紫石
英小

虛而吸吸加子柏
胡麻
子覆
仁盆

虛而多忘加遠志
茯苓

虛而損加參乳
戟刺
天從

髓竭不足加歸地
當生

虛而小腸不利加澤瀉
茯苓

虛而痰復有氣加夏積
實生
薑半

虛而容熱加羌活
白皮
水黃

虛而多冷加附子
桂心
吳茱
頭黃

虛而多氣兼微欬加

大棗
五味

虛而口乾加知母
麥冬

虛而大熱加門冬
黃天

和

謂補者辛補肝藏補心甘補腎酸補脾苦補肺更相君臣佐使皆以發腠理致津液通氣血而已非今

醫極所洒髮也此以立神及爲始則上以素間也世

第四十二鼎

曰錫

五條田

義中樞

是非

俗所究而

晉王統

之本故載

四

此亦峯

平聲

異之

日豕首萊黃先生爲牡鷓鴣鳥啄使主四肢三十二節○立秋之日荇莒使主腹中七節保神辛蜀漆使主癰立豕首萊黃先生爲牡鷓鴣鳥啄使主四肢三十二節○立秋之日荇莒使主腹中七節保神辛蜀漆使主癰

藥對歲物藥品

病有八要六失不治

農々註

名兄神

燦大兒後慢驚下痢可但須寒積氣用之中病則止聚大瘡大秘也

必盡劑也

則止不聚大

用之中病積其餘大

寒熱積氣
必致殺人

不可但須下

堅非下不

燥小兒

[illegible]

石皂	南荑	黃柳	環華	搜煉	疏實	鼠郁	李仁	松芥	蘿草	藥雷	實根	蔓梓	椒皮	藥桐	華葉
石長	荑生	柳陸	華英	蓋連	草翹	牛石	仁扁	夏蘭	草枯	屈烏	丸草	巴鹿	豆藿	蜀蛋	椒休
羊姑	桃活	女別	青霽	茵商	陸辛	貫甘	羊衆	蕘白	花歛	牙青	子蘆	羊藿	菌吻	荒白	花及
大蛇	含蘂	常枯	漆山	蓂蜀	漆子	草天	蒿雄	旋白	花覆	藜虎	掌石	鴛鴦	尾灰	大白	聖泉
冬代	孔公	附戎	梗子	烏大	頭鹽	鹵鐵	落鹹	青玢	夏玢	舉銀	丹石	粉石	錫尾	大白	鏡泉
下品	藥二	百十	種五	種二	百十	種五	種二	石鴈	子龍	蟻蜂	房甲	蛇鱗	羊角	白鱗	鱷魚
鯉魚	膽黃	烏豚	魚卵	海麋	蛤脂	文丹	雄雞	石鴈	子龍	蟻蜂	房甲	蛇鱗	羊角	白鱗	鱷魚
髮桃	髮桃	杏核	白核	鹿茸	鹿茸	葱實	雄雞	石鴈	子龍	蟻蜂	房甲	蛇鱗	羊角	白鱗	鱷魚

白燕	王澤	營敗	白芍	葛理	雄	中	藥品	百	二十	種	白麻	女扶
棘	黃孫	蘭實	薔芷	藥根	石黃	黃	膠	冬葵	阿膠	冬葵	黃實	女扶
龍	枳	蜀防	白鮮	淫	蠶楮	長雌	石黃	樓石	黃	冬葵	黃實	女扶
眼	實泉	已微	皮藿	羊藿	實樓	石黃	石	硫	黃	冬葵	黃實	女扶
木	厚爵	牡微	酸	黃	瞿苦	石	石	菟	藟	冬葵	黃實	女扶
蘭	朴	丹衛	漿	麥	參	膽	黃	石	菟	藟	冬葵	黃實
五	秦	屈款	紫石	龍	參	胡	青	銀	水	冬葵	大乾	蜂
皮	加皮	子花	參	龍	參	胡	青	銀	水	冬葵	大乾	蜂
衛	秦	竹石	水	茅	秦	弓	扁	石	蜜	苦	葡	蜜
矛	椒	葉	草	萍	本	根	先	菊	青	膏	蠟	菜
合	山	藥	馬	王	狗	紫	百	當	膚	磁	牡	龍
歡	黃	木	蒿	瓜	香	菴	合	歸	青	石	蝟	骨
披	紫	吳	積	地	草	紫	知	麻	乾	水	龜	麝
子	蕨	黃	草	榆	藥	草	母	黃	薑	石	甲	香
梅	猪	根	女	海	兔	根	母	草	實	石	桑	熊
實	芥	皮	菴	藻	菴	根	貝	通	紫	起	胡	上

獸部 下品十二種 中品十一種 上品十七種

人部 下品三十五種 中品二

木部 下品七十九種 中品九十二種 上品七十九種

草部 下品七十八種 中品七十八種 上品七十八種 下品之上下六十三種 中品之上下六十二種 下品之上下六十五種

玉部 下品七十三種 中品八十七種 上品八十七種

一 百種圖經外類 續收入者 續收補入者 已 續收補入者 已 續收補入者 已

一 十三種海藥餘 八種食療餘

四 百八十八種陳藏器餘 二種唐本餘

一 十七種新定 本草所定者 已 本草所定者 已 本草所定者 已

二百九十四種有名米用
八十二種新補

一百三十七種今附

一百一十四種唐本先附

二百八十一種名醫別錄

二百六十七種神農本草經

新舊藥合一千八百一十二種

宋本草舊目錄李時珍曰舊品不見之錄也又見三品之混亂不錄也必泥所以占

木 蠹 螻 蛄 鼠 木
木 蠹 螻 蛄 鼠 木

蜚 蜈 蛭 伏 大 豆 黃 卷
蜜 蛇 蟻 翼

蜚 馬 陸 蠓 白頭蚯 蝦 腐 蟬 臺 婢

虜地 鱗馬 瓜
蟲 膽 蟠 刀 蒂

貝瑩石蟹苦
子火蠶瓠

衣雀蛇 魚龜蛇 六畜毛蹄甲

鼠 燻 猓 燕
婦 雞 皮 尿

水斑蠹 天鼠屎 蛭 猫 蟾 鼠屎

本草綱目第二卷終

圖經外類	種一百
有名未用	種一百一十四
菜部	種一百一十三
穀部	種一百一十七
米部	種一百一十八
果部	種一百一十五
蟲魚部	種一百一十六
禽部	種一百一十五

振 座口 春
電 本橋 日
話 本橋 日
一・一四六
三・七六一
八・八一七

刊 行 所

東京市日本橋區通丁三丁目八番地

印 刷 者
木 村 諭
東京市日本橋區通丁三丁目八番地

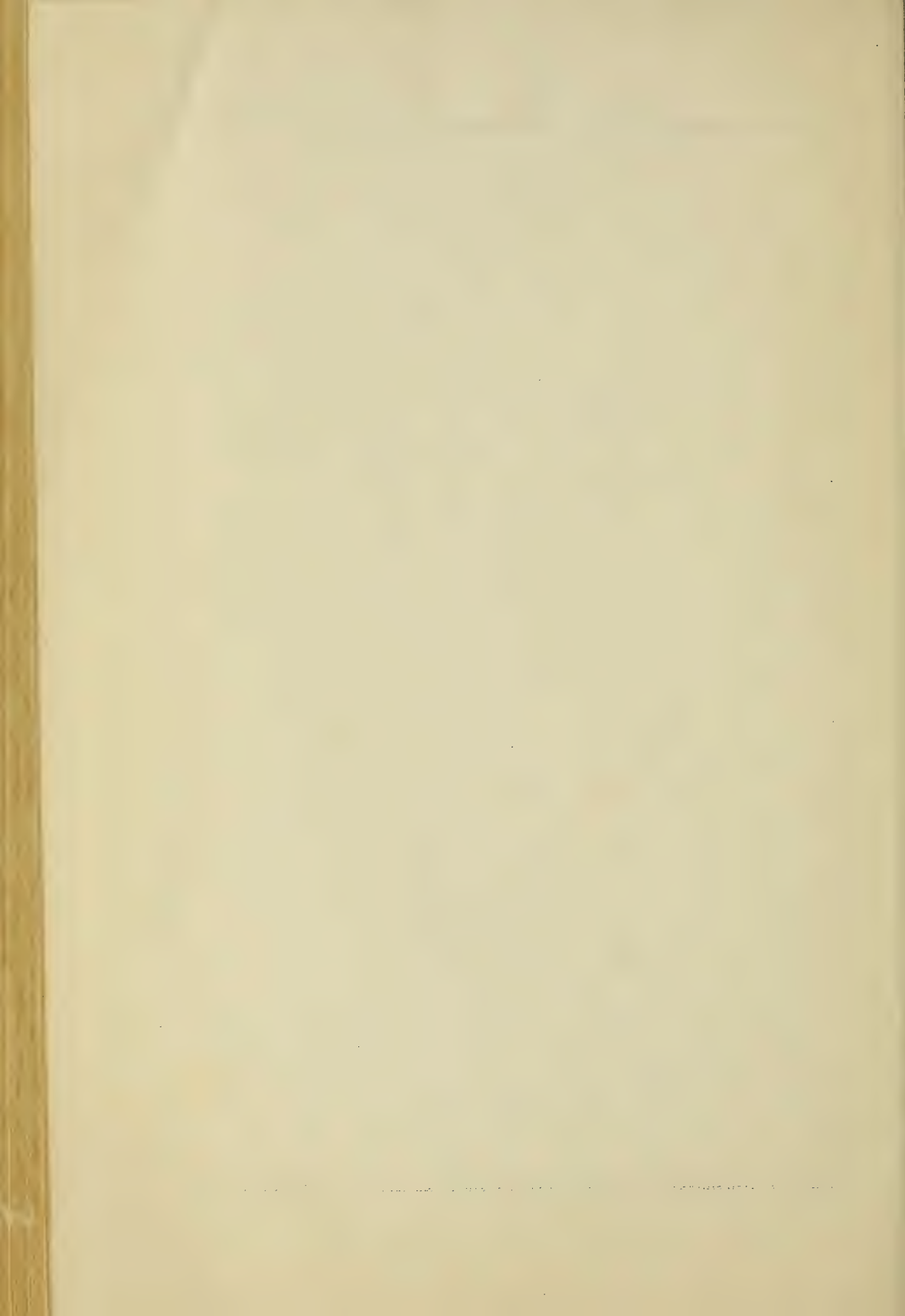
發 行 者
和 田 利
東京市日本橋區通丁三丁目八番地

監 修 者
鈴 木 眞
白 井 光 太郎

計頭 國譯 本草綱目 賣品

昭和四年六月十一日發行





目-4136

3 1378 00771 0083



7710083

大正十一年
 九月
 廿五日

京 出 版
東 春 陽 堂

